第Ⅳ章　遺　　物

1　木　　簡

木簡は、東院庭園の各所より出土している(Tab. 4)。出土遺構も、園池・柱穴・溝など多様である。ただし1遺構あたりの出土木簡点数は概して少ない。釈文は主要なものを巻末に掲げた。なお東院庭園の周辺では、東二坊坊間路(44次・99次・208次)・二条条間路(44次・120次・280次・284次)の側溝より、多くの木簡が出土している。そのような、東院庭園周辺より出土した木簡のなかには、宮内、さらには東院庭園より流出したものも含まれていると考えられる。特に、第99次調査の東二坊坊間路西側溝SD5780出土木簡は、天平18～20年(746～748)頃に宮内から流出した一括遺物と推定される。それら周辺出土木簡については、『平城宮発掘調査出土木簡概報』(以下『木簡概報』と略称する)を参照されたい。出土木簡はそれぞれ、第44次調査は『木簡概報』6号に、第99次調査は11号に、第110次調査は13号に、第120次調査は14号に、第245-2次調査は29号に、第276次調査は33号に、第280次・284次調査は34号に報告されている。

ここでは東院庭園出土木簡について、主なものを解説する。

Tab. 4　出土木簡

遺構の種類	出土遺構	次数	点数	木簡概報	備考
園　　池	園池SG5800X	120次	4点	14号	
	園池SG5800B	99次	10点	11号	
大垣関係	東面大垣東雨落溝SD5815	99次	1点	11号	
	東面大垣西雨落溝SD9040 側石抜取穴	245-2次	1点	29号	
	南面大垣下石組溝SD5830B	276次	727点	33号	うち削屑694点
建物遺構	各種柱穴	110次	14点	13号	
	柱根(SX9086)	110次	1点	13号	
	柱穴(東西橋SC8465)	99次	1点	未掲載	
溝・土坑	土坑SK9090	110次	20点	13号	
	斜行溝SD9041	110次	8点	13号	
	南北溝SD9092	110次	19点	13号	
	南北溝SD16300	245-2次	10点	29号	
	土坑SK16308	245-2次	1点	未掲載	
そ の 他	整地土	110次	3点	13号	
	包含層	110次	1点	未掲載	
計			821点		

＊「木簡概報」欄は、その木簡所載の『平城宮発掘調査出土木簡概報』の号数である。

A　園池SG5800出土木簡　(PL.37)

園池SG5800では、最下層園池SG5800Xと上層園池SG5800Bから出土した。ただし奈良時代には清掃が行き届いていたようで、全体的に奈良時代の遺物は出土量が少ない。その後、上層園池SG5800Bが平安前期に埋没する過程で多くの遺物が投棄されている。そのような出土傾向は、木簡も同様である。

「□□[炊ヵ]屋」等の造営

園池SG5800X　(1)は最下層園池SG5800Xの、護岸石の掘形裏込め土より出土した。最下層園池SG5800X造営時以前に廃棄された木簡と判断しうる。右側面の一部と上端を欠損する。「□□[炊ヵ]屋」などの建物の建築に使用する釘の数を書き上げたものである。裏面に記載されている釘の合計数から判断すると、「□□[炊ヵ]屋」以外にもいくつか建物が造営されていたことが想像される。園池SG5800X造営時に、周囲に多くの建物が造営されたことを示すだろう。「□[炊ヵ]」字は、火偏は確実だが旁はほとんど欠失している。「□炊屋」であるとすると、周囲の条坊側溝から厨房にかかわる木簡が出土していることが注目される(第99次・120次調査。『木簡概報』11・14)。すなわち、第99次調査の東二坊坊間路西側溝SD5780出土木簡は、先述のように天平18～20年(746～748)頃に宮内から流出した一括遺物と推定されているが、「贄殿」・「大炊寮」とある題籤軸を含むなど、その内容は「食料関係を扱う官司の文書類に集中」している(『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』―以下、『昭和51年度概報』と略称―19頁)。また第120次調査の二条条間路北側溝SD5200A出土木簡は養老年間(717～724)の年記を持つものを含み、その頃の木簡群と思われるが、その中に「大炊司前謹申」と記す文書木簡が出土している。これらの事実からは、最下層園池SG5800X造営頃より天平末年頃まで、食料関係を扱う部署が東院庭園の近辺に存在した可能性が高いと言えよう。

園池堆積土の木簡

園池SG5800B　(2)～(8)は、園池SG5800Bが埋没する過程で堆積した堆積土中から出土したものである。この土層からは8世紀後半から10世紀後半にかけての遺物が多く出土している。遺物の年代は9世紀が最も多く、その中には、土師器に「蔵人所」と墨書した9世紀の墨書土器も存在する(PL.88-238)。それらの遺物より、木簡も9世紀頃のものである可能性が高い。(3)「貞雄」・(4)「忠安」等の人名も、奈良時代よりは平安時代に多い人名である。

(2)～(4)はいずれもほぼ完形で、上部に切り込みをもつ032型式の木簡。人名と、その下に異筆で「○丈」とのみ記す。「方」字・「丈」字の字体の類似より、人名・「○丈」部分はそれぞれ3点同筆の可能性が高い。布の給付にかかわる木簡とも考えられている(『昭和51年度概報』16頁)。(5)は上端・下端を欠損するが、伯耆国河村郡河村郷の白米の荷札。伯耆国は『延喜式』民部下に定める年料舂米輸納国には入っておらず、都城における伯耆国の米の荷札の出土例もこの1点のみである。(6)は櫃の付札で、丁寧に整形している。これらの遺物からは、園池が埋没しつつある9世紀にも、近傍に「蔵人所」を持ち年料舂米を消費する施設が存在していたと考えることができる。

B　大垣関係遺構出土木簡　(PL. 37・38)

東　　薗

東面大垣東雨落溝SD5815　(9)は、「□[東ヵ]薗」からの物品進上木簡。東院庭園東側の東二坊坊間路西側溝SD5708からも、「東薗器運衛士并舎人料」として「糟五升」を請求する木簡が出土してい

る(第99次調査。『木簡概報』11)。東薗とは東院庭園を指すと考えるのも一案である(『昭和51年度概報』19頁)。だが、東薗とは他所にあり、そこから東院庭園周辺に物品を進上し、その進上木簡が東院庭園で廃棄されたと考えた方が自然だろう。「東薗」と記す木簡は、他に馬寮北側の東西溝SD6499(第63次調査、『木簡概報』8)・基幹排水路SD2700(第154次調査、『木簡概報』17)からも出土している。

東面大垣西雨落溝SD9040側石抜取穴　(10)は左側面・下端を折損する。表面に「狩」とあり、以下歴名と合点を記す。召文に類するものだろうか。

南面大垣下石組溝SD5830B　この溝は、上層園池SG5800Bの水を二条条間路北側溝SD5200に排水する南北溝である。木簡は、南面大垣下で石組溝に改修した部分の溝底堆積層より出土した。727点出土したが、そのうち削屑が694点を占めている。小片が多く釈読できるものは少ないが、考選関係の削屑が多く見られる。木簡の年代は、(25)に「天平神護二[年カ]□」(766年)とあり、そのころと思われる。(21)には人名の姓で「[吉カ]□弥侯」とあるが、これは天平宝字元年(757年)に「君子部」が「吉美侯部」に改められ(『続日本紀』天平宝字元年3月乙亥条)、「吉弥侯部」となったものである。本木簡群からは、SD5830Bの年代を天平神護年間頃と確認でき、またその時期、近辺に考選木簡を扱う部署が存在したことを知ることができる。

考選木簡

SD5830Bの年代

C　建物遺構出土木簡　(PL.39・40・41)

建物遺構から出土した木簡のほとんどは、園池SG5800北側建物群の柱穴から出土した。ただし、(38)のみは園池SG5800B中の東西橋SC8465東北隅の柱穴からの出土である。

東西棟建物SB9065　(28)は下端は折れているが、上端・左右側面は原形をとどめる。裏面の文字は左右側面が削られている。裏面の文字を記した後、木簡を加工・整形し、表面の文字を記したのだろう。(29)は上端を折損するが、歴名と合計人数を記した文書簡で、人名には合点を打っている。その後天地逆にして習書がなされ、最終的には刃物を入れて切断・廃棄している。

東西棟建物SB9068　(30)は木目からみて左側面を折損する。その部分の文字が失われているが、地名は播磨国賀茂郡上鴨郷に相当しよう。行を左から右に書いている。(31)は、「乃止」が郷または里名、「三家人羽志」が人名である。『和名類聚抄』の若狭国三方郡能登郷にあたる。若狭国には三家人姓が多く分布する。米6斗を貢進しているので、庸米の荷札だろう。(32)は、上下端を欠損する。表裏とも文書簡として使用した後、その左右に二次的に習書したものだろう。本来の文書簡は「若子御前」「恐恐受給」の表現より、「某の前に白す」などの様式をもつ、いわゆる前白木簡形式の上申文書と思われる。

前白木簡

東西塀SA9064　(35)は用途未詳の木製品に墨書する。左側面は割れている。下端の木口にも墨付があるが、文字ではない。

東西塀SA9060　(36)は下部左側を欠損する。ここには年号が記されていたものと思われる。また下端も文字が切られており、二次的切断と考えられる。隠岐国周吉郡山部郷の荷札は、二条大路木簡などに多く見える。ただし『和名類聚抄』には山部郷は存在せず、後に消滅した郷である。

柱SX9086　(37)は柱根。柱は手斧で丁寧に加工し、1辺9㎝の11角形に整形する。その1辺の中央に工人名のみを記す。11角形の柱に整形した後、墨書して地中に据えたのだろう。柱上端

柱根に工人名

は二次的に切断する。上端から墨書までは約16㎝、墨書から下端までは約27㎝の余白がある。「春」は「春日」の省略形として用いられることがある。

板屋根の番付

東西橋SC8465　(38)は柱の礎板。右側面を折損するが、大和葺の板屋根の材を礎板に転用したものである。墨書はその板屋根の番付だろう。

D　溝・土坑出土木簡　(PL.39・41・42)

南北溝SD16300は東肩を東面大垣西雨落溝に切られており、大垣造営以前の溝である。この溝と斜行溝SD9041とは連続する溝である可能性が高い。

参河国碧海郡

土坑SK9090　(39)は下端と左側面を欠損する。参河国碧海郡の里名を列記した木簡である。里制段階の木簡なので、霊亀3年(717)以前の作成である。里名に1字・3字表記のものを含む点も古体を示す。『和名類聚抄』には、参河国碧海郡の郷には、智立・采女・刑部・依網・鷲取・谷部・大市・碧海・横礼・皆見・河内・桜井・小河・大岡・薛野・駅家が挙がっている。本木簡表面の「妹里」が采女に、「知□[立ヵ]里」が智立に、「長谷マ里」が谷部に対応する。「□マ里」は刑部だろうか。裏面の「青見里」は碧海である。「□□□[和之取ヵ]里」は、「□[取ヵ]」字の耳偏は確実。「□□[和之ヵ]」字のバランスは悪い。ただ、『和名類聚抄』では鷲取の和訓を「和之止利」と記し、また『延喜式』神名式には碧海郡に「和志取神社」がみえる。それらの点より「□□□[和之取ヵ]里」と釈読し、鷲取に対応すると判断した。末尾の前里と石寸里については『和名類聚抄』には対応郷名がない。後に消滅した郷だろうか。一方、『和名類聚抄』には見えるが本木簡にない郷も10郷存在している。それらは、木簡の欠損部に記されていた可能性はある。

斜行溝SD9041　(43)は下端のみ原形をとどめる。類似の地名には、『和名類聚抄』能登国珠洲郡に若倭郷、相模国足下郡に和戸郷が存在する。(44)は上端は生きているが下端は折れ。左右側面は二次的に削っている。

(45)は、「朝臣」の下の2文字は大ぶりに書く。自署であることを意識した書き方に見える。「朝臣」の次の1字のへんはにくづきだが、つくりは欠失する。

南北溝SD16300　(47)は、左右側面は割れ。下端は二次的に削っている。召文。人名は被召喚人だろう。人名に尻付風の注記があり、「朱雀門」「子身陵」などとある。その人物の居場所を注したものか。本木簡に「朱雀門」とあることは、東面大垣造営以前に朱雀門が存在した可能性が高いことを示すだろう。「子身陵」は不明。

朱雀門

南北溝SD9092　(48)は、歪んではいるがほぼ六面体に整形する。そのうちの3面に墨書が見られる。

E　整地土・包含層出土木簡　(PL. 41・42)

整地土　(57)は上端のみ原形を保つ。下部は朽損する。表面1行目の1字目は、「通」字の「マ」の部分のみを書いたもの。また裏面3行目の「臣」字も書きかけである。表面には、文字ではない二次的な墨付がある。

布の付札

包含層　(58)は上端を欠損するが、上部の切り込みがわずかに遺存する。個人用に作成された布の付札と思われる。

2　瓦塼類

東院庭園地区より多量の瓦塼類が出土した。最も数量が多いのは丸・平瓦であり、次いで軒瓦が多く、少量の塼、道具瓦、文字瓦、施釉瓦などがある。そのほとんどが奈良時代のものであるが、それより古い時期の瓦をわずかに含む。奈良時代より新しい時期の瓦は中、近世ないし近代以降に限られるので、ここでは取り扱わない。

ここでは軒瓦を中心に、出土した瓦の内容を報告する。平城宮・京から出土する軒瓦は、すでに『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』[1]等で、笵型やその彫り直しに基づく詳細な分類をおこなっており、ここでもその分類に従う。

軒瓦の報告では、型式・種ごとに文様と製作技法の特徴を解説する。文様は、分類の指標となる点を記し、他と共通する部分はなるべく説明を省略する。瓦当面の拓本と断面図（縮尺1／4）、写真、各部位の計測表（内・外区の数値は復原値を含む。表中の略称、記号は『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』に従う）を図版編に所収し、地域別出土点数は本編巻末の別表1、2にまとめた。本文中には各型式・種の標本的資料の拓本（縮尺1／6）、細かく説明したものは拓本や断面図（縮尺1／4）を入れた。軒瓦各部の名称は『平城報告XⅢ』[2]に従う。

A　軒丸瓦

軒丸瓦は31型式78種、計888点出土した（型式が判明するものは653点）。これらは文様により素弁蓮華文、単弁蓮華文、複弁蓮華文に大別できる。以下、この大別に従って説明する。

間弁の形態は各間弁が独立するA系統、隣接する間弁の先端が連結するB系統に分け、間弁がないものをC系統とする。外縁の断面形態は、内側が内傾し上端に平坦部をもたない三角縁、内側が内傾し上端に平坦部をもつ傾斜縁、内側が地に対してほぼ垂直に落ちる直立縁に分ける。さらに傾斜縁は内側が直線的なⅠ、匙面状に内湾するⅡ、丸みをもって外反するⅢに分ける。

なお、製作技法については、大半が丸瓦部と瓦当部を別につくって接合する接合式で、両者を同時につくる積み上げ技法の一本作り（今回対象とする一本作り軒丸瓦はいずれも積み上げ技法によるので、以下、一本作り式と略する）は特定の型式に限られる。また、丸瓦部と瓦当部の接合部分の形態を示す接合線は、半円形をなすものがほとんどである。そこで接合式および接合線が半円形の場合は記述を省略し、それ以外の場合や、対象の資料ではそれらが不明な場合に限って説明することにする。

ⅰ　素弁蓮華文軒丸瓦（1点、PL.45）　　素弁蓮華文

弁端の反転を桜花状の切込で表現する弁端切込の素弁10弁蓮華文で、中房が突出し、周囲にやや太い圏線がめぐるもの。蓮子は1＋5で外縁は直立縁。姫寺廃寺と同笵である[3]。姫寺廃寺例は海竜王寺、飛鳥寺(B)と同笵が指摘されており[4]、本例も同笵の可能性が高い。

Fig. 29　軒丸瓦1

ⅱ　単弁蓮華文軒丸瓦　（10型式27種、PL.45～47）　　単弁蓮華文

6131型式　　中房が突出し、蓮子は1＋8。外区に凸鋸歯文をめぐらし、外側の圏線を欠く。A・Bの2種があり、いずれも出土した。

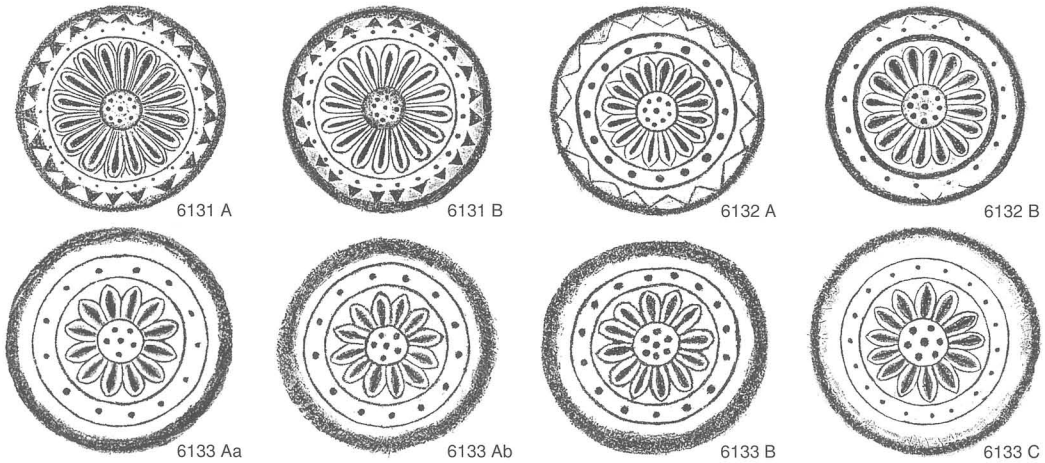


Fig. 30　軒丸瓦２

Ａ（４点、PL.45）　弁端が丸く、弁の輪郭線と間弁が細い。間弁はＡ系統である。蓮子、珠文が共に小粒である。外縁は傾斜縁Ｉである。瓦当裏面の端部付近にヘラケズリを施す。堅緻に焼き上がり、暗灰褐色を呈する。

Ｂ（２点、PL.45）　弁が離れ間弁を欠く（Ｃ系統）。珠文はＡより大きい。外縁は傾斜縁Ｉ。瓦当裏面に縦ないし斜め方向のナデを施す。接合線は不明。焼成はやや良好で暗灰色を呈する。

6132型式　中房に１＋８の蓮子をおく。間弁がなく（Ｃ系統）、弁が接する。外区に珠文帯、外縁に線鋸歯文がめぐる。Ａ・Ｂの２種があり、いずれも出土した。

Ａ（５点、PL.45）　内区が若干盛り上がる。外区は中房、内区より一段低く、珠文帯の内外両側に高い圏線をめぐらす。外縁は傾斜縁Ｉである。丸瓦部凹面の中ほどから瓦当裏面まで連続して縦ナデを施したのち、接合部に横ナデないし指オサエを施す。瓦当裏面の端部付近にはヘラケズリを施す。丸瓦部凸面に縦ヘラケズリを施す。堅緻に焼き上がり灰色を呈する。

Ｂ（１点、PL.45）　Ａに比べ全体的に平坦である。外区珠文帯内側に太い圏線をめぐらせるが、外側には圏線がない。Ａと同じく丸瓦部凹面から瓦当裏面の上半まで連続した縦ナデを施し、瓦当裏面の下半は丁寧な縦ナデないしヘラケズリを施す（PL.45）。その痕跡からナデないしケズリに使用した工具は、先端が丸いか、弾力をもつものと判断できる。堅緻に焼き上がり灰白褐色を呈する。

6133型式　間弁がなく（Ｃ系統）、Ｒを除き弁が接し、外区に珠文帯がめぐり、外縁が素文のもの。Ａ～Ｄ、Ｉ～Ｓの15種があり、Ａ～Ｄ、Ｉ、Ｌ、Ｍ、Ｐ、Ｑ、Ｓ種が出土した。

Ａａ（５点、PL.45）　蓮子は１＋５で、12弁ある蓮弁は短く先端が尖る。外縁は傾斜縁Ｉである。中房の圏線や弁の輪郭線を彫り直す前の段階をＡａとして区別する。瓦当裏面は縦ヘラケズリを施していると思われるが、不明瞭ではっきりしない。瓦当裏面の中央がやや凹むものがある。焼成はやや良好で暗灰色～黒灰色を呈する。

Ａｂ（３点、PL.45）　Ａａの中房圏線や弁の輪郭を彫り直したもの。彫り直した部分はＡａに比べ均整を欠き、中房圏線は不整形になる。丸瓦部凹面の中ほどから瓦当裏面上半にかけて、連続した縦ヘラケズリを施す（PL.45）。その痕跡から工具は先端に丸みや弾力をもつものと判断できる。瓦当裏面の下半は横ケズリが混じる。接合部に横ないし縦方向の指ナデを残すものもある。丸瓦部凸面は縦ケズリを施す。焼成は良好で暗灰色～黒灰色を呈する。

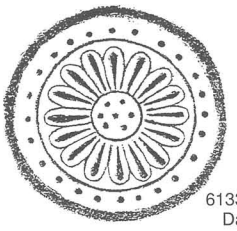


Fig. 31 軒丸瓦３

Ｂ（１点、PL.45）　蓮子は１＋６、弁は12弁で先端が尖るものと丸いものが混じる。珠文帯の外側に圏線がめぐる。外縁の断面形は直立縁である。接合部に縦ナデを施す。瓦当裏面は残りが悪く調整が不明である。焼成はやや甘く淡茶褐色を呈する。

Ｃ（２点、PL.45）　蓮子は１＋６、弁は13弁で先端が尖る。外縁は傾斜縁Ｉ。瓦当裏面にナデを施し、端部付近を平坦に削り中央が凹む。接合部は横ナデを施す。焼成はやや甘く、暗灰色を呈する。

Ｄａ（１点、PL.46）　弁端は丸く、外区珠文帯の外側に圏線がめぐらない。中房を凸に彫り直す前の段階をＤａとして区別する。丸瓦部凹面中ほどから瓦当裏面に向かって、連続した縦指ナデないしケズリを、並列して右から左へ順番に施す。瓦当裏面でナデがおよんでいない部分には、ナデを施す以前の縦ヘラケズリが残る。瓦当裏面中央を凹ませ、端部付近にヘラケズリを施して平坦に面取りする。堅緻に焼き上がり暗灰色～灰褐色を呈する。

Ｄｂ（20点、PL.46）　Ｄａを彫り直し中房を突出させたものである。２通りの調整技法が認められる。一つ目は、丸瓦凹面から瓦当裏面まで連続して、縦方向のナデ、ないし丸みをもつヘラ工具によるケズリを施し、丸瓦部の側面から連続して瓦当裏面下端にヘラケズリを施すものである（PL.46-1）。もう一つは、接合部に横ナデを施し、接合部から瓦当裏面に連続した縦方向のナデ、ないし丸みをもつヘラ工具によるケズリを施し、さらに瓦当裏面下端にはみ出した粘土を指オサエにより調整したものである（PL.46-2）。笵傷や笵の傷み、摩耗の程度によって３段階に分けることができ、調整技法が変化する。すなわちＩ、Ⅱ段階では前者の調整手法を用いているが、Ⅲ段階では前者と後者の手法が混じる。このことからみて、前者から後者に調整技法が変化したと考えられる（Fig.32）。堅緻に焼き上がり灰白褐色を呈する。

Ｉｂ（１点、PL.46）　6133型式の中ではＬに次いで瓦当径が大きいが、中房の径は他種とそれほど大きな違いはない。弁端は丸く、外縁は傾斜縁Ｉである。蓮子や圏線、弁の輪郭線、外区の珠文や圏線を太く彫り直したものをＩｂとして区別する。今回報告する例は残りが悪く、瓦当裏面の技法は不明である。焼成は甘く淡黄灰色を呈する。

6133Dbの変　　遷

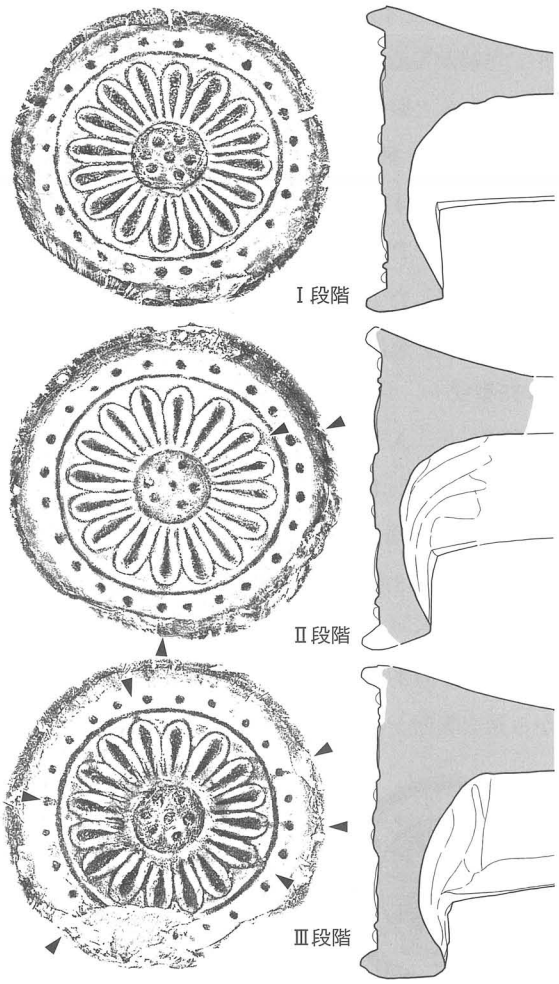


Fig. 32 6133Dbの変遷（１：４）

L（３点、PL.46）　6133型式の中で最大。突出した中房の径も大きく、１＋５＋８の蓮子をおく。弁端が尖り、外区珠文帯外側の圏線を欠く。外縁は直立縁。瓦当裏面に縦ケズリらしき痕跡を残すが不明瞭。焼成はやや甘く灰褐色～淡黄褐色を呈する。

M（10点、PL.46）　中房が突出し、弁の先端が尖る。珠文帯の外側に圏線がめぐらない。外縁は直立縁である。丸瓦部から瓦当裏面に向かって連続したナデを施す。瓦当裏面中央を若干凹ませるものがある。堅緻に焼き上がり灰褐色～明灰褐色を呈する。

P（１点、PL.46）　蓮子は１＋４で弁端は丸いが、二重目の蓮子に対応する弁の先端は尖る。外縁は直立縁である。製作技法、接合線は不明。焼成は良好で黒灰色を呈する。

Q（15点、PL.46）　蓮子は１＋６で弁端が尖る。外区に16個の珠文をまばらにおき、珠文帯外側の圏線を欠く。外縁は直立縁で、外縁上面の幅が広い。接合部から瓦当裏面にかけて連続した縦ヘラケズリないしナデを施す。焼成は良好で黒褐色～灰褐色を呈する。

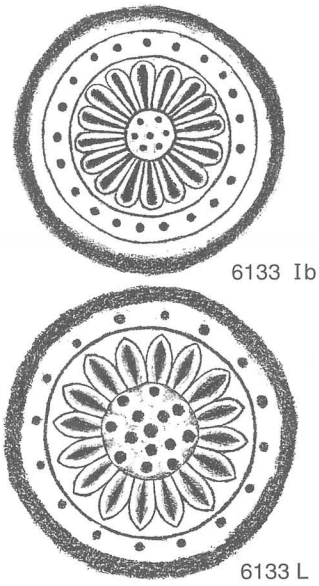


Fig. 33　軒丸瓦４

S（１点、PL.46）　6133型式で径が最も小さい。小さい中房に１＋５の蓮子をおく。蓮弁は８弁で先端が尖るものと丸いものが混じる。外区珠文はまばらで外側に圏線がめぐる。外縁は直立縁である。製作技法は不明。焼成はやや甘く褐灰色を呈する。

6134型式　独立したＡ系統の間弁が中房からのびる。外区に珠文帯、外縁に線鋸歯文がめぐる。Ａ～Ｄの４種があり、Ａが出土した。

Ａｂ（１点、PL.47）　弁が細く弁端は丸い。間弁の先端は八字状に開く。Ａａの蓮子、珠文を太く彫り直したものである。外縁は直立気味の傾斜縁Ｉである。瓦当裏面の調整は不明で、接合部に横ナデを施すが接合線は不明である。焼成はやや良好で暗灰褐色を呈する。

6135型式　弁が分離し、間弁が弁端に楔状に入る。外縁は低い三角縁である。Ａ～Ｃ・Ｅの４種があり、Ａ～Ｃが出土した。

３種の調整技法

Ａ（30点、PL.47）　径の小さい中房が半球状にゆるやかに盛り上がり、１＋６の蓮子をおく。弁は12弁で先端が丸い。珠文は楕円形に近く、外縁は低い三角縁である。瓦当裏面と接合部の調整は大きく３種類ある。第１は接合部に横ナデないし指オサエを施し、瓦当裏面に横ないし斜め方向のヘラケズリを施すものである（PL.47）。この調整技法の資料には、側面に布目がつくものが１点ある。また、接合部に横ヘラケズリを施すものも１点ある。第２は、丸瓦部凹面から瓦当裏面上半に縦ナデないし指オサエを施し、瓦当裏面下半に横ないし斜め方向のナデを

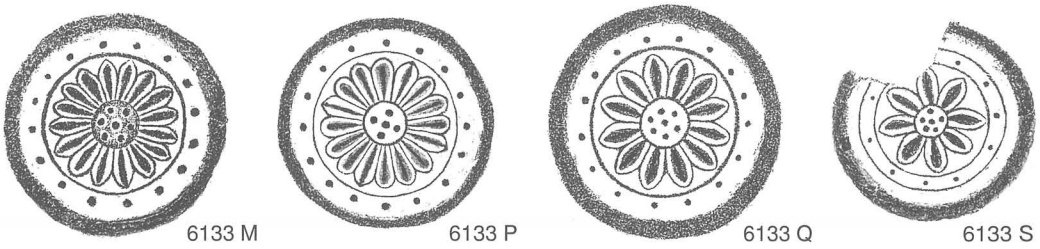


Fig. 34　軒丸瓦５

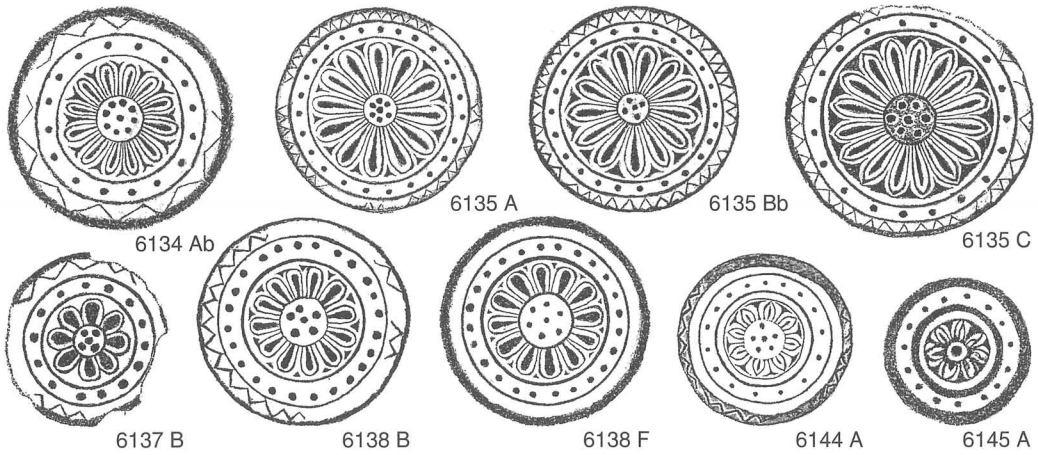


Fig. 35　軒丸瓦６

施すものである。瓦当裏面下半に縦ヘラケズリを施すものも１点ある。第３は丸瓦部凹面から瓦当裏面上半に縦ナデを施すが、接合部のみ横ナデを施し、瓦当裏面下半は横ヘラケズリを施すという、前の二者の折衷形である。瓦当側面に布目がつくものがある。丸瓦部凸面は縦縄タタキの後、縦ヘラケズリを施す。丸瓦部に粘土板の継ぎ目を残すものがある。焼成は良好で灰褐色～暗灰色のものと、堅緻に焼き上がり黒褐色を呈するものがある。

Ｂｂ（１点、PL.47）　中房、弁、外区の形状はＡとよく似るが、蓮子が１＋４で、弁数は13弁である。やや尖り気味の弁端と珠文帯内側の圏線との間隔が、Ａと比べて若干広い。中房圏線および外区珠文を２度にわたって彫り直し、それぞれＢａ、Ｂｂ、Ｂｃとして区別し、Ｂｂが出土した。接合部から瓦当裏面上半にかけて連続する縦指ナデを施し、下半は横ないし斜め方向のヘラケズリを施す(PL.47)。丸瓦部凹面には粗い縦指ナデを施すが、一部に糸切り痕が残る。丸瓦部凸面は縦ヘラケズリを施す。堅緻に焼き上がり灰白褐色を呈する。

Ｃ（１点、PL.47）　同型式の他種に比べて瓦当径が大きい。中房も径が大きく、中央に向かって若干盛り上がる。弁端は尖る。珠文帯の幅が広く、珠文の間隔が粗い。残りが悪く、調整技法、接合法、接合線ともに不明である。焼成はやや甘く黒褐色を呈する。

6137型式　瓦当径がやや小さく、弁も短い。間弁がない（Ｃ系統）ものと、中房からのびないＡ系統の間弁をもつものがある。Ａ～Ｃの３種があり、Ｂが出土した。

Ｂ（１点、PL.47）　蓮子は１＋４で間弁はない。圏線が太く、蓮子や珠文が大粒で、全体的に凹凸が少なく平坦である。外縁は傾斜縁Ｉである。瓦当裏面上半に縦ナデ、下半に横ナデないしケズリを施す。接合部を欠き調整および接合線は不明。焼成は良好で黒灰色を呈する。

6138型式　弁端が丸く、三角形あるいは水滴形の間弁が弁端に付近に入る。Ａ～Ｃ・Ｅ～Ｌの11種があり、Ｂ、Ｆが出土した。

Ｂ（３点、PL.47）　中房に大粒の蓮子を１＋５顆おく。内区を一段高くつくり、外区内側の圏線が特に突出する。珠文が大粒で外縁の線鋸歯文が太い。瓦当裏面に横ないし斜め方向のナデを施し、接合部に横指ナデないし指オサエを施す。焼成はやや良好で暗灰褐色を呈する。

Ｆ（２点、PL.47）　蓮子は１＋６でやや小粒である。内区は一段高く、弁が離れる。外区外側より内側の圏線が太く突出する。外縁は素文で傾斜縁Ｉである。接合部と瓦当裏面に指頭ないし先端に丸みをもつヘラ工具による縦ケズリを施す。堅緻に焼き上がり暗灰褐色を呈する。

6144型式　Ｔ字状に開く間弁先端と弁端に接して、細い圏線がめぐる。外縁は直立縁で、上面に線鋸歯文を配する。Ａ種のみ。

Ａ（１点、PL.47）　蓮子が１＋５で中房と内区の間の圏線を欠く。凹凸が少なく全体的に平板である。外縁は直立縁である。残りが悪く調整、接合法、接合線ともに不明。焼成はやや甘く淡茶褐色を呈する。

6145型式　中房に大粒の蓮子を一顆おく。間弁はＢ系統。Ａ種のみ。

Ａ（１点、PL.47）　全体的に平板で瓦当径が小さい。外区珠文帯の圏線の内側が太く、外側はない。外縁は直立縁である。残りが悪く、調整、接合法、接合線ともに不明。焼成はやや甘く灰褐色を呈する。

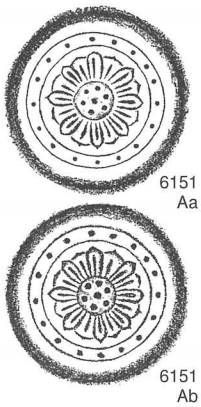


Fig. 36　軒丸瓦７

6151型式　匙状に弁央が凹んだ細い弁の間から、幅広い花弁形の間弁がのぞく。弁、間弁とも端が尖る。外区は珠文帯が一段高く、外縁は素文。この型式には施釉製品があるが、今回は出土していない。Ａ・Ｂの２種があり、Ａが出土した。

施釉はなし

Ａａ（１点、PL.47）　中房、珠文帯がわずかに突出し、弁もわずかに盛り上がるが、全体的に凹凸が少ない。外縁は直立気味の傾斜縁Ｉである。弁、間弁の基部が中房から離れているものをＡａとして区別する。接合部から瓦当裏面にかけて横ヘラケズリを施す。接合部には横ナデを施す部分もある。丸瓦部凹面は側面付近の下半に限って縦ナデを施す。丸瓦部凸面には縦ナデを施す。焼成は良好で明灰色～黒灰色を呈する。

Ａｂ（３点、PL.47）　Ａａの弁、間弁の基部が中房につくように彫り直したものである。瓦当裏面に横ナデを施し、端部付近には面取りのヘラケズリを施す。接合部を欠き、調整および接合線は不明。焼成はやや良好で茶白褐色を呈する。

複弁蓮華文

ⅱ　**複弁蓮華文軒丸瓦**（20型式50種、PL.48～55）

6225型式　中房の径が大きく、Ａ系統の間弁がＹ字状に開く。外区は２重圏線のみで珠文帯を欠き、外縁には凸鋸歯文をめぐらす。Ａ～Ｅ・Ｌの６種があり、Ａ、Ｃが出土した。

Ａ（32点、PL.48）　径の大きな中房に大粒の蓮子をおく。弁端が尖り、間弁が中程から開き始め、先端では大きく開く。外区の２重圏線は、内側をやや太くつくる。外縁の凸鋸歯文は大ぶりで外縁の断面形は傾斜縁Ｉである。製作技法が分かるものはすべて一本作り式である。接合部と瓦当裏面に横ナデを施す（PL.48-1）。製作技法が判別できないものの中には、少数ながら、接合部と瓦当裏面上半に横ナデを施し、下半に縦ナデを施すもの（PL.48-3）や、接合部から瓦当裏面に連続した縦ナデを施し、瓦当裏面下半に横ナデを加えたのち、下端にはみ出した粘土を押さえたものがある（PL.48-2）。いずれの技法でも、瓦当裏面の中央を強く凹ませるものがある。堅緻に焼き上がり暗灰色～灰褐色を呈する。

６２２５Ａは一本作り式

Ｃ（３点、PL.48）　Ａより面径がやや小さく、蓮子が小粒で弁端は丸く、間弁の開き具合が小さい。外区の圏線が細く、外縁の凸鋸歯文もＡより小さい。外縁の断面形は傾斜縁Ｉである。接合式と一本作り式がある。接合式のものは瓦当裏面上半に指オサエ、下半に横指ナデを施す。接合部は横ナデを施すものがある。接合線はやや台形に近い半円形である（PL.48-2）。一本作り式のものは、瓦当裏面に横ナデを施す（PL.48-3）。接合法は不明だが、瓦当裏面上半に縦方向のケズリないしナデ、下半の一部に横ナデを施し、瓦当下端にはみ出した粘土を押さえるものがあり、6225Aと共通する（PL.48-1）。堅緻に焼き上がり黒灰色を呈する。

６２２５Ｃは接合式と一本作り式

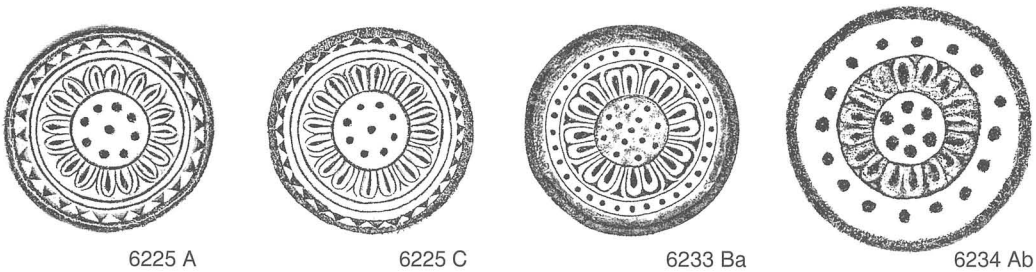


Fig. 37　軒丸瓦８

6233型式　藤原宮所用で外縁が素文のものである。外区には珠文をめぐらす。間弁はＡ系統で、他の藤原宮所用軒丸瓦に比べて瓦当径が小さい。間弁はＡ系統で先端は小さく開く。珠文を密にめぐらせる。Ａ・Ｂの２種があり、Ｂが出土した。　藤原宮所用

Ｂａ（１点、PL.48）　突出した中房に圏線がめぐらず、１＋４＋８の蓮子の外側８顆と蓮弁が対応する。素文の外縁に線鋸歯文を彫り加える前の段階をＢａとして区別する。外縁は傾斜縁Ⅱである。瓦当裏面と接合部に横ナデを施す。焼成は良好で明灰褐色を呈する。

6234型式　蓮弁８弁、外縁素文の東大寺式軒丸瓦で、間弁Ｃ系統のもの。Ａ種のみ。　東大寺式

Ａｂ（１点、PL.48）　中房蓮子、外区珠文とも大粒である。外区圏線は内側を凸線とするが外側は段差のみである。外縁は直立縁である。弁を彫り直して弁間を突出させたものをＡｂとして区別する。小片のため技法等は不明であるが、瓦当側面に縄タタキ痕が残る（PL.48）。焼成は良好で淡黄褐色を呈する。

6238型式　蓮弁８弁、間弁Ｂ系統で外区に珠文帯をおき、外縁素文のもの。Ａ種のみ。

Ａａ（１点、PL.48）　間弁と中房を彫り直す以前の段階をＡａとして区別する。瓦当裏面上半に横ヘラケズリ、下半に横ナデを施す。下端付近に非常に細かい布の上から施した指オサエの痕跡が残る。接合部は丸瓦部凹面の中ほどから連続する縦ナデののち、横ヘラケズリを施す。丸瓦部凸面は玉縁部と筒部の玉縁部寄り５㎝程度に横ナデを施し、残りの筒部に縦ナデを施す。焼成は良好で黒灰色を呈する。

6273型式　藤原宮所用で外区に珠文、外縁に凸鋸歯文をめぐらせるものである。Ａ～Ｄの４種があり、Ａ～Ｃが出土した。

Ａ（３点、PL.49）　中房がわずかに突出し、径は他種に比べてやや大きめで、弁全体が盛り上がる。中房からのびる間弁はやや太めで先端が楔状になる。外縁は傾斜が急な三角縁である。接合部に縦、斜め方向のユビないし先の細い工具によるナデを施し、瓦当裏面に縦、斜め方向のナデを施す。堅緻に焼き上がり明灰褐色を呈し、黒色粒を多く含む。

Ｂ（２点、PL.49）　中房がわずかに突出し、弁はＡに比べてやや平坦だが、弁端が反りあがる。外縁は三角縁で、縦長の凸鋸歯文をめぐらす。瓦当裏面に縦、斜め方向の指ナデを施すが、端部付近が未調整のものもある。接合部は丸瓦部凹面の瓦当部寄りから連続する縦指ナデののち、先端が直径0.8㎝程度の円形をなす工具で、横方向に掻き取るようにケズリを施す。焼成は良好で明灰色～灰褐色を呈するものと、堅緻に焼き上がり明灰褐色を呈するものがある。

6274型式　藤原宮所用の間弁Ａ系統で外区に珠文、外縁に線鋸歯文をおくもののうち、各蓮子の周囲に圏線がめぐるものである（ただしＡｂ、Ａｃは彫り直しにより圏線消滅）。Ａ、Ｂの２種があり、Ａが出土した。

Ａｃ（１点、PL.49）　わずかに突出した中房に１＋５＋９の蓮子をおく。外縁は三角縁である。彫り直しにより蓮子周囲の圏線を消し、外縁上に圏線をめぐらすものをＡｂ、さらに蓮子の中央１顆と二重目の５顆を凸線で連結したものをＡｃとして区別し、Ａｃが出土した。瓦当裏面に斜めナデ、接合部に横ナデを施す。堅緻に焼き上がり暗青灰色～黒灰色を呈する。

6275型式　藤原宮所用で間弁Ａ系統、外区に珠文、外縁に線鋸歯文を配するもので、蓮子周囲に圏線がめぐらないものである。Ａ～Ｅ・Ｇ～Ｋ・Ｎの11種があり、Ａ、Ｄが出土した。

Ａ（４点、PL.49）　高く突出した中房に１＋４＋12の蓮子をおく。外縁は傾斜縁Ｉである。丸瓦部凹面から接合部にかけて連続して斜めナデを施し、瓦当裏面の上半に縦方向、下半に横方向のナデを施す。瓦当裏面および接合部に横ナデを施すものもある。瓦当面の笵傷がかなり進んだものでは、接合部から瓦当裏面上半に縦ヘラケズリ、下半に横ヘラケズリを施すものがある。堅緻に焼き上がり暗灰色～灰褐色を呈する。

Ｄ（２点、PL.49）　わずかに突出した中房に１＋４＋８の蓮子をおく。細い弁は先端が尖り気味である。間弁はＡ系統であるが、一部にＢ系統が混じる。外縁内側の斜面幅が広い三角縁で大ぶりの線鋸歯文をめぐらす。瓦当裏面の上半に丁寧な縦ナデ、下半に横ナデないしケズリを施す。接合部を欠き接合線や調整は不明。堅緻に焼き上がり暗灰色～灰褐色を呈する。

6281型式　藤原宮所用のうち間弁がＢ系統のものである。蓮子を３重にめぐらす。Ａ～Ｃの３種があり、Ａ・Ｂが出土した。

Ａ（２点、PL.49）　中房が突出せず、弁の表現も線的で平坦なため凹凸に乏しい。蓮子は１＋４＋８で外縁は三角縁。接合部に横ナデ、瓦当裏面に横方向のナデないしヘラケズリを施す。丸瓦部先端付近の凹凸面に斜格子刻みを入れるものがある。焼成は堅緻で黒褐色を呈する。

Ｂａ（２点、PL.49）　突出した中房に１＋８＋８の蓮子をおく。外縁は三角縁である。外縁外側を付け加える前の段階をＢａとして区別する。接合部に縦ユビナデを施すものと横ナデを施すものがある。瓦当裏面には横ナデを施す。焼成は良好で淡灰褐色～明灰褐色を呈する。

6282型式　間弁Ｂ系統で、蓮子中央の１顆のみ大粒のもの（Ａを除く）。弁を線彫りで表現し、珠文帯の圏線が太い。Ａ～Ｅ・Ｇ～Ｉ・Ｌの９種があり、Ａ・Ｌを除く各種が出土した。

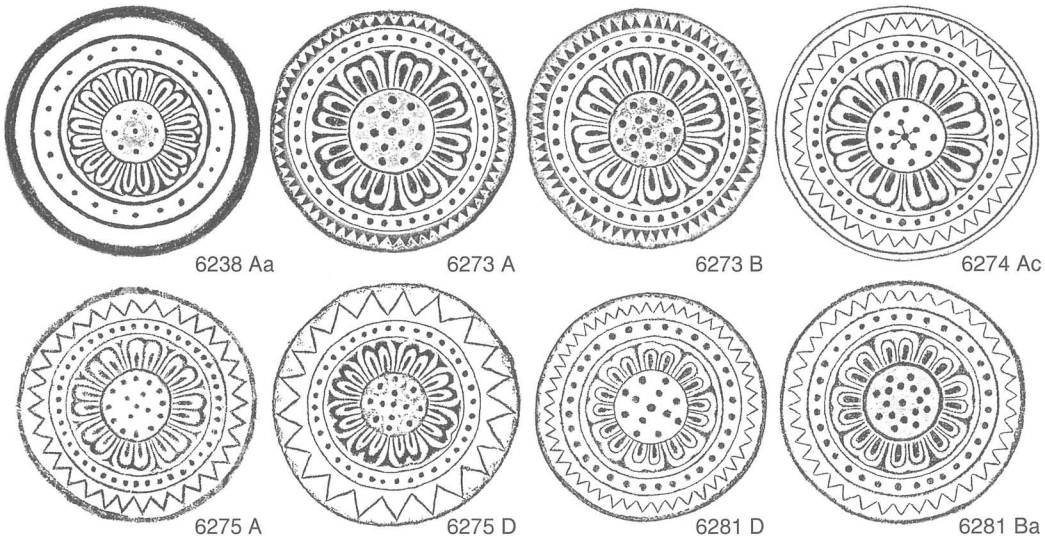


Fig. 38　軒丸瓦９

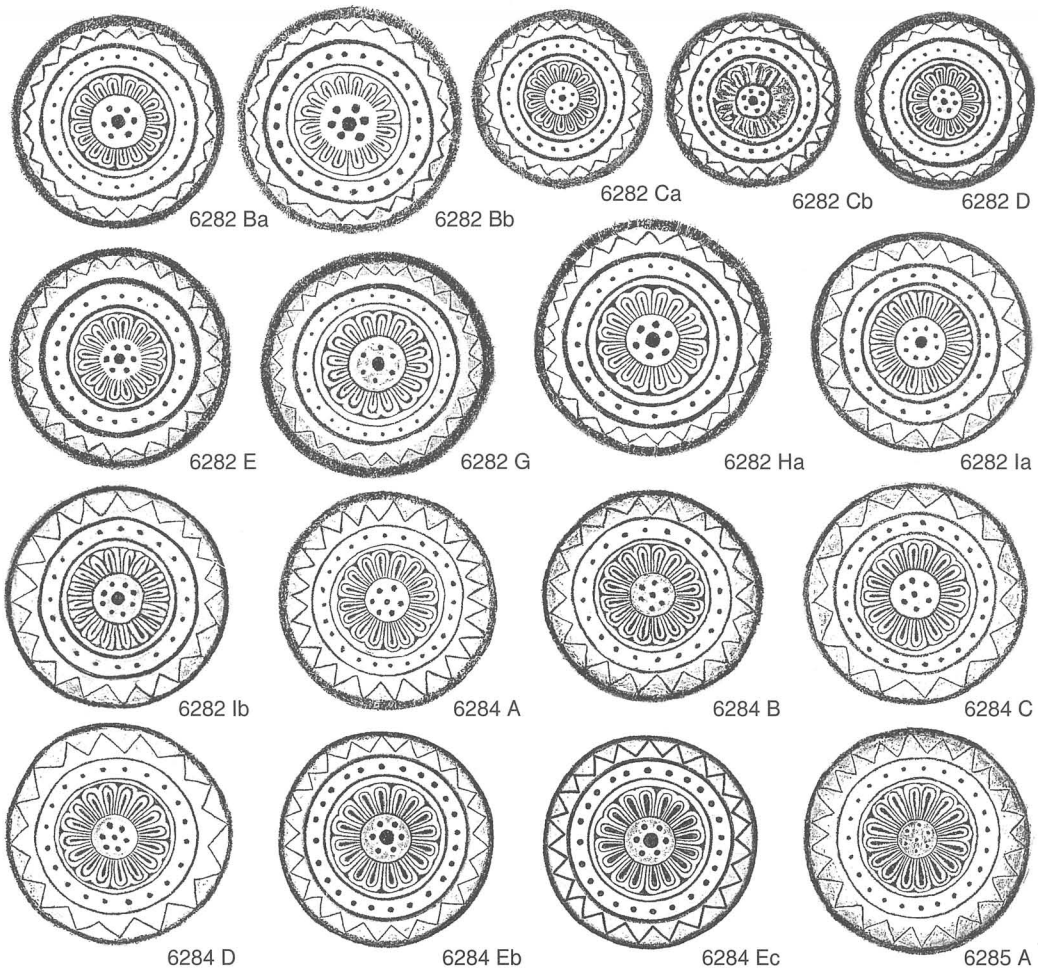


Fig. 39 軒丸瓦10

Ｂａ（21点、PL. 50）　短い弁同士が離れ、珠文帯外側の圏線が太い。中房圏線や弁を彫り直す以前の段階をＢａとして区別する。外縁は傾斜縁Ｉ。瓦当裏面と接合部に横ヘラケズリを施す。瓦当裏面のほぼ1／3に丸瓦を取り付け、接合部に大量の粘土を補充するため、台形の接合線は瓦当の半分付近に位置する（PL. 50）。堅緻に焼き上がり灰褐色～黒灰色を呈する。

Ｂｂ（28点、PL. 50）　Ｂａの中房圏線をなくして、弁、間弁を彫り直し、蓮子、珠文も大粒に彫り直したものである。彫り直しのため、弁と間弁が著しく不均整になっている。丸瓦の取り付け位置、接合部の粘土補充、接合線はＢａと共通する（PL. 50）。瓦当裏面および接合部の調整もＢａと同じく横ヘラケズリが多いが、接合部に縦ヘラケズリを施すものもある。瓦当裏面の端部付近にヘラケズリを施すものが多い。堅緻に焼き上がり暗灰色～灰白色を呈する。

Ｃａ（６点、PL. 50）　瓦当径が小さく、１ヶ所を除き弁が接するなどＤと非常によく似る。しかしＣはＤより中房の地が高く、弁端がやや丸く、珠文帯内側の圏線が太く、外側の圏線と外縁の間の平坦面が狭いなどの違いがある。中房圏線と蓮弁を彫り直す以前の段階をＣａとして区別する。外縁は傾斜縁Ｉ。瓦当裏面に横ナデを施す（PL. 50）。焼成は甘く黒灰色を呈する。

Ｃｂ（２点、PL. 50）　Ｃａの中房圏線を太く彫り直したもの。弁が一部つぶれるが、彫り直しによるかは不明。瓦当裏面に横ヘラケズリを施し、接合線は台形を呈する（PL. 50）。玉縁部先端の凹面側の角を三角形に面取りするものがある。焼成は良好で灰白褐色を呈する。

D（７点、PL.50）　珠文帯圏線は内側が細く、外側が太い。弁端はやや角張り気味である。外縁は傾斜縁Ⅰである。瓦当裏面を横ヘラケズリし、接合線は台形を呈する。瓦当裏面の下端部付近に指オサエを施すものがある。焼成は良好で灰褐色～灰白褐色を呈する。

E（20点、PL.50）　瓦当径に比べ中房が小さく内区も狭い。中房、内区は中高に盛り上がり、中房には細い圏線がめぐる。１ヶ所を除いて蓮弁が接する。珠文帯圏線は、内側が細く、外側が太い。外縁は傾斜縁Ⅰである。瓦当裏面に横方向のナデを施すものとケズリを施すものがある。接合部および丸瓦部凹面の瓦当部寄り1／4程度まで指オサエを施す（PL.51）。丸瓦部凹面は瓦当部から2／3程度まで縦指ナデを施す。丸瓦部凸面は縦ケズリを施すが、筒部の玉縁部側の端から0.5cm付近で、高さ0.1cm、幅1.0cm程度の凸帯状に削り残した部分がある。焼成は良好で淡褐色～暗灰色を呈する。

G（14点、PL.51）　中房の径が大きく、内区とともに中高に盛り上がる。弁同士は離れる。外縁は傾斜縁Ⅰである。瓦当裏面に縦ヘラケズリ、接合部に横ヘラケズリを施して接合線を台形にするものが多い（PL.51-1）が、接合部に横ナデを施し接合線を半円形にするものもある（PL.51-2）。堅緻に焼き上がり明灰褐色を呈する。

Ha（５点、PL.51）　極大のＬに次いで瓦当径が大きい。中房、内区が中高に盛り上がる。弁同士が離れ先端は剣菱状に尖る。弁の１ヶ所が崩れ、複弁の一方には子葉がなく、もう一方は弁輪郭線が途切れる。中房、弁を彫り直す以前の段階をＨａとして区別する。外縁は傾斜縁Ⅰである。瓦当裏面と接合部に横ヘラケズリを施し、接合線が台形ないし台形に近い半円形を呈する。接合部に横方向、瓦当裏面上半に縦方向のナデを施すものもある。丸瓦部凹面には縦ナデ、瓦当部寄りには横ヘラケズリを施す。側面付近に縦ヘラケズリを施すものがある。丸瓦部凸面は縦ナデを施す。堅緻に焼き上がり暗灰色を呈する。

Ⅰa（15点、PL.51）　蓮子が１＋８で弁端は間弁に接する。中房圏線と弁を彫り直す以前の段階をⅠａとして区別する。外縁は傾斜縁Ⅱである。瓦当裏面に横ヘラケズリを施し、接合部には指頭ないし先端が円形の工具による圧痕が残る（PL.51）。瓦当裏面に縦指ナデを施すものもある。堅緻に焼き上がり暗灰色～灰色を呈する。

Ⅰb（５点、PL.51）　Ⅰａの中房圏線を太く彫り直す。弁は彫り直しによって崩れ、間弁や弁同士が接する部分もある。瓦当裏面に横ヘラケズリ、接合部に指頭ないし先端が円形の工具の圧痕を残す点でⅠａと共通する（PL.51）。端部付近には横ナデを施すものがある。丸瓦部が剥離した面に指頭圧痕を多数残す。焼成はやや甘く、明黄灰褐色を呈する。

6284型式　間弁Ｂ系統で、6282型式より中房の径が小さく、弁が長いものである。Ａ～Ｆ・Ｌの７種があり、Ａ～Ｅが出土した。

A（２点、PL.52）　内区が外区より一段高く、弁は大きく盛り上がる。珠文、線鋸歯文を密にめぐらす。外縁は傾斜縁Ⅱである。瓦当裏面に横ナデ、接合部に横指ナデを施す。丸瓦部凸面は縦ナデを施す。堅緻に焼き上がり灰褐色～暗灰褐色を呈する。

B（４点、PL.52）　Ａ、Ｄによく似るが、Ｄと比べると中房が平坦で、弁はＡに比べて盛り上がりに乏しい。外縁は傾斜縁Ⅱである。接合部に横指ナデを施し、瓦当裏面上半に指オサエないし指ナデ、瓦当裏面下半に横方向、ないし斜め方向のケズリを施す。焼成は良好で灰褐色～暗灰色を呈する。

C（10点、PL.52）　弁はわずかに盛り上がる程度である。Eaによく似るが、中房が凹み、子葉が細く、外縁の線鋸歯文が粗い。外縁は傾斜縁Ⅱである。接合部に横指ナデ、瓦当裏面に横ナデを施す。焼成は良好で明灰色～灰褐色を呈する。

D（1点、PL.52）　A、Bに比べ、中房が若干中高で、蓮子が中央に寄り、外縁の線鋸歯文が粗い。外縁は傾斜縁Ⅱである。瓦当裏面に縦方向ないし横方向のケズリ、接合部に横指ナデを施す。堅緻に焼き上がり、暗灰褐色を呈する。

Eb（18点、PL.53）　Cによく似ているが、違いはすでに述べたとおり。Eaの中央の蓮子のみ、6282型式（Aを除く）風に大粒に彫り直したものである。接合部と瓦当裏面に横ないし斜め方向のヘラケズリを施し、接合線を台形にするものが多い（PL.53-2）。笵傷が進んだものの中には、瓦当裏面に横ナデ、接合部に横指ナデを施し、接合線を半円形にするものが少数混じる（PL.53-3）。接合部から瓦当裏面上半にかけて、指頭ないし先端が円形の工具による圧痕を多数残すものが1点ある（PL.53-1）。丸瓦部凸面に赤色顔料が付着するものがある。焼成は良好で暗灰色～灰褐色を呈する。

接合線と調整技法が変化

Ec（5点、PL.53）　Ebの線鋸歯文を太く彫り直したものである。中房の突出がほとんどなくなり、弁の均整が崩れて、弁同士や、弁と間弁が接する部分も目立つ。しかしこれらの原因が彫り直しか笵の傷みか判断できない。接合部と瓦当裏面に横ヘラケズリを施し、接合線を台形にするもの（PL.53-2）がやや多くみられるが、接合部から瓦当裏面にかけて縦ヘラケズリを施すものもある（PL.53-1）。焼成は良好で暗灰色～灰褐色を呈する。

6285型式　間弁B系統で、6284型式よりさらに中房が小さく、弁が長いものである。A・Bの2種があり、Aが出土した。

A（4点、PL.52）　中房、および内区が中高に盛り上がる。蓮子、珠文が小粒である。外縁は傾斜縁Ⅱである。表面の残りが悪く、接合線や調整は不明である。堅緻に焼き上がり、明灰色を呈する。

6291型式　間弁B系統だが、他のB系統とは様相が異なる。B系統の間弁は間弁先端が連続し、外区圏線に平行する円を描くことを基本とするが、6291型式では弁の輪郭線に沿って出入りし、円形にならない。弁は半肉彫り風で、6308･6311型式に近い。A～Cの3種があり、Aが出土した。

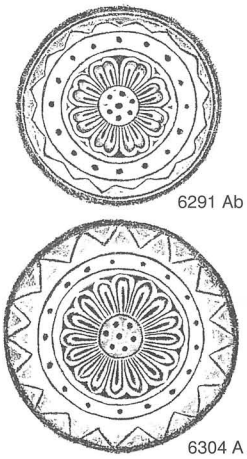


Fig. 40　軒丸瓦11

Ab（1点、PL.52）　対角線上にある間弁の端部2ヶ所を彫り直し、弁間の三角文とつなげて一体にし、同時に、弁央部分の切込を、外区圏線に沿って弧状に彫り直したものをAbとして区別する。接合部および瓦当裏面上半に横ナデ、下半に縦ヘラケズリを施す。丸瓦部には、凸面に縦ヘラケズリ、凹面に縦ナデを施す。堅緻に焼き上がり暗灰褐色を呈する。

6304型式　間弁B系統で、中房が突出し弁が長く先端が尖るものである。A～E・G・L・N・Oの9種があり、Aが出土した。

A（1点、PL.52）　中房が高く突出し、内区も盛り上がりが大きい。極大のLを除き、弁は他種より長い。外縁は傾斜縁Ⅱである。残りが悪く、調整は不明である。焼成は良好で暗灰色を呈する。

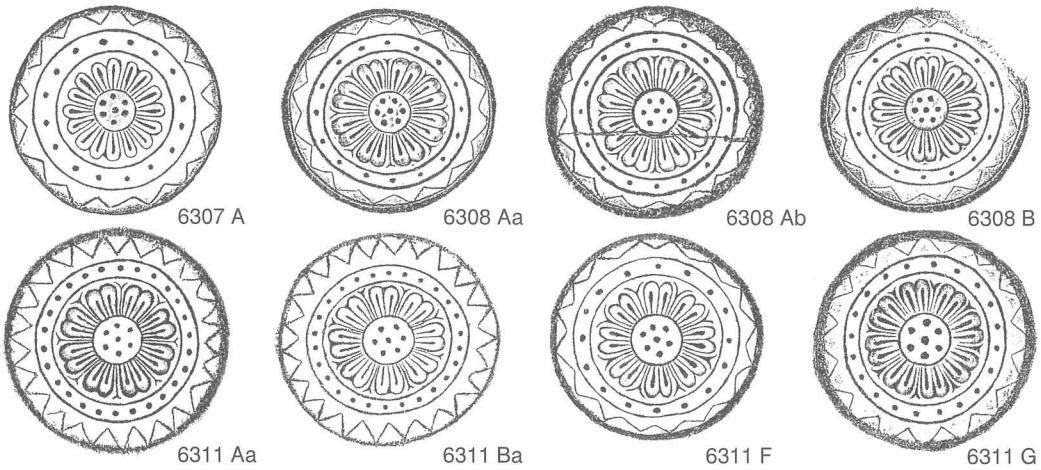


Fig. 41　軒丸瓦12

6307型式　複弁８弁で間弁がない（Ｃ系統）ものである。弁、外縁などに様々な種類がある。Ａ～Ｊ・Ｌの11種があり、Ａが出土した。

Ａ（２点、PL.52）　突出した中房に１＋６の蓮子をおく。内区は弁中央部分で大きく盛り上がる。隣り合う弁は分離する。２葉１組の複弁が１ヶ所で分離し、一方は隣の弁と接して３葉となり、もう一方は、独立した単弁になる。外縁は傾斜縁Ⅱである。瓦当裏面に横ナデ、接合部に横指ナデを施す。接合部に工具が当たった痕跡を多数残すものがある。堅緻に焼き上がり黒灰色～暗灰色を呈する。

6308型式　間弁Ａ系統で、中房が小さく弁が長い。6311型式に似るが、珠文、線鋸歯文が粗い。Ａ～Ｄ・Ｈ～Ｎ・Ｒの12種があり、Ａ～Ｄが出土した。

Ａａ（16点、PL.54）　中房がわずかに突出する。内区全体を一段高くつくるため、内区の外周に段差がめぐる。弁央端に小さな三角文をおく。弁・間弁・珠文・鋸歯文の位置が対応する。外縁は傾斜縁Ｉで、頂部に丸みをもち凸線が１本めぐる。中房圏線を彫り直す以前の段階をＡａとして区別する。中房圏線をかすめ、一直線に瓦当面を横切る顕著な笵傷、およびそれが進んで生じた笵割れは、Ａａ段階からすでに生じており、Ａｂ段階でさらに鮮明になる。今回対象とする資料のすべてにこの笵傷が存在する。瓦当裏面に横ナデ、接合部に横指ナデを施す（PL.54）。接合法が判明するものはすべて一本作り式である。瓦当裏面の中ほどに、粘土を積み上げた単位を示す低い段差が残るものがある。また、瓦当裏面に布目が付着するものも少数混じる。丸瓦部は凹凸両面とも縦ナデを施す。焼成は良好で灰白褐色～灰褐色を呈する。

笵傷はＡａから

6308Ａは一本作り式

Ａｂ（３点、PL.54）　中房圏線を太く彫り直す。文様全体が不鮮明になり、弁区周囲の段差、弁央端の三角文、外縁頂部の凸線はほとんど見えない。Ａａと同じく瓦当裏面に横ナデ、接合部に横指ナデを施す。すべて一本作り式である。焼成は良好で黒灰色～暗灰色を呈する。

Ｂ（53点、PL.54）　Ａと極めてよく似るが、Ａより中房がわずかに高く、弁が細く、弁端の反りが大きい。Ａと同じく内区を高くつくり、内区の外周に段差があるが、Ａほど明瞭ではない。外縁は傾斜縁Ｉで、頂部を平坦にし、凸線がめぐる。瓦当面を横切る顕著な笵割れを生じるが、Ａのように一直線に走らず、外縁から中房まで、中房部分、内区から外縁までの３つに分かれる。調整技法はいずれも瓦当裏面に横ナデを施し、丸瓦部凸面に縦ナデを施す（PL.54-2）。焼成は良好で明灰褐色～灰褐色のものと焼成が甘く淡黄褐色を呈するものがある。

笵傷、笵割れの進行は山崎が分析しており[5]、その分類にしたがい３段階に分けるが、若干補足する点があるので細かく触れる（Fig.42）。Ⅰ段階は瓦当面を横切る笵割れが生じておらず、外区珠文に笵傷が数ヶ所生じる。この段階は少ないが、接合式２点、一本作り式１点を確認した。Ⅱ段階以降、接合式は確認されず、Ⅰ段階で接合式から一本作り式に変化した可能性が高い。東院庭園地区では刻印を押捺する例はない。Ⅱ段階はまだ笵割れには至らないが、同じ位置に薄い笵傷を生じる。この段階はさらに例が少なく、一本作り式２点のみである。瓦当側面に刻印「北（種不明）」を押捺する（PL.54-3）。Ⅲ段階は、Ⅱ段階の笵傷がさらに進行し、幅１㎜以上の笵割れを生じる。この段階は出土例が極めて多い。いずれも一本作り式で、瓦当側面にスタンプ「井（C）」を押捺するものが混じる（PL.54-4）。

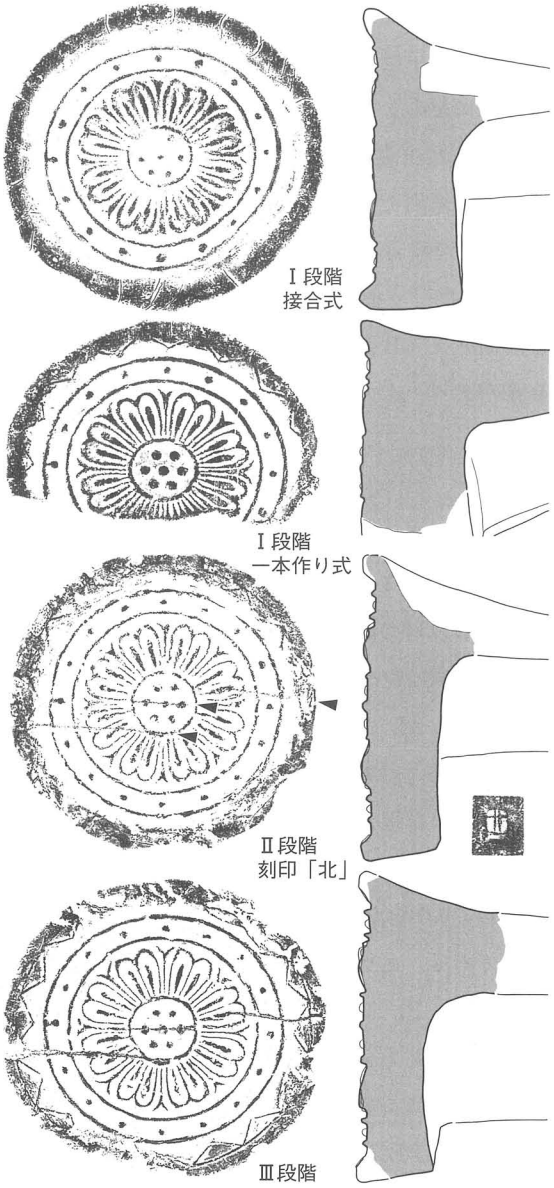


Fig. 42　6308Bの変遷（１：４）

6311型式　複弁８弁、間弁Ａ系統で、中房が内区の地より低いか、あるいは同高のものである。Ａ～Ｈの８種があり、Ａ・Ｂ・Ｆ・Ｇが出土した。

Ａａ（５点、PL.53）　文様構成はＢと一致し、蓮子、蓮弁、珠文、線鋸歯文の数だけでなく、文様の割付もほぼ同じである。両者の違いは、Ａには弁の照りむくりがあり弁端が高くなるが、Ｂは弁中央部が盛り上がるものの、弁端の反りが弱く、そのまま低くなる点である。外縁は薄い傾斜縁Ⅱである。弁輪郭、子葉を彫り直す以前の段階をＡａとして区別する。瓦当裏面に横、斜め方向の丁寧なナデ、接合部に横指ナデを施す。丸瓦部凸面に縦ヘラケズリを施す。焼成は良好で暗灰褐色を呈する。

Ｂａ（７点、PL.53）　文様の特徴は上で説明したとおりである。外縁は傾斜縁Ⅱである。弁輪郭、子葉を彫り直す以前の段階をＢａとして区別する。瓦当裏面に丁寧な横ナデ、接合部に横指ナデを施す。堅緻に焼き上がり明灰色～黒灰色を呈する。

Ｆ（３点、PL.54）　他種と比べて珠文、線鋸歯文が粗く、それらと弁の位置が対応するという点で6308型式と共通するが、中房は凹む。間弁は先端がＹ字状に大きく開く。外縁は三角縁である。瓦当裏面に横ナデ、接合部に横指ナデを施す。一本作り式の可能性が高い。焼成は良好で黒灰色～暗灰色を呈する。

G（1点、PL.53）　中房圏線につく基部では弁より子葉が高い。外区は粗い線鋸歯文を弁に対応して配する。外縁は傾斜縁Ⅱである。瓦当裏面に横ナデないしケズリ、接合部に横指ナデを施す。焼成は堅緻で黒灰褐色を呈する。

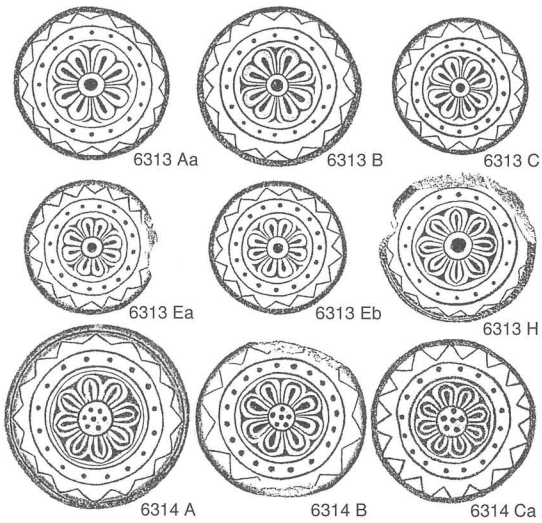


Fig. 43　軒丸瓦13

6313型式　小型の複弁4弁で蓮子は1顆。間弁A・B系統が混在する。A～Iの9種があり、A・C・E・Hが出土した。

Aa（4点、PL.55）　弁端が丸く、間弁はA系統。弁中央が盛り上がり弁端は低い。中房圏線も高く子葉基部との間に段差を生じる。弁・珠文・線鋸歯文の位置が対応する。外縁はわずかに内湾する傾斜縁Ⅱ。中房、弁を彫り直す以前の段階をAaとして区別する。瓦当裏面に縦ないし横ナデ、接合部に横指ナデを施す。焼成はやや甘く明灰褐色を呈する。

B（1点、PL.55）　間弁A系統で弁端が丸く、弁中央が盛り上がる点でAに似る。瓦当径もAとほぼ同大である。ただし、Aに比べ内区がやや平板で、中房径がわずかに小さい。瓦当裏面上半および接合部に横ナデを施す。焼成はやや良好で暗灰色～灰褐色を呈する。

C（2点、PL.55）　Eと並び瓦当径が最小で、弁端が丸く、間弁A系統でEとよく似る。しかしEより中房が小さく、弁が長く、外縁が幅広である。外縁はごくわずかに匙面状をなす傾斜縁Ⅱである。瓦当裏面と接合部に横指ナデを施す。焼成はやや良好で灰褐色～暗灰色を呈する。

E（1点、PL.55）　瓦当径が小さくCとほぼ同大であるが、両者の違いは上で説明したとおり。中房に彫り直しがありEaとEbに区別するが、本例は小片のためいずれか判断が付かない。外縁は傾斜縁Ⅱである。調整等は不明である。焼成はやや良好で、明灰褐色を呈する。

H（1点、PL.55）　間弁B系統で弁端が尖るものでは瓦当径が最小。間弁はT字形と弁央端の三角文が連結して八角形をなし、弁周囲をめぐる。外縁は傾斜縁Ⅰで頂部に凸線がめぐる。瓦当裏面に横ナデ、接合部に横指ナデを施す。焼成はやや甘く淡灰褐色を呈する。

6314型式　小型の複弁4弁で蓮子が2重にめぐるもの。間弁B系統で、複弁の2葉が分離する。A～Fの6種があり、A～C・Fが出土した。

A（61点、PL.55）　突出した中房に1＋6の蓮子をおく。弁区も盛り上がり、弁端が尖る。間弁はT字形と弁央端の三角文が連結して八角形状をなし、6313Hと共通する。間弁と外区珠文帯内側の圏線との間に、細い圏線が1本めぐる。弁・珠文・線鋸歯文の位置が対応する。外縁は丸みをもった傾斜縁Ⅲで、頂部に凸線がめぐる。調整技法は大きく分けて3種類ある。一つめは、接合部に横ナデ、瓦当裏面に縦ケズリを施すものである。瓦当裏面は平坦で、丸瓦部取り付け位置が高く、接合線は半円形である。二つめは接合部、瓦当裏面ともに横ナデを施すものである。瓦当裏面、丸瓦部取り付け位置、接合線は半円形のものと、瓦当裏面が凹み、丸瓦部取り付け位置が低く、接合線は台形に近い半円形を呈するものが混じる（PL.55-2）。後者は、瓦当裏面調整に縦ナデが混じるものがある。三つめは、瓦当裏面に横指ナデ、指オサエを

3種の調整技法

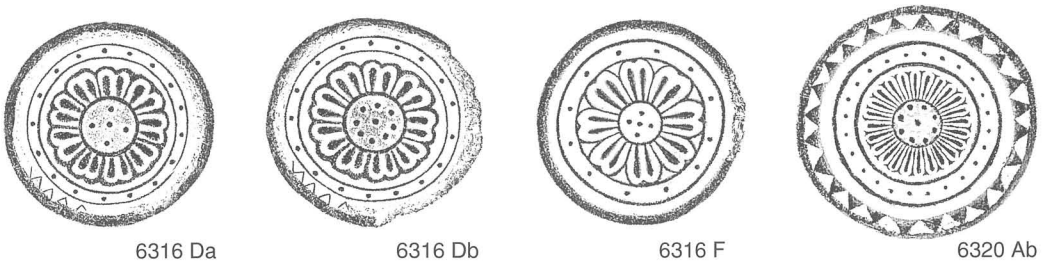


Fig. 44　軒丸瓦14

施すものである。瓦当裏面は中央が強く凹み、丸瓦部取り付け位置が低く、接合線は略台形を呈する。いずれも一本作り式である。焼成は堅緻で明灰褐色を呈する。

丸瓦部凹凸面ともに縦ナデないしケズリを施す。玉縁部側面を先端側に向かって面取りしたものが２点ある。丸瓦部の中軸線上に長方形の穴を穿つものが８点ある（PL. 55-1）。穿孔は焼成前におこなわれている。位置は瓦当面より17～18cm付近で、穴の大きさは一辺がそれぞれ1.3cm、0.8～1.0cm程度である。瓦を固定する釘孔であろう。

丸瓦部に釘孔

Ｂ（３点、PL. 55）　蓮子は１＋５で中房がわずかに突出する。弁の盛り上がりも弱い。弁端は丸い。外縁は薄い傾斜縁Ⅱである。瓦当裏面、接合部に横ナデを施す。瓦当裏面の接合部付近に布目がつくものがある。焼成は良好で黒灰色～暗灰色を呈する。

Ｃａ（３点、PL. 55）　突出した中房に１＋５の蓮子をおき、弁端は丸い。間弁は弁央端に沿って切れ込み、端部が高い。外縁は傾斜縁Ⅱである。中房を彫り直す以前の段階をＣａとして区別する。瓦当裏面、接合部に横ナデを施す。焼成は良好で黒褐色を呈する。

6316型式　複弁の２葉間を分けず、一つの輪郭線で囲むもので、間弁はない（Ｃ系統）。蓮弁が８弁で弁同士が接するものが多数を占める一方、蓮弁が９弁のもの、あるいは弁が分離するものも混じる。Ａ～Ｉ・Ｍ～Ｓの16種があり、Ｄ、Ｆが出土した。

Ｄ（１点、PL. 55）　蓮弁は９弁で、中房が強く突出し、弁の盛り上がりも他種に比べて強い。弁の輪郭線は弁央端で切れ込むが、切れ込まずに丸くなる部分がある。外縁は直立縁で、内側に線鋸歯文をめぐらすが、非常に薄くほとんど見えない。蓮子を１＋４から１＋８に彫り直してＤａとＤｂに分けるが、出土したものは蓮子が残らず、いずれか特定できない。残りが悪く調整、接合法、接合線は不明。焼成は良好で黒灰褐色を呈する。

Ｆ（２点、PL. 55）　凹んだ中房に１＋４の蓮子をおく。弁端が珠文帯内側の圏線に接する。珠文は粗く、外縁素文で直立縁である。残りが悪く調整、接合法、接合線は不明。焼成はやや良好で暗灰褐色を呈する。

6320型式　蓮弁は12弁で弁同士が接するが、弁端が閉じず、間弁もないため、単弁が連なっているように見える。Ａ種のみ。

Ａｂ（１点、PL. 55）　突出した中房に小粒の蓮子１＋８をおく。珠文も小粒で、鋸歯文と対応する。珠文帯の圏線は外側の方が太く、外縁の立ち上がりとの間に幅の広い平坦面がめぐる。外縁は厚手で傾斜が急な傾斜縁Ⅰである。Ａａの線鋸歯文を凸鋸歯文に彫り直したものをＡｂ、さらに中房と蓮子を彫り直したものをＡｃとして区別する。Ａｂと判明するものは残りが悪く、調整は不明。焼成は良好で黒褐色～暗灰色を呈する。このほか、中房を欠き、ＡｂかＡｃか判別できないものがあり、接合部から瓦当裏面上半に縦ヘラケズリ、下半に斜めヘラケズリを施す。

B　軒平瓦

軒平瓦は32型式60種、計931点出土した(型式が判明するものは806点)。これらは文様により重弧文、重郭文、偏行唐草文、均等唐草文に大別できる。

顎部の断面形態は、段顎、直線顎、曲線顎に大きく分れるが、『平城報告XⅢ』の分類にしたがい次のように細分する。段顎は瓦当面と顎部の幅の比率によって分け、顎部幅の方が広いものをIL、ほぼ等しいものをIS、顎部幅の方が狭いものをISSとする。曲線顎は顎端部の平坦面の幅で細分し、幅約1㎝程度を目安にそれより狭いものをⅠ、広いものをⅡとする。しかし、実際には分類が難しいものも多く存在する。その場合、分類名でなく形状をそのまま記述することとする。

重　弧　文　　ⅰ　**重弧文軒平瓦**（1点、PL.56）

剥離した貼り付け段顎の顎部である。文様は現状で二重弧分あり、完形で四重弧文となる可能性が高い。顎部幅は8.3㎝で、顎面に横ナデを施す。剥離面は糸切り痕が顕著で、平瓦部凸面の斜格子目がネガとなって残る。文様、焼成、色調、胎土が姫寺廃寺出土例[6]と一致する。

Fig. 45
軒平瓦1

重　郭　文　　ⅱ　**重郭文軒平瓦**（1型式1種）

6572型式　　二重郭文で、A～Hの8種があり、Dが出土した。

D（1点、PL.56）　各弧線は太さがほぼ同じで、断面形は丸みがあり、弧線間に幅1㎜程度の平坦面をもつ。顎は直線顎である。凹凸面とも横ヘラケズリを施す。凸面の瓦当から7～11㎝付近にヘラ書きの線刻がある。現状では「V」字状であるが、大半を欠損し全体が分からないため、文字か記号か不明である。堅緻に焼き上がり、暗灰色を呈する。

偏行唐草文　　ⅲ　**偏行唐草文軒平瓦**（2型式2種）

6641型式　　右偏行唐草文で、上外区に珠文、下外区と脇区に線鋸歯文をおく。原則的に、波状に連続する茎と、2～3本の支葉からなる。A・C・E～Pの14種があり、Cが出土した。

藤原宮所用　C（1点、PL.56）　藤原宮所用で茎の始点（左端）が巻き込まず、支葉を2本配し、終点（右端）は小さく巻き込む。顎幅10㎝程度の削り出し段顎である。顎面に縦、斜め方向のヘラケズリを施し、凸面に縦ヘラケズリ、凹面に粗い縦ナデを施すが、凹面の瓦当寄り6.5㎝に横ヘラケズリを施す。堅緻に焼き上がり、暗灰褐色を呈する。

6646型式　　右偏行変形忍冬唐草文で、上外区に珠文、下外区に線鋸歯文をおく。A～Jの10種があり、Aが出土した。Aは藤原宮所用である。

A（1点、PL.56）　形式化した蕾を二重のV字形で表すもののうち、内区両上隅に珠文を一つずつおくものである。顎部が剥離し、現状で曲線顎Ⅰ風の形状を呈するが、剥離痕跡から、顎幅9.5㎝程度の貼り付け段顎ILであると判断できる。凸面の顎部寄りに横ナデ、凹面の瓦当寄りに横ケズリを施すが、凹面には模骨痕が残る。焼成は良好で明灰色を呈する。

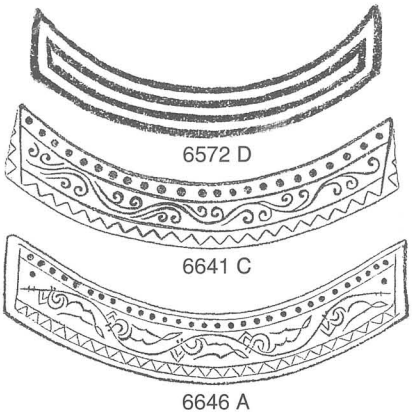


Fig. 46　軒平瓦2

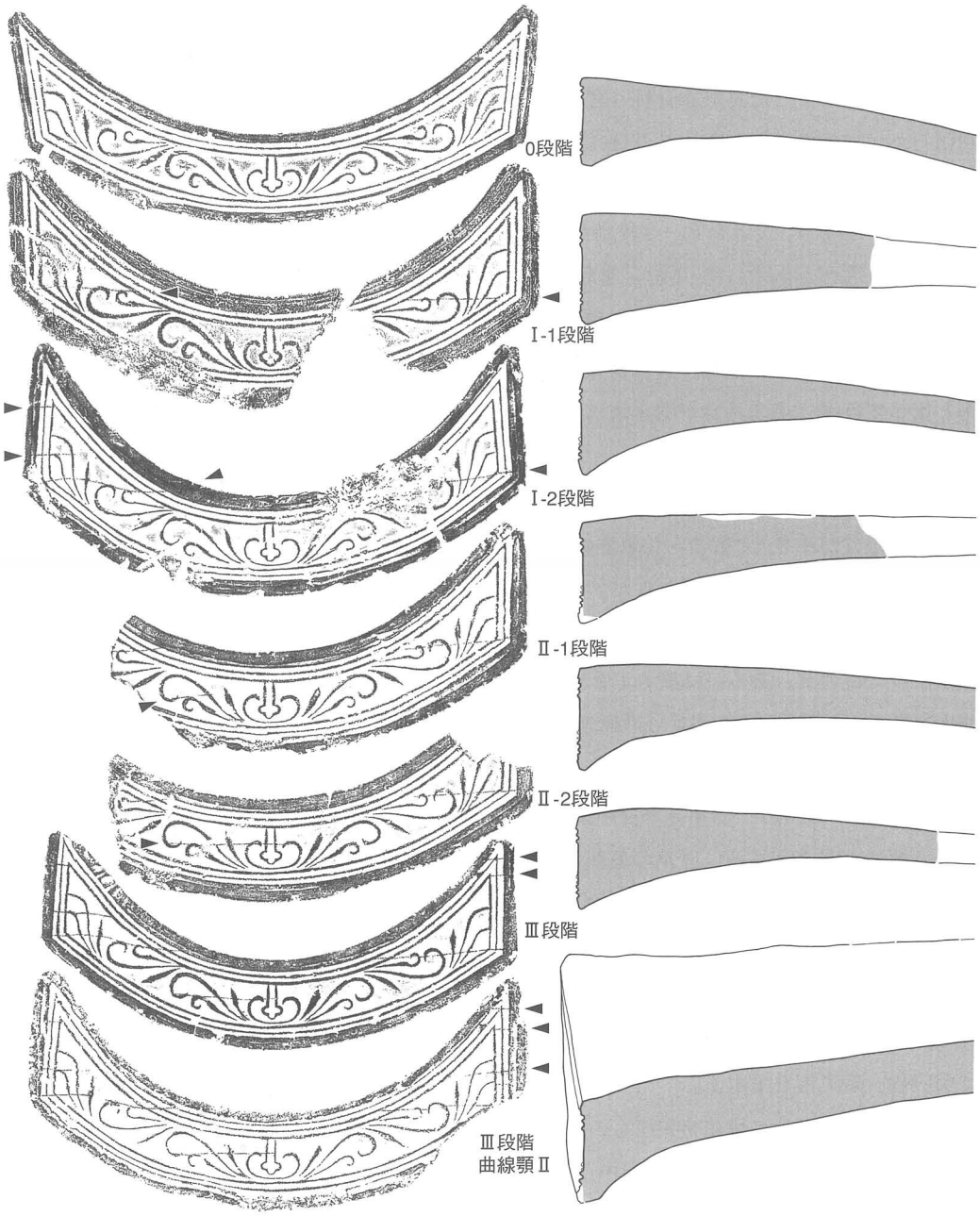


Fig. 47　6663Aの変遷（1：4）

iv　均整唐草文軒平瓦（28型式56種）　均整唐草文

6663型式　　3回反転で、中心飾りは花頭形に上巻きの唐草を組み合わせ、花頭基部が界線につく。外区珠文帯を欠き二重の界線のみ。A～F・H～Mの12種があり、A～Fが出土した。

A（59点、PL. 56）　唐草の各単位が長く、第3単位の主葉と第1支葉が界線につく。各主葉と支葉の基部が近接し、界線から派生する。凸面に縦縄タタキを施し、凹面は瓦当寄りに幅7～10cmの横ナデを施す。顎部は直線顎または曲線顎Ⅰ。焼成は良好で明灰色～暗灰色を呈する。

6663Aの変遷

笵傷進行から大きく3段階に分かれる（Fig.47）。Ⅰ段階は左右の唐草文第2～3単位付近に笵傷を生じる。左第2単位の上の外区まで傷が届かないⅠ－1段階、傷が外区まで貫通するⅠ－2段階（良好例は内裏北外郭出土。第20次[7]）に細分できる。東院西辺部（第128次[8]）より、

この笵傷がないものが出土している（０段階）。Ⅱ段階は唐草の左第１単位から中心飾りにかけて横方向に笵傷を生じ、Ⅲ段階は内区と外区の両上隅に複数の笵傷を生じる。Ⅱ、Ⅲ段階は宮西南付近から出土した良好な資料（宮西南隅：第14次[9]。宮南面西門：第133次[10]）との比較から判明した。宮内他所から出土した例には、Ⅱ段階の指標となる横方向の笵傷が断続的に途切れるものがあり、東院庭園地区から出土した例は、いずれもこの傷が途切れずにつながっている。前者をⅡ－１段階、後者をⅡ－２段階と位置づけることができる。Ⅱ－２段階に刻印「井（A）」を押捺するものがある（PL. 56）。Ⅲ段階は１点のみ。曲線顎Ⅰで刻印「井（種不明）」を押捺する。この段階の良好品が第一次大極殿地域南東部（第41次[11]）と押熊瓦窯[12]から出土している。前者は曲線顎Ⅰだが、後者は曲線顎Ⅱである。この２例は刻印を押捺せず、東院庭園地区出土例と比べて色調、焼成具合が明らかに異なる。Ⅲ段階の途中で瓦製作地を含んだ何らかの変化をうかがわせる。

Ⅲ段階に大きな変化

Ｂ（23点、PL. 56）　Ａに極めてよく似るが、左右の第２・３単位間に珠文を一つおく。唐草の巻きはＢの方が小さく、第１・２単位の第１支葉は直線的にのび、屈曲して巻き込む。平城宮・京内では段顎の例も知られているが、今回出土したのは全て曲線顎Ⅰである。ただし、幅1.0cm以下のなだらかな平坦面をもつものもある。凸面に縦縄タタキを施し、瓦当から10cmほどの範囲に限って縦ナデ、あるいは横ナデを施す。横縄タタキを施した可能性があるものも１点ある。凹面は横ナデを施すが、瓦当寄りの部分に横ヘラケズリを施すものもある。焼成は良好で明灰色～暗灰色を呈する。

Ｃｂ（24点、PL. 57）　右第３単位の第１支葉を欠き、左第２単位の第１支葉の巻き込み方向を逆転させて上向きとする。唐草の基部が界線から離れ、第３単位の第１支葉は巻き込む。左第２単位第１支葉等の彫り直しによってＣａ・Ｃｂに分けるが、東院庭園地区出土例の中で確認できるものは全てＣｂである。幅1.0cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱで、凸面に縦縄タタキを施し、瓦当寄り10～15cm程度の範囲に横ナデを施す（PL. 57）。凸面の瓦当付近に縦ナデを施すものもわずかに混じる。凹面は横ナデを施す。焼成は良好で明灰色～暗灰色を呈する。

凸型成形台圧痕

凹面の狭端部付近に段差を残すものが１点あり、これを境に平瓦部凹面が若干屈曲する（PL. 57）。これは複数部材からなる凸型成形台の、部材接合部分の圧痕であろう。こうした圧痕が残るのは１点のみであることから、本例は他例と異なる凸型成形台を使用したか、軒平瓦１枚分より長い凸型成形台を使い、通常は部材接合部の手前までを使って作業していたものが、たまたまずれてしまったかのいずれかであろう。

Ｄ（２点、PL. 56）　唐草の文様構成が大きく崩れ、左右第３単位の第１支葉を欠く。唐草は短く太い。なだらかに平坦面をつくる曲線顎Ⅱで、凸面の縦縄叩き目が深く残る。表面の残りが悪く、調整は不明。焼成はやや甘く灰白褐色を呈する。

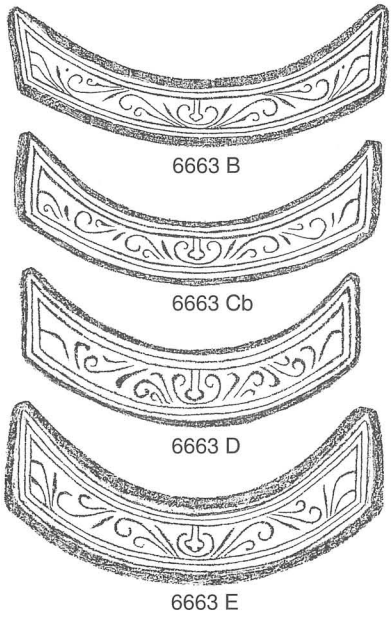


Fig. 48　軒平瓦３

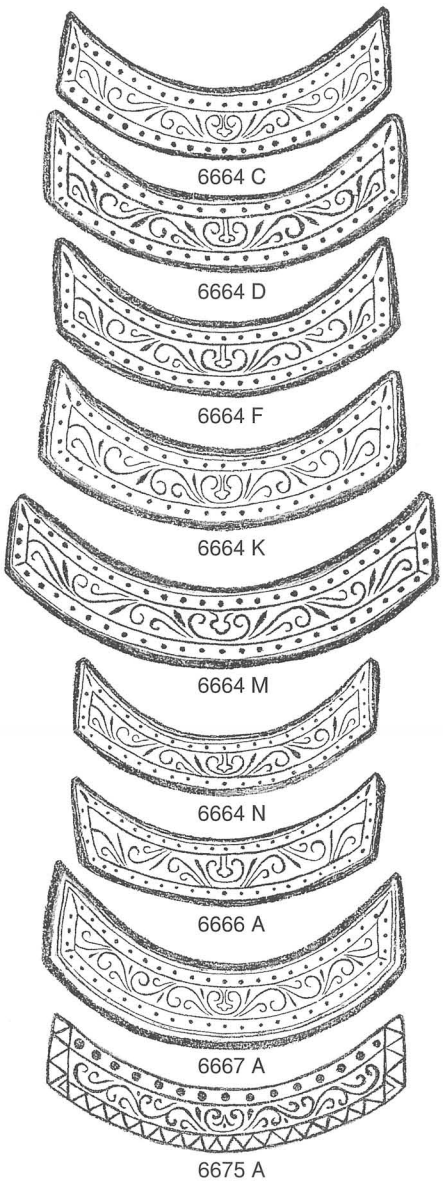


Fig. 49 軒平瓦４

Ｅ（１点、PL.56）　中心飾りの唐草が狭く、唐草と支葉の基部が近接し界線につく。第３単位主葉と第１支葉が脇区界線につく。平坦面が狭い曲線顎Ⅱで、凹凸面の瓦当寄りに横ナデを施す。凸面は縦縄叩き目が残る。焼成はやや甘く灰白褐色を呈する。

6664型式　唐草は３回反転し、第３単位の主葉が脇区界線につく。中心飾りは花頭形に上巻きの唐草を組み合わせる。Ａ～Ｄ・Ｆ～Ｐ・Ｒの16種があり、Ｃ・Ｄ・Ｆ・Ｋが出土した。

Ｃ（５点、PL.56）　中心飾りの基部が細くくびれ、先端は若干開いて界線につかない。唐草の各単位が長く、珠文も大粒である。顎幅7.0～7.5cmの段顎ＩＬである。凸面に横縄タタキを施し、顎部寄りの数cmに横ナデを施す。凹面に縦ないし横ナデ、瓦当寄りに幅5.0cm程度の横ナデを施す。焼成はやや甘く暗灰色～黒灰色を呈する。

Ｄ（16点、PL.57）　中心飾りの基部が直線的で、平行しつつ界線につく。唐草・界線が太く、珠文も大粒で高い。以上の特徴はＦと共通し、文様は極めてよく似るが、Ｆより珠文が若干粗い。第１支葉は基部が太く巻き部分が細い。今回出土したものはいずれも第２単位主葉と第３単位第２支葉の間、および右外区の珠文と右端の間に顕著な笵傷を生じる。顎幅5.5～6.0cmの段顎ＩＳと4.5～5.0cm程度の段顎ＩＳＳが混在する。凸面に縦縄タタキを施し、凹面は瓦当部寄りに横ナデを施す（PL.57-2）。凸面に斜め縄叩き目を残すものが１点ある（PL.57-3）。焼成はやや良好で明灰色～黒灰色を呈する。

２種の縄タタキ

Ｆ（22点、PL.58）　文様の特徴はＤで述べたとおり。貼り付け段顎で顎幅もＤと同じく幅の広いもの（5.5～6.0cm）と狭いもの（4.5～5.0cm）がある。顎部の貼り付け面が見えるものを観察すると、貼り付け部分が平瓦部に対してほぼ平行になるものと、斜めになるものがある（PL.58-1、2）。前者は顎部のみを貼り足し、貼り付け面が瓦当面のほぼ中央にあるが、後者は貼り足し部で瓦当面の大半をつくり、貼り付け面は内区の上界線付近にある。凸面に残る縄タタキは縦位と横位が混じる。凸面瓦当部寄りに横ナデをおこなうものもある。凹面に横ヘラケズリないし横ナデを施す。焼成はやや良好で明灰色～暗灰色を呈する。

２種の顎部貼り付け手法

Ｋ（３点、PL.56）　中心飾りの基部はＣに似て、一端くびれた後、先端が開く。全体的に大ぶりで、唐草が大きく巻き込む。段顎ＩＬで、幅は6.5～7.0cmと広めだが、段は浅い。凸面に縄目が細かい横縄タタキ、凹面に粗い横ナデを施す。焼成が甘く暗灰色を呈するものと、焼成が良好で明灰色を呈するものがある。

M（1点、PL.57）　Lと同じく、中心飾りの軸部が短く、先端が大きく開くが、Lよりさらに短く寸づまりになる。瓦当幅は同型式の中で最大で、唐草の各単位が長い。顎幅6.8cmの段顎ILである。凸面に縄目が細かい横縄タタキを施し、凹面は瓦当寄り2.5cm程度に横ナデ、残りの部分に縦ナデを施すが、わずかに模骨痕が残る。焼成は良好で黒灰色を呈する。

N（1点、PL.58）　瓦当幅が同型式中で最も小さい。中心飾りは軸部が直線的にのび界線につく。顎幅4.5cmの段顎ISで、調整は小片のため不明。焼成はやや甘く灰褐色を呈する。

6666型式　3回反転の唐草の第3単位が界線につき、中心飾りは花頭形で6664型式と共通するが、全体的に小型で唐草が直線的である。A種のみである。

A（9点、PL.58）　花頭形の軸部は平行して界線につき、唐草基部も界線に接する。段顎ＩＳだが、幅は4.0～4.5cm程度の狭いものと、5.0～6.0cm程度の広いものがある。凸面に縦縄タタキを施すが、顎幅の狭いものの中にはこれに重ねて横縄タタキを施すものがある。凹面はいずれも横ナデを施す。焼成が良好な灰褐色のものと、やや甘い黒灰色のものがある。

6667型式　4回反転で、花頭形と上に巻く唐草の中心飾りをもつ。第4単位の主葉が脇区界線につく。A～Dの4種があり、Aが出土した。

A（5点、PL.57）　中心飾りの花頭形の基部が上開きで6664Cによく似る。珠文は小粒である。笵を押す前に瓦当面に施した横縄叩き目が外縁上に明瞭に残る。段顎ＩＬで顎幅5.2～6.6cmである。凸面に縄目の細かい縦縄タタキを施し、凹面は瓦当寄り5.0～10.0cmに横ナデを施す。焼成がやや良好な橙灰白色のものと、堅緻な暗灰色のものがある。

6675型式　4回反転で、唐草の主葉が連続し、偏行唐草文にみられる波形の茎状をなす。中心飾りは水滴形の珠点の左右に、ハの字状で先端が大きく反りかえる唐草をおく。上外区は珠文で、下外区・脇区は線鋸歯文である。A種のみ。

A（2点、PL.58）　両脇区の一番下の線鋸歯文が二重鋸歯文になる。第1単位を除き第2支葉を欠くが、左第3・4単位の第2支葉の位置に珠文をおく。顎幅5.0cm程度の段顎ＩＳである。凸面に縦縄タタキを施し、顎部寄りの幅5.0cm程度に横ナデを施す。凹面瓦当寄りの幅3.0cmに横ナデを施す。堅緻に焼き上がり明灰褐色を呈する。

6681型式　3回反転で、外区に珠文帯を欠き、二重界線がめぐる点では6663型式と共通するが、中心飾りの軸が単線で、先端の左右に珠点をおいて三葉形にする。全体的にやや幅狭である。第3単位の主葉は脇区界線につく。A～Eの5種があり、A・B・Eが出土した。

6681型式の細分指標

A（35点、PL.59）　瓦当幅が狭く、唐草が長くのび、第3単位の主葉と第1支葉が脇区界線につくなど、B・Eと文様の共通点が多いので、3者の違いをまとめて説明する。中心葉の幅はA・Bに比べEが広い。唐草第3単位は、A・Eが短くBが長いが、第1支葉はA・Bが直線的に界線までのび、Eは若干巻き込み気味に界線につく。しかし、A・B・Eの3者を分ける最も大きな違いは外縁形態である（PL.59）。外縁は、笵端がどこまでおよぶかによって規定される。Aは外区界線外側に笵端があるため外縁が笵で規定されず、途中に平坦面をもたない。幅1.0cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱであるが、曲線顎Ⅰとほとんど区別が付かないものもある。凸面に縦縄タタキを施し、瓦当寄りの1／3程度に縦ナデを施す。さらに瓦当寄りの幅3.0cm程度に横ナデを施すものが多い。凹面は全面に横ナデを施すが、一部に縦ないし斜めナデを施すものもある。焼成は良好で明灰色～暗灰色を呈する。

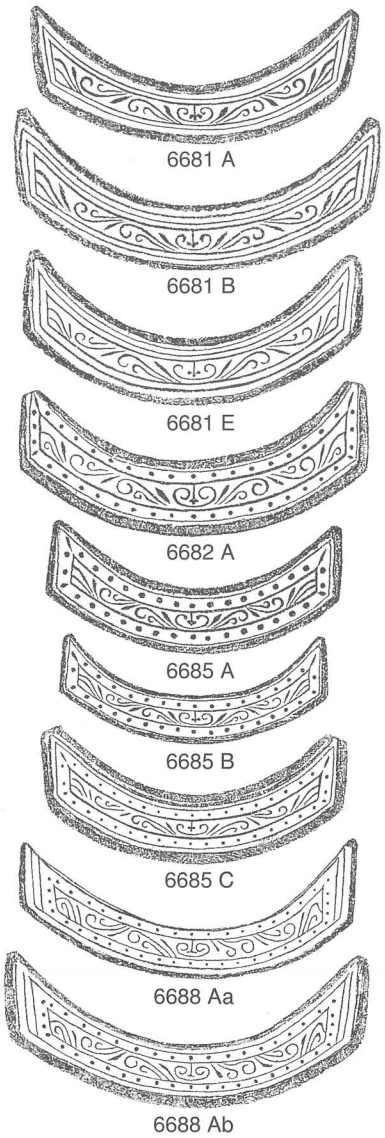


Fig. 50　軒平瓦５

Ｂ（62点、PL.59）　笵の縁に１段彫り下げた平坦面をつくり、これを利用して外縁をつくる。さらに外側には、笵に規定されない部分がめぐるため、外縁は途中に平坦面をもち２段になる。Ｂはこの途中の平坦面が内・外区の文様の凸線よりさらに一段高い。顎形態は曲線顎Ｉと、幅1.0cm程度のなだらかな平坦面をもつ曲線顎Ⅱが混在する。曲線顎Ⅱの例には笵割れを生じるものがあり（PL.59-3）、曲線顎ＩからⅡへの変化が明瞭である。曲線顎Ｉのものは凸面に横縄タタキを施し、瓦当寄り15.0cm程度に横ナデを施す（PL.59-2）が、曲線顎Ⅱのものは凸面に縦縄タタキを施すものが混じる（PL.59-3）。焼成は良好で明灰色～暗灰色を呈する。

曲線顎
Ｉ → Ⅱ

Ｅ（64点、PL.59）　外縁の作り方や形態はＢと共通するが、外縁の途中にある平坦面は内・外区の文様の凸線とほぼ同じ高さである。曲線顎Ｉだが、幅１cm以下の狭い平坦面をもつものも多く、曲線顎Ⅱと見分けにくい。調整はＡ・Ｂと共通するが、凹面に粗いカキメがつくものが１点ある。焼成は良好で明灰色～暗灰色を呈する。

6682型式　6664型式と文様構成は同じだが、中心飾りは6681型式と同様に、単線と珠点からなる三葉形である。唐草第３単位の主葉は界線につくが、第１支葉は界線につかない。Ａ～Ｇの７種があり、Ａが出土した。

Ａ（２点、PL.58）　他種に比べて第３単位がやや短い。平城宮出土の同笵例には、段顎、直線顎の例もあるが、今回出土したのは曲線顎Ｉである。凸面に縦縄タタキを施し、瓦当寄り幅4.0cmに横ナデを施す（PL.58）。凹面は糸切り痕を残し、瓦当寄りの幅0.6cm程度に横ケズリを施す。焼成はやや良好で明灰褐色を呈する。

6685型式　文様構成、中心飾りは6682型式と同じだが、唐草第３単位主葉と第１支葉が共に脇区界線につき、全体的に幅狭である点が異なる。Ａ～Ｆの６種があり、Ａ～Ｃが出土した。

Ａ（５点、PL.58）　界線・文様がやや太めで、中心葉の巻きが弱い。顎幅４～５cmの段顎ＩＳである。凸面に縦縄タタキを施し、瓦当寄り幅７cm程度に横ナデを施す。凹面は横ナデまたは横ヘラケズリを施す。焼成がやや甘い淡黄灰白色～灰褐色のものと、焼成が良好な暗灰褐色のものがある。

Ｂ（１点、PL.58）　同型式中最小で、脇区珠文は一つのみ。顎幅2.7cmの段顎ＩＳＳである。凸面に縦縄タタキを施し、凹面に横ナデを施す。焼成はやや良好で暗灰色を呈する。

Ｃ（１点、PL.58）　幅１～２cm程度の広い外縁をもつ。顎は直線顎で、凸面に縦縄タタキを施し、瓦当寄り幅８cm程度に横ナデを施す。凹面は横ナデを施し、布目を丁寧に消す。焼成はやや甘く明灰褐色を呈する。

6688型式　３回反転だが、右第１単位が逆転し上外区界線から派生するもので、両脇区の界線は二重になる。Ａ・Ｂの２種があり、いずれも出土した。

Ａａ（３点、PL.60）　中心飾りが逆Ｔ字形のもの。唐草、界線、珠文を彫り直す前の段階をＡａとして区別する。顎幅4.5cm程度の段顎ILで、顎部に粘土を若干貼り付けたのち、さらに顎部を削りだして段顎をつくる。凸面に斜格子タタキの痕跡を残し（PL.60）、凹面は瓦当寄り幅3.5cm程度に横ケズリを施す。焼成はやや良好で暗灰色～灰褐色を呈する。

Ａａは段顎

Ａｂ（16点、PL.60）　Ａａの唐草・界線を太く、珠文を大粒に彫り直したものである。削り出し段顎の１点を除き、全て直線顎である。段顎のものは、顎幅が7.5cmと広く、直線顎を0.2cm程度削り出すことで段顎をつくる。いずれも凸面に縦ヘラケズリ、凹面に横ナデを施すが、段顎のものは6688Ａａと共通する横ケズリを施し、上外区の一部を削り取る。焼成がやや甘い黒灰褐色のものと、焼成が良好な灰褐色のものがある。

Ａｂは直線顎

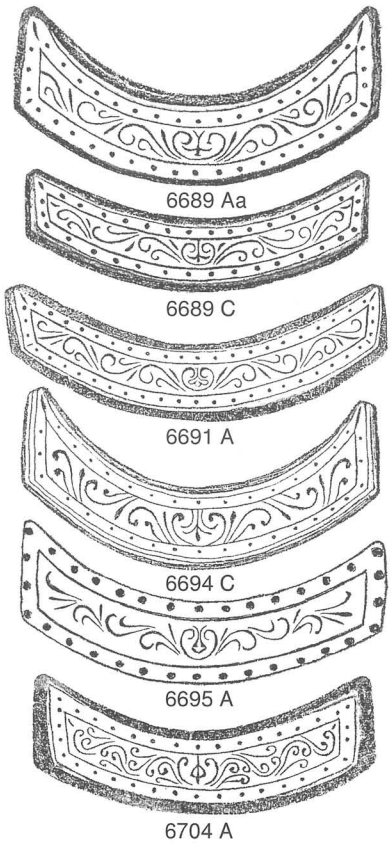


Fig. 51　軒平瓦６

6689型式　３回反転で6664型式と同じ文様構成だが、中心飾りは花頭形の軸が単線で、下端が大きく開く三葉形をなす。Ａ～Ｃの３種があり、Ａ・Ｃが出土した。

Ａａ（１点、PL.59）　中心飾りの基部が界線につかず、唐草は大きいが巻きは他種に比べ若干弱い。二股に分かれた中心飾り基部を一つに合わせる彫り直しにより、ＡａとＡｂに分けるが、今回出土したのはＡａである。段顎ＩＬで、貼り付けた顎の剥離面を明瞭に残す。顎幅は7.3cmである。凹面瓦当寄りに横ヘラケズリを施す。堅緻に焼き上がり暗灰褐色を呈する。

Ｃ（４点、PL.59）　中心飾りの基部が界線につき、唐草は分離気味で展開に連続性を欠く。内区の両上隅には遊離した唐草をおく。幅2.0cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面に縄目が細かい縦縄タタキを施した後、瓦当寄り幅7.0～13.0cm程度に横縄タタキを施し、瓦当付近に横ナデを施す。凹面は瓦当寄り幅3.0～4.0cm程度に横ケズリを施す。焼成は良好で黒灰色～暗灰褐色を呈する。

6691型式　４回反転で6667型式によく似るが、中心飾りの花頭形の軸が単線になる。Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｆの４種があり、Ａが出土した。

Ａ（39点、PL.61）　中心飾りの軸の基部が界線につかず、先端がわずかに開く。２本の第４単位の支葉のうち、主葉に近い方は長くのびて脇区界線につくが、もう一方は短い。幅1.5～2.0cmの平坦面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面瓦当寄り１／３程度の範囲に縦ナデを施した後、縦縄タタキを施すが、これに重ねて狭端付近に斜め縄タタキを施すもの（PL.61-1）や、瓦当寄り幅８～９cm付近に幅４cm程度の横縄タタキを施すものがある（PL.61-2）。凹面は瓦当寄り１／２程度に横ナデを施す。製作技法や笵傷進行については、佐川正敏がすでに詳細な分析をおこ

数種の調整技法

なっているが、その分類に従えば、「恭仁宮Ⅰ種」以降に製作された各種が出土していることになる[13]。狭端面に凹面から連続する布の端の圧痕と、木目の圧痕を残すものが2点ある（製作技法は「恭仁宮Ⅱ種」と同じ。PL.61-1）。焼成は堅緻で暗青灰色～暗灰色を呈するものが多いが、やや焼成が甘い明灰色～明黄灰色のものもある。

狭端面に布目と木目

6694型式　3回反転で、中心飾りは単線の軸の下端が大きく開く三葉形の左右両側に、J字状と逆J字状の二葉をおく五葉形である。A種のみである。

A（8点、PL.59）　中心飾りや唐草の基部が界線につき、先端が滴状にふくらむ。段顎ⅠSSだが、顎は浅い。凸面に縄目が細かい横縄タタキ、凹面の瓦当付近に横ヘラケズリを施す。平瓦部凹面に枠板痕を残すものがある。焼成は良好のものとやや軟質のものがあり、いずれも黒灰色を呈する。

6695型式　4回反転で、中心飾りは花頭形をなし、軸の基部が大きく開いて界線につかない。A・Bの2種があり、Aが出土した。

A（2点、PL.60）　唐草の巻きが弱く、第2単位第2支葉を欠く。外区の珠文が大きく、外縁を全て削り取る。顎部は曲線顎Ⅰ。凸面は横縄タタキの後、縦ナデを施し、凹面は瓦当付近に横ヘラケズリを施す。側面に縄タタキを施すものがある。焼成はやや甘く明灰褐色を呈する。

6704型式　4回反転で中心飾りは「中」字形の左右に上向きの唐草をおく。A種のみ。

A（1点、PL.60）　主葉と支葉の区別がつきにくく、やや乱雑に絡み合う。外区の珠文は若干小粒である。幅2.3cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面に細かい縦縄タタキを施し、瓦当寄り幅13.0cm程度に縦ナデを施す。凹面は横ナデを施し、両側端部に幅1.0cmの面取りをおこなう。瓦当両隅を欠くが、これは屋根に葺く際に故意に打ち欠いた可能性がある。焼成は良好で淡灰褐色を呈する。

6713型式　5回反転で、中心飾りは先端が左右に分かれる二葉形である。A種のみ。

A（2点、PL.60）　中心飾りから派生した唐草の各単位が連続する。中心飾りは軸の基部が上外区界線につき、ここから左右に中心飾りから派生する唐草を配する。曲線顎Ⅰで凸面に縦ヘラケズリを施す。側面のヘラ切り調整が凹面まで届かず、その間に布目が付着する未調整部分を残す。焼成がやや甘く淡灰褐色を呈する。

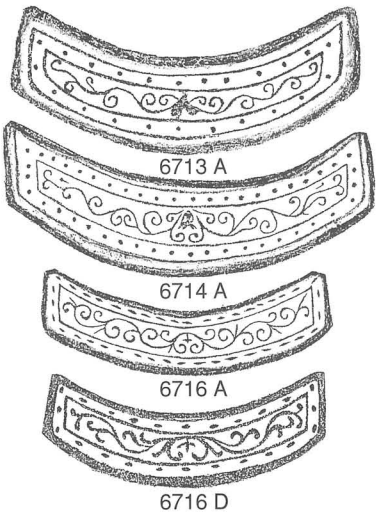


Fig. 52　軒平瓦7

6714型式　5回反転で、中心飾りは逆牛頭形の図像を配する。A種のみ。

A（1点、PL.60）　逆牛頭形の中心飾りの左右を、上から垂下する唐草で挟み込む。ここから左右に唐草が派生し、各単位が連続する。小片のため顎形態や調整は不明である。焼成は良好で灰褐色を呈する。

6716型式　中心飾りは三葉文を下向きの中心葉で囲む。唐草の各単位は連続し、反転回数は2～4回のものを含む。A～Fの6種があり、A・Dが出土した。

A（2点、PL.60）　4回反転で第4単位が狭い。外区珠文は杏仁形をなす。曲線顎Ⅱで瓦当付近は凸面に縦ナデ、凹面に横ケズリを施す。焼成は良好で灰褐色を呈する。

D（1点、PL.60）　瓦当幅が狭く、唐草は2回反転だが、支葉が複雑に巻き込む。外区珠文は杏仁形である。摩滅が著しく、顎形態や調整は不明である。同笵例は大安寺にあるが、平城宮ではこれまで出土例がない。焼成はやや甘く明茶褐色を呈する。

宮内初出土

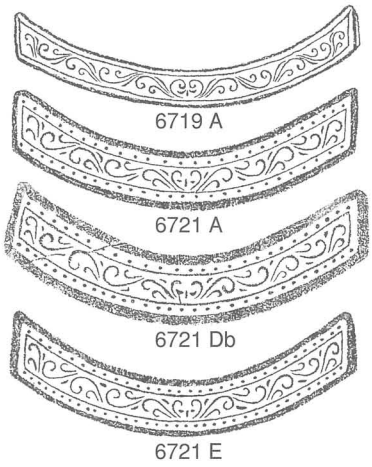


Fig. 53　軒平瓦8

6719型式　5回反転で、中心飾りは下向き三葉文を上向きの中心葉で囲む。A・Bの2種があり、Aが出土した。

A（2点、PL.60）　外区珠文帯を欠き、二重に界線がめぐる。平瓦部と瓦当の厚さがほぼ等しい直線顎で、凸面に縦縄タタキを施し、凹凸面の瓦当付近に幅約3㎝の横ヘラケズリを施す。凸面の縄タタキが側面におよぶものがあり、1枚作りであることを示す。胎土に砂粒を多く含む。堅緻に焼き上がり青灰色を呈する。

6721型式　6719Aと唐草、中心飾りの特徴が一致し、外区に小粒の珠文帯をめぐらせる。A・C～Kの10種があり、A・C～E・G・Hが出土した。

A（5点、PL.61）　中心飾りの三葉文の左右二葉がほぼ水平である。唐草の巻き込みは弱い。顎に幅1.0㎝程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面には斜め縄タタキ後、瓦当付近に縦ヘラケズリまたは縦ナデを施す。凹面は瓦当付近に横ナデを施す。焼成は良好かやや甘く暗灰色～暗黄灰色を呈する。

C（48点、PL.61）　中心飾りの三葉文の左右二葉は、外側が高く逆ハの字形になる。唐草の巻き込みは弱い。曲線顎Ⅱで、平坦面の幅が1.0㎝程度のものと1.5～1.8㎝程度のものがある。凸面に斜め縄タタキを施した後、瓦当寄り1／3程度に縦ナデないしケズリを施すもの（A手法）と、まず瓦当寄りに縦ナデないしケズリを施した後、縦縄タタキを施し、さらに狭端面から1／2程度に斜め縄タタキを施すもの（B手法）がある（PL.61左1、2）。B手法は6691Aの「恭仁宮Ⅱ種」と共通する。凹面は瓦当付近に横ナデを施す。

A手法とB手法

B手法を施すものは、狭端面に凹面から連続する布の端と木目の圧痕がつく。これは、凸型成形台の端に付く立ち上がり部の圧痕であろう。成形台上に敷いた布の端が立ち上がり部に若干かぶったものとみられる。同様な痕跡は「恭仁宮Ⅱ種」の6691Aにもあり、狭端面の木目まで一致するため、同じ成形台を使用したと考えてよい（PL.61）。しかも両者は顎形態、焼成具合、色調まで一致している。A手法を施すものは焼成がやや良好で黒灰色～暗灰色を呈する。

6691Aと同じ成形台を使用

6721Cの変遷

東院庭園地区出土例は、いずれも中心飾りから右第1単位主葉にかけて笵傷を生じている（Ⅰ段階）。この傷がないもの（0段階）が東院西辺部北半（第22次南[14]）から出土している。この傷がさらに進行して、右第1単位第1支葉までのびるもの（Ⅱ段階）は法華寺西南隅（第80次[15]、第312次[16]）から出土している（Fig.54）。ただし、いずれも顎形態や技法に変化はない。宮内に比べ、法華寺への供給時期が若干下がる可能性もあるが、比較検討可能な良好例の増加を待つ必要がある。

Db（1点、PL.61）　中心飾りの三葉文の左右二葉が反りあがり、先端が中心葉の上端より上に出る。文様、界線がやや太めで、珠文もやや大粒である。文様、界線、珠文を太く彫り直したものをDbとして区別する。約1.7㎝の平坦面をもつ曲線顎Ⅱである。唐草文の左第3単位

付近で笵割れを生じるものがあるが、東院庭園地区出土例には笵割れがない。凸面に縦ヘラケズリ、凹面は瓦当寄り幅9.3cmに横ヘラケズリを施す。堅緻に焼き上がり黒灰色を呈する。

E（1点、PL.61）　中心飾りの三葉文の左右二葉と各単位の支葉が丸みをもち、楕円形状になる。幅1.7cmの平坦面をもつ曲線顎Ⅱである。残りが悪く、調整は不明。焼成は甘く黒灰色を呈する。

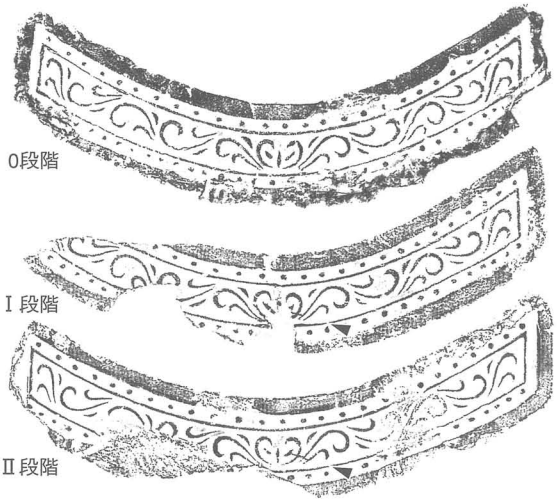


Fig. 54　6721Cの変遷（1：4）

Ga（59点、PL.62）　中心飾りの三葉文の左右二葉がほぼ水平に並び、唐草の巻き込みが強い。唐草の右第5単位の第2支葉を欠く。外縁がなく二重に界線がめぐる。平瓦部より瓦当が若干厚い直線顎である。凸面に斜め縄タタキを施したのち、瓦当寄りに縦ヘラケズリを施す（PL.62）。このケズリが長さ6.0～7.0cmのものと、25.0cm程度に達するものがある。縄タタキの痕跡がよく分かるものでは、幅3.5cm程度、長さ18.0cm以上の縄タタキ原体を用いて、凸面を上にして狭端部を手前においたとき、右から左に8回余りタタキ調整をおこなっていることが分かる。凹面は瓦当寄りの幅5cm程度に横ヘラケズリを施し、凹面に糸切り痕を残すものがある。凹面に布端痕を残すものがあり、一枚作りであることが分かる。焼成は、やや甘めで軟質の明灰褐色～灰褐色を呈するものと、堅緻に焼き上がった青灰色のものがある。

Ga は直線顎

Gb（56点、PL.62）　Gaの笵の端を削り落として、外縁をつくるものである。顎形態は直線顎が大半を占め、幅1.5cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱが3点混じる（PL.62-2）。前者の凸面調整はGaのケズリが長い方と一致し（PL.62-1）、凹面調整もGaと共通する。黒灰色を呈し焼成が良好なものと、明灰色を呈し焼成がやや甘いものがある。

Gbはごく一部に曲線顎Ⅱ

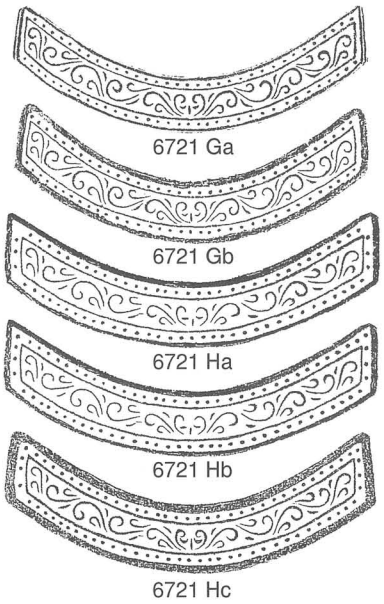


Fig. 55　軒平瓦9

Ha（6点、PL.62）　脇区にも珠文をおくのは同型式中でHとJのみである。中心飾りの三葉文はGに似るが、唐草の巻き込みが弱い。顎部は平瓦部より瓦当の方が若干厚い直線顎と、平瓦部が瓦当寄り付近で凸面側に大きく湾曲する曲線顎Ⅰ（PL.62-2）がある。調整はGと共通し、凸面は斜め縄タタキののち、瓦当寄り24.0cm程度に丁寧な縦ヘラケズリを施す（PL.62-1）。凹面は瓦当寄り8.0cm程度に横ヘラケズリを施すが、ケズリがおよばない部分には、糸切り痕が明瞭に残る。上隅部を欠きHbと見分けがつかないものが15点あり、別表2では単にHとしたが、見分けがつくもののうちHbはわずか1点であることからみて、ほとんどはHaであろう。堅緻で明灰褐色のものと、やや焼成が甘く暗灰褐色～黒灰色を呈するものが混在する。

Ha は直線顎と曲線顎Ⅰ

Ｈｂは曲線顎Ⅰ

Ｈｂ（１点、PL.62）　Ｈａの上外区珠文帯の両隅に珠文を彫り足したものがＨｂである。曲線顎Ⅰである。小片のため調整は不明である。焼成は良好で暗灰色を呈する。

Ｈｃは曲線顎Ⅱ

Ｈｃ（４点、PL.62）　Ｈｂの中心飾りの三葉文と各唐草の基部をのばしたものがＨｃである。幅1.4～1.8cmの平坦面をもつ曲線顎Ⅱで、凹凸面の調整はＨａと共通する（PL.62）。堅緻に焼き上がった青灰褐色や黒灰色のものと、焼成が良好な暗灰色のものがある。

6726型式　３回反転で、中心飾りは上向き三葉文を上に巻く唐草で囲む。Ａ・Ｂ・Ｄ～Ｆの５種があり、Ｂ・Ｅが出土した。

Ｂ（２点、PL.63）　第１・２単位の主葉が巻き込む側に支葉を２つおく。外区珠文は間隔が粗い。幅2.5cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面は縦縄タタキの後、瓦当付近に横ナデ、凹面は瓦当付近に横ヘラケズリを施す。焼成はやや甘く灰褐色～黄灰白色を呈する。

Ｅ（19点、PL.63）　唐草の基部が界線から派生し、各単位の第２支葉が直線的で長い。大きく反りあがった瓦当面の上部両隅を切り落として、三角形に面取りをするものが多い。顎形態は曲線顎Ⅱだが、顎部の平坦面が幅1.6～1.8cmのものと、幅2.2～2.5cmの広いものがある。凸面に縦縄タタキ、瓦当付近には横ナデを施し、瓦当寄り8.5～12.5cm程度の幅に横縄タタキを施す（PL.63-1）。一部に横縄叩き目が粗いもの（PL.63-2）や凸面側縁付近に縦ヘラケズリを施すものが混じる（PL.63-3）。凹面は、瓦当寄りに半円を描くように横ケズリを施す。焼成が良好で、暗灰褐色～黒灰色を呈するものが多いが、中には堅緻に焼き上がった暗灰色のもの、焼成がやや甘い灰白褐色のものが一部混じる。

6726Ｅの変遷

笵傷進行で３段階に分けることができる（Fig.57）。Ⅰ段階は外区珠文に笵傷がある。Ⅱ段階は右第１単位主葉から第２単位第２支葉にかけて、横方向に２～３本の笵傷を生じる。Ⅲ段階は、右第３単位基部に横方向の笵傷を３本生じる。Ⅲ段階の確実な例は東院庭園地区で出土しておらず、その周辺部（第280次東地区[17]）等から出土している。東院庭園地区には笵傷の比較的少ないものが供給されていることから、6726E製作前半段階の主要な供給先の一つとみてよいだろう。

6726Ｅの主要供給先

6732型式　３回反転で、中心飾りは上向き三葉文の左右を上へ巻く唐草で囲み、その上にＶ字形の対葉花文をおく。唐草の各単位に多くの支葉が伴い、第３単位は脇区につかずに巻き込む。外区に大粒の珠文を粗くめぐらせる。Ａ・Ｃ～Ｏ・Ｑ～Ｓ・Ｕ～Ｘ・Ｚの22種があり、Ｃ・Ｌ・Ｖが出土した。

Ｃ（７点、PL.63）　同型式中で唐草の巻きがやや弱い。曲線顎Ⅱで平坦面の幅が1.8cm程度のものと2.6cm程度のものがある。調整技法は6726Eと共通し、凸面の横縄タタキの範囲は瓦当寄り幅9.0～14.0cm程度である（PL.63）。凹面は瓦当寄りに横ヘラケズリを施すが、範囲は3.0～5.0cm程度のものと、10.0cm以上におよぶものがある。焼成がやや良好で暗灰色～黒灰色、あるいは灰白褐色を呈するものが多く、一部に堅緻に焼き上がったものが混じる。

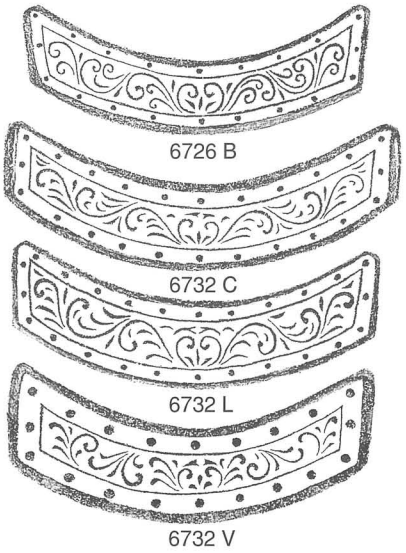


Fig. 56　軒平瓦10

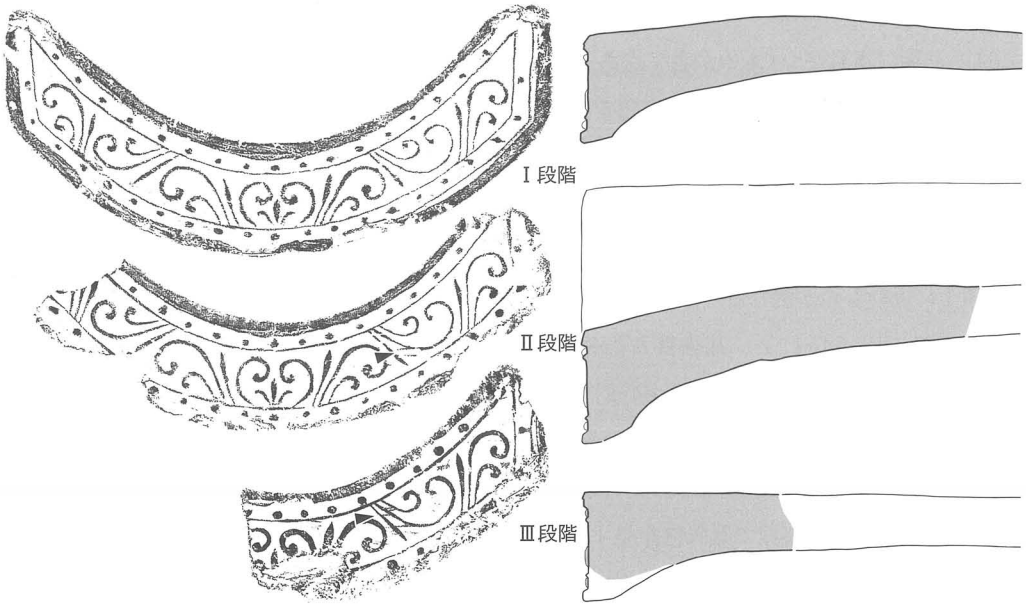


Fig. 57　6726Eの変遷（1：4）

L（3点、PL. 63）　内区の幅が広く、唐草の巻き込みが弱く、珠文がやや小粒である。幅2.0cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱで、凸面の瓦当寄りに横ナデを施す。焼成が良好で灰褐色を呈するものと、焼成がやや甘い茶白色～暗黄灰色のものがある。

V（5点、PL. 63）　中心飾り・唐草の基部が短く、各単位が分離気味である。支葉が少なく、珠文は大粒である。今回出土したものは全て、右端の第3単位から右脇区にかけて顕著な笵割れを生じる。平瓦部より瓦当面がかなり厚い直線顎で、凸面に縦ナデ、凹面に横ナデを施す。焼成はやや良好で黒灰色を呈する。

6755型式　5回反転で、紡錘形の中心飾りが上に巻く唐草と組み合う。A種のみ。

A（1点、PL. 63）　唐草は支葉を欠き、右半は上下交互に、左第3～5単位は下向きに巻き込む。1.5cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱで、凸面調整は6726Eと共通し、瓦当寄り幅7.2～11.4cm横縄タタキを施す。凹面は瓦当付近に横ナデを施す。焼成はやや甘く黒灰色を呈する。

6759型式　破片しか出土しておらず、全体の文様構成は不明である。巻き込みの強い唐草が多くの支葉と複雑に絡む。唐草が中心から左右に展開することを除けば、唐草の雰囲気は6760型式と共通性が高い。A・Bの2種があり、Aが出土した。

A（1点、PL. 63）　唐草の反転は3回の可能性が高い。Bに比べて唐草が屈曲気味である。外区が1段高い点は6760型式と共通する。顎形態は直線顎で、凹凸面ともに瓦当寄りの部分に横ナデを施す。焼成は良好で黒灰色を呈する。

6760型式　4回反転で、唐草が左右両端から中心に向かって連続し、各単位に多くの支葉が複雑に絡む。中心飾りは3弁の花文を横向きに表現する。外区が内区より1段高い。A・Bの2種があり、いずれも出土した。この型式には施釉製品があるが、今回は出土していない。　**施釉はなし**

A（10点、PL. 64）　同笵例では右上隅に笵割れを生じるものがあるが、今回の出土例中では、この部分に笵傷を生じる程度で、笵割れには至らない。顎部は平瓦部よりも瓦当面が厚い直線顎が多いが、曲線顎Ⅰも少数混じる。凸面に斜め縄タタキ、凹面の瓦当寄り7cm程度に横ナデを

施す。右上がりと左上がりの縄叩き目が混じるもの（PL.64）、凸面に布目がつくものが各１点ある。胎土は精良で赤色粒を含む。焼成が甘く黄灰白色を呈するものと、やや良好で暗茶灰色～黒灰色を呈するものがある。

B（12点、PL.64）　Aと支葉の細部が異なり、内区がやや幅広で唐草が大振りである。顎形態は直線顎だが、曲線顎Ⅰに近いものが混じる。凸面全面に斜め縄タタキを施すもの（PL.64-1）と、瓦当寄り幅８cm程度に横ナデ、残りに縦ナデを施すもの（PL.64-2）がある。凹面は幅８cm程度に横ヘラケズリを施す。側面に布目が付くものがある。焼成が良好で黄灰白色ないし、灰白色～暗灰褐色を呈するもの、堅緻で黒灰色を呈するものがある。

2種の凸面調整

6763型式　３回反転で、中心飾りは上向きの三葉文である。第１単位の基部が上向き三葉文の左右二葉の上から派生し、下向きに巻く。外区の珠文は大粒で間隔が粗い。A～Cの３種があり、Aが出土した。

A（１点、PL.64）　第２単位第１支葉が１本である。幅2.7cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱだが、段顎風に急に厚くなる。凸面の瓦当付近に横ナデ、凹面の瓦当付近に横ケズリを施す。焼成は良好で灰褐色を呈する。

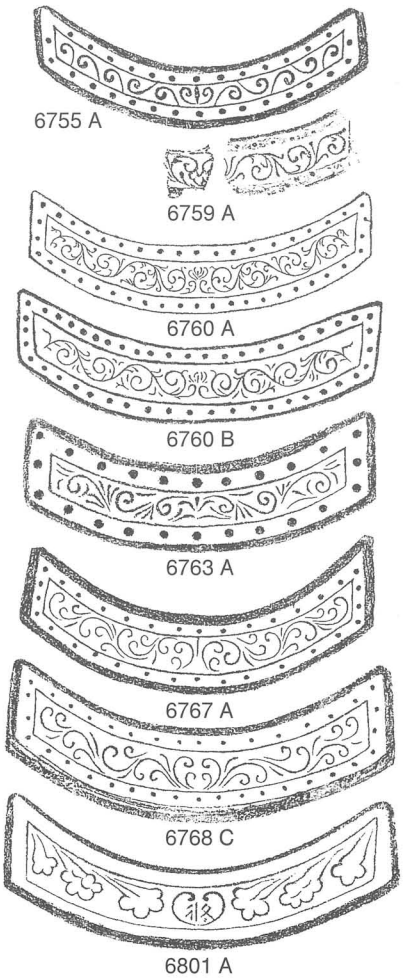


Fig. 58　軒平瓦11

6767型式　４回反転で中心飾りは縦位の単線からなる。唐草の第１単位は中心飾りに向かって下から上に巻き上げる。唐草は細く多数の支葉を伴う。A・Bの２種があり、Aが出土した。

A（１点、PL.64）　Bと比べて各単位がやや分離気味である。脇区に珠文を４つおく。幅1.2cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱである。凸面は縦ナデ後瓦当部寄りに幅3.0cm程度の横ナデを施す。凹面は瓦当寄りの幅4.5cm程度に横ケズリを施す。焼成は良好で暗灰褐色を呈する。

6768型式　４回反転で中心飾りが上向きの唐草を二重に配するものである。唐草が繊細で第１支葉が大きい。A～Dの４種があり、Cが出土した。

C（１点、PL.64）　中心飾りの二重唐草の内側が分離し、対向するC字形をなす点でAに似るが、Aより内区が広く唐草が大振りである。幅2.0cmの平坦面をもつ曲線顎Ⅱで、凸面は縦ナデ後、顎部寄りに幅2.5cmの横ナデ、凹面は横ナデを施す。焼成は堅緻で暗青灰色を呈する。

6801型式　脇区から中心に向かって、３単位の飛雲文をおく。中心飾りは、「修」の異体字を上向きの唐草で囲む。A種のみ。

A（５点、PL.64）　外区は素文で、0.5～0.6cmの平坦面を挟んで外縁に至る。幅1.5cm程度の平坦面をもつ曲線顎Ⅱで、平坦面から顎部につながる部分は、しっかりとした角にならず、やや丸みをもつ。凸面に縦縄タタキを施した後、瓦当寄り10.0cm程度に横ナデを施し、凹面は瓦当寄り1.5cm程度に横ヘラケズリを施す。凸面には離れ砂が顕著に残る（PL.64）。焼成が良好で灰褐色を呈するものと、堅緻に焼き上がり暗灰色を呈するものがある。

凸面に離れ砂

C　丸・平瓦

出土量　丸瓦25820点、3341kg、平瓦58344点、8313kgが出土した。今回対象とする丸、平瓦の完形品の平均重量は、それぞれ2.8kg、3.8kgで、これを単純に総重量と比較すると、丸瓦1193点分、平瓦2188点分が出土したことになる。瓦点数の計算方法としては、隅数計算法がある。瓦片の中で四隅のいずれかを含むものを抽出して隅数を合計し、完形品の隅数である４で割るという方法である。これによると丸瓦442点分、平瓦1064点分が出土したことになる。しかしこの方法では、軒瓦や面戸瓦、熨斗瓦などの道具瓦が混入している可能性が残る。

以下、丸・平瓦の製作技法を基に分類をおこない、それぞれの特徴と法量を報告する。

丸瓦の分類（PL.65～66）　出土した丸瓦は全て玉縁式である。基本的な製作技法は、模骨の周囲に紐ないし板状の粘土を巻きつけ（第一次成形）、表面（凸面）にタタキなどの調整を施した（第二次成形）のち、模骨から取り外して半裁するというものである。丸瓦は、第二次成形が二つの工程（第１次調整、第２次調整）に分か

Tab. 5　丸瓦の分類指標

分類	成形技法	第１次調整	第２次調整
Ia	粘土紐巻きつけ(I)	縦縄タタキ(A)	縦ナデ(a)
Ib	〃	〃	横カキメ(b)
IIA	粘土板巻きつけ(II)	縦縄タタキ(A)	縦・横ナデ(a)
IIB	〃	格子タタキ(B)	〃

Tab. 6　丸瓦の法量と特徴

分類	全長(cm)	筒部長(cm)	玉縁長(cm)	筒部広端幅(cm)	筒部狭端幅(cm)	筒部広端厚(cm)	玉縁部幅(cm)	玉縁部厚(cm)	焼成・色調	その他	図版番号
Ia	45.0～	37.2	7.5	－	19	－	14.2	2.5	堅緻、灰白褐色。	粘土紐幅4.0～5.0cm。	PL.65－1
Ib	39.4	33.5	5.7	－	18.2	－	14.7	1.7	堅緻、暗青灰色。	粘土紐幅3.0～3.5cm。	PL.65－2
Ib	－	36.7	－	－	－	－	－	1.7	やや甘、黒灰色。	粘土紐幅3.5～4.5cm。	
IIA	42.1	39.7	2.1～	18.9	18.5	－	－	2	甘、黒灰色。	筒部長い。	PL.65－3
IIA	35.5	31.3	4.2	13.5	－	－	－	1.5	須恵質、堅緻、暗青灰色。	筒部短い。	
IIA	34.2	30.8	3.6	－	15.2	－	－	1.6	やや甘、明灰～暗灰色。	筒部短い。	
IIA	33.8	29.3	4.2	－	15.2	－	11.2	1.6	やや良、明灰褐色。	筒部短い。凹面より幅0.6cmの切り込み入れて割る。破面残る。	PL.65－4
IIA	37.9	31.7	6.4	－	17.4	1.3	12.2	2	堅緻、灰褐色。	玉縁部横ナデ多数。筒部側面、玉縁部先端角打ち欠く。凹面ヘラ描き「ナ」。	PL.66－10
IIA	38	32.4	6	16.4	17.1	1.4	12.2	2	堅緻、暗灰色。		
IIA	37	32.7	4.8	－	－	1.3	9.5	1.6	良好、暗灰褐色。		
IIA	36.9	31.2	5.6	16.5	15.9	1.5	10.2	1.8～2.0	やや良、黒灰褐色。	玉縁部凸面側縁面取り幅1.3cm。	
IIA	38.7	33.5	5.4	15.6	14	1.6	10.4	1.8	良好、灰白褐色。	玉縁部凸面側縁面取り幅0.2cm。	
IIA	39.4	33.5	6	－	14.8	1.5	10.9	2	良好、灰白褐色。	凹面糸切り、粘土板つぎ目、玉縁部凸側縁面取り幅0.4cm。	
IIA	35	31	4.3	16.9	16.5	1.5	12.5	2.5	甘、黒灰色。	筒部凹面切り込み幅1.3cm。破面残。	
IIA	41.2	33.5	8	16.6	16.1	1.2	11.5	2	堅緻、灰白色。	玉縁部長い。凸面横ナデ。	PL.66－9
IIA	35.0～	34	－	16	16	1.2	－	2.1	やや甘、褐白色。	筒部のみ残る。	
IIA	37.4～	35.1	－	19.2	18.5	1.8	－	2.2	やや良、灰白色。	筒部のみ残る。凹面糸切り痕？。	
IIA	38.3	31.5	6.5	－	16.6	1.2	12.2	1.8	堅緻、暗灰色。	側面切れ込み幅0.6cm、破面残。玉縁部先端角打ち欠く。Iaの可能性あり。	
IIA	29.3～	21	8.1	－	17	－	12.3	1.5	須恵質、堅緻、暗青灰色。		
IIA	24.4～	16.2	8.2	－	19	－	13.6	1.3	良好、明灰褐色。	玉縁部凸面に縄目残る。	
IIB	32.3～	28.8～	3.5	－	14.3	－	10.9	1	良好、明灰～暗灰色。		PL.66－8
IIB	27.1～	27.1～	－	－	－	－	－	1.2～1.4	堅緻、明灰褐色。		
IIB	20～	16.0～	3.6	－	14.2	－	11	1.8	やや良、黒灰色。		

れることが多い。そこで、これらの各段階における技法に基づき分類する。凹面調整、玉縁の面取りなど、さらに詳細に分類する要素はあるが、分析可能な資料数が限られるため、凸面調整に着目した。なお、対象となる丸瓦のほとんどが小片であるため、残りのよい23点を基に分類をおこない、小片でこれを補足した。分類指標はTab.5、法量はTab.6のとおりである。

平瓦の分類（PL.66～70）　基本的な製作技法は、紐ないし板状の粘土を模骨に巻くか、成形台上におき（第一次成形）、表面にタタキなどの調整を施した（第二次成形）のち、模骨から外して分割、あるいは成形台からおろすというものである。桶巻き作りは、第二次成形が第1、2次調整からなることが多い。以下、各段階の技法に基づき分類する。凹面、側面調整など、さらに詳細に分類する要素はあるが、ここでは資料数の限界から、凸面調整に着目した。なお、対象となる平瓦のほとんどは小片なので、残りのよい23点を基に分類をおこない、小片でこれを補足した。分類指標はTab.7、法量はTab.8のとおりである。

Tab. 7　平瓦の分類指標

分類	成形技法	粘土素材	第1次調整	第2次調整	そのほか
I1a	桶巻き作り(I)	粘土紐使用(1)	縦縄タタキ(A)	横・縦ナデ(a)	
I1b	〃	〃	〃	横カキメ(b)	
I2a	〃	粘土板使用(2)	〃	横・縦ナデ(a)	
I2b	〃	〃	〃	横カキメ(b)	
I2c	〃	〃	〃	なし(c)	
ID	〃	〃	平行タタキ(D)		
IIA	一枚作り(II)	〃	縦縄タタキ(A)		離れ砂着くものあり。
IIB	〃	〃	横縄タタキ(B)		
IIC	〃	〃	格子タタキ(C)		格子目に粗密あり。
IID	〃	〃	平行タタキ(D)		平行目に粗密あり。

Tab. 8　平瓦の法量と特徴

分類	全長(cm)	狭端幅(cm)	広端幅(cm)	厚さ(cm)	焼成・色調	その他	図版番号
I1a	36.2	25.4	29.3	1.5～2.5	堅緻、灰褐～暗灰色。	粘土紐幅3.0～3.5cm。	PL.67－3
I1a	37	－	－	1.6～2.2	堅緻、茶白灰～暗灰色。		
I1a	39	－	－	2.0～2.6	須恵質、堅緻、灰白色。		
I1b	36	－	29	2.0～2.5	堅緻、明灰色。	粘土紐幅4.5～5.5cm。	
I1b	37.2	25.7	30.8	1.8～2.7	堅緻、灰白色。	粘土紐幅4.0cm。	PL.67－4
I2a	37.4	－	－	1.3～2.3	堅緻、青灰色。		
I2a	36.9	－	25.6	1.3～1.4	須恵質、極堅、暗青灰色。	若干の焼けひずみあり。	
I2a	36.2	24.5	26.9	1.1～1.7	須恵質、極堅、暗青灰色。	上とよく似る。	PL.67－5
I2b	38	26.5～	－	1.5～2.0	良好、明灰色。	側面に破面。凹面側から深さ8mm切れ込み。	PL.68－6
I2b	39.8	30.4	33.7	1.8～2.3	やや甘、黒灰褐色。		
I2b	39	－	－	1.5～2.2	やや甘、黒灰褐色。		
I2c	37.5	24.7	－	1.3～2.7	堅緻、青灰色。		PL.68－8
I2cまたはIIA	39.7	－	－	1.6～2.4	やや甘、黒灰色。	枠板痕あるが、一枚作りか？	
IIA	37.5	26.7	－	2.2～2.7	堅緻、明灰色。	枠板痕あるが一枚作り。	
IIA	33.9	－	－	1.6～2.3	良好、暗灰褐色。	磨滅激しく調整不明。	PL.69－10
IIA	37.1	26.4	－	－	やや甘、淡茶褐色。		
IIA(離れ砂付着)	35.8	22.5	26.5	2.0～2.5	堅緻、暗灰～灰白色。	枠板痕あり。凹面赤色顔料付着。	PL.69－9
IIB					やや甘、黒灰色。		PL.70－13
IIC?	35.5	－	－	－	やや甘、灰白褐色。	枠板痕あり。	
IIC密	－	－	－	1.5	堅緻、灰白色。	格子目1辺5～6mm。枠板痕残すものあり。	PL.66－1
IIC粗	35.2	－	26.2	2.1～2.3	良好、明灰褐色。	格子目1辺10mm。凹型台圧痕。凸面広端付近に指頭圧痕多数。	PL.66－2
IID密	－	－	－	2.1～2.3	堅緻、暗灰色。	叩き板長軸方向に平行する縦刻み目。2～3mmピッチ。	PL.69－11
IID粗	－	－	－	1.8～2.0	良好、暗灰～黒灰色。	叩き板長軸方向に直交する横刻み目。6～7mmピッチ。	PL.69－12

D　道具瓦

i　熨斗瓦（PL. 70）

19点出土した[18]。平瓦風の板状品を半裁して作る。焼成以前に板状品を半裁したもの（以下、切熨斗瓦）が16点、焼成以前に板状品の中軸線上に切込を入れて、焼成後に割るもの（以下、割熨斗瓦）が３点で、うち１点は曲率がなく平坦なもの。平坦なものを除き、全てSB5880柱穴出土で、切熨斗瓦はいずれも掘形から出土し、製作技法も類似する。割熨斗瓦は柱抜取穴から出土し、全く技法が異なる。以下、順に報告するが、製作技法の分類は平瓦に準ずる。

切熨斗瓦は全て一枚作りの平瓦ⅡＡで、離れ砂が着くもの10点、着かないもの５点、不明１点。凸面に指頭圧痕を残すもの12点、ないもの２点、不明２点、凹面にナデを施すもの10点、施さないもの５点、不明１点である。全長は不明、幅は12cm以下の狭いものが12点、12cm以上が４点あり、広端と狭端の差が数mm程度でほとんど変わらない。厚さは1.8～2.0cm程度である。堅緻に焼き上がり、黒灰色ないし灰白色を呈する。

割熨斗瓦はいずれも桶巻き作りで、１点は平瓦Ｉ２ａ。残りのよい方は全長38.5cm、広端幅14.7cm、狭端幅14.5cm、厚さ2.2cm。切込の深さは７mm。堅緻に焼き上がり淡茶褐色を呈する。平坦な熨斗瓦は現存長18.8cm、幅14.3cm、厚さ1.6cmで切込の深さは３mm。片面に縦縄タタキ、その裏側に布目が残り通常の平瓦と共通する。灰白色を呈し焼成はやや甘い。

ii　面戸瓦（PL. 71）

11点出土した。丸瓦と同様の筒状品（いずれも丸瓦分類のⅡＡに該当）を使用し、これを焼成以前に切って作る。全体の形状が分かるものは２点のみで、それ以外はいずれも舌状部のみ残る。うち８点はSB5880柱穴出土で、厚さ1.3～1.5cmのもの６点、1.8cmのもの２点。いずれも凸面に丁寧なナデを施し、縄目を消す。焼成は良好ないし堅緻、黒灰ないし灰褐色を呈する。

全体の形状が分かるものと特殊なものを説明する。丸瓦間に収まる舌状の部分と、丸瓦の上にかぶる部分からなり、凸字形をなすもの（かぶせ面戸）が１点出土した（PL. 71-1）。舌状の部分から丸瓦にかぶる部分にかけて、なめらかな曲線をつくり、この部分の凹面側を面取りする。舌状部のみのものが１点出土した（PL. 71-2）。面取りはない。いずれも半円筒をそのまま利用し、断面形が丸瓦１個体分を占める。凸字形のものは直径13.1cm、かぶせ部分の現存幅13.2cm、舌状部の現存幅10.7cm、舌状部のみのものは直径15.3cm、最大幅は13.8cmである。

降り棟、隅棟に使われたと考えられるもの（登り面戸）が２点出土した（PL. 71-5）。舌状部先端の平坦面に対し、側面の片側がほぼ垂直に立ち上がる。厚さ2.1cm。

iii　鬼瓦（PL. 72）

平城宮式が10点出土した。以下、毛利光俊彦の分類[19]に従って説明する。

Ⅲ式が１点出土した。右目部分のみで、残存長9.6cm。焼成はやや良好で暗灰色を呈する。

Ⅳ式Ｂが１点出土した。左下の部分を除きほぼ完形である。全長43.0cm、頂部から中央下の半円形の刳り部分まで長さ30.7cm、残存幅40.0cm、厚さ4.3cmである。眉の付近に、両外縁まで貫いて左右に走る笵傷（一部笵割れ）がある。焼成は良好で黒灰色を呈する。

Ⅴ式Ａが２点出土した。いずれも右目から右の口元付近の小片で、残存長、厚さはそれぞれ12.7cm、4.7cmと12.8cm、3.5cmである。いずれも焼成は良好で黒灰色を呈する。

Ⅴ式Bが３点出土した。うち１点はほぼ完形品で、残り２点は向かって右の口元から下の部分と、左の口元および左目から左上の部分である。完形品の法量のみ記す。全長27.5㎝、頂部から中央下の半円形の刳り部分まで長さ20.4㎝、幅27.2㎝、厚さ4.9㎝である。焼成は良好で暗灰色を呈する。他の２点はいずれも堅緻に焼き上がり、明灰褐色を呈する。

Ⅵ式Aが２点出土した。右の口元から目元が残るものは残存長31.2㎝、暗灰色を呈し焼成は良好。左の口元が残るものは残存長17.0㎝、焼成はやや甘く灰白褐色を呈する。いずれも裏面は剥離し厚さは不明である。

このほかに型式不明が１点出土している。残存長8.0㎝。焼成は良好で黒灰色を呈する。

E　文字瓦、塼

i　塼（PL.71）

全体で444点、659㎏が出土した。完形品１点分の平均重量と比較すると、107点分出土したことになる。このうちほぼ完形に近い30点を対象として説明する。

形態はいずれも平面形が長方形をなす長方形塼で、方形塼は認められない。調整技法はいずれも共通し、表面に丁寧なナデを施すため、それ以前の調整は不明である。型枠を使用した痕跡もみられず、成形技法についてもはっきりしない。焼成がやや甘く黒灰～灰白色を呈するものが多いが、堅緻に焼き上がり灰褐色を呈するものが少数混じる。

法量はTab.９のとおり。厚さで大きく二分でき、5.4㎝の薄手のものが１点ある他は、いづれも８㎝程度の厚手のものである。全長は29㎝前後を中心とし、31㎝以上のものや27.5㎝以下のものも混じる。幅は16㎝前後で15～17㎝のものが多い。厚手のものに通常の塼のちょうど１/３程度の大きさのものが１点あるが、表面が風化し、本来の面を残すか判断できない。

Tab. 9　塼の法量と特徴

長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(kg)	焼成・色調	備考
31.8	17.5	7.1	6.7	やや甘、黒灰～灰白褐色。	完形
29.8	16	8	6.9	良好、明灰褐色。	完形
29.5	15.5	7.5	5.9	良好、明灰褐～黒灰色。	完形
29.3	15.8	8.2	6	良好、灰褐～灰白色。	完形
29.2	15	8	6	堅、灰褐色。	完形
28	16	7.8	5.5	やや良、灰白色。	完形
31.2	17.2	7.2		やや良、灰白褐色。	
30.3	16.8	8.2	6.4	甘、灰白色。	
30.2	15.7	7.8		良好、黒灰色。	
30		7.3		堅、明灰～暗灰色。	
29.8		8.3		やや甘、黒灰色。	
29.2		7.4		やや甘、暗灰褐色。	
29	16	8.3	6.3	やや甘、黒灰～暗灰色。	
28.2	14.5	8.5	5.4	やや甘、灰白色。	
27.5	14.3	8.2	5.6	良好、黒灰～明灰色。	
26.7	15.4			甘、灰白色。	
	16.2	8.4		甘、黒褐色。	
	16.1	7.8		甘、黒灰褐色。	
	15.4	8		やや甘、黒褐色。	
	15.3	8		やや甘、暗灰褐色。	
	14.2	7.3		やや甘、黒灰色。	
		8		やや甘、暗灰褐色。	
	16.5	7.8		良好、暗灰色。	中央穿孔。PL.71
	15.1	5.4		やや甘、暗灰褐色。	薄い。PL.71

ii　文字瓦

瓦に対する文字の記し方によって刻印瓦、ヘラ書き瓦に分け、以下、この順に説明する。

刻印瓦（PL.73）　『基準資料Ⅸ』の分類に従う。各種の特徴や点数はTab.10のとおり。修理司に関わるとされる「修」「理」などが多い[20]。山崎信二によれば「田」も修理司に関わるもので、「在」もほぼ同時期のものとする[21]。「三」は音如ヶ谷瓦窯[22]、五領池東瓦窯[23]等の出土例と同刻である。

長方形印「夫」は初出土

長方形印「夫」は初出土。平瓦凹面に並列して２ヶ所、うち右側は２回重ねて計３回押捺する。瓦に文字が陽刻となって残る。印端は文字の左右に側端の圧痕がわずかな段差となって残り、印端の上下は見えない。細長い印材に文字を陰刻したのであろう。

ヘラ書き瓦（PL.66、72）　７点出土した。このうち、平瓦６点、丸瓦１点である。いずれも焼成前に鋭利なヘラ状工具で文字ないし記号を記す。

「十」を記すものは丸瓦１点、平瓦２点。丸瓦はⅡＡで、筒部凹面に玉縁部を下にして文字を記す（PL.66丸瓦10、11）。筆順は左から右へ横画、次に上から下へ縦画を記す。堅緻で灰褐色を呈する。平瓦は１点がよく残る（PL.72文字瓦４）。平瓦Ｉ２ａで、筆順は丸瓦と同じ。現存長28.2㎝、厚さ1.7㎝。堅緻で茶白褐色を呈する。もう１点は詳細不明。

Tab. 10　刻印瓦の種別出土点数

文字	種	印長	印幅	押捺場所	点数
修	c	－	－	平瓦凹面	1
	e	1.9	－	平瓦凹面	3
理	a	2.1	2.5	丸瓦凹面	10
	d	1.6	2.0	丸瓦凹面	2
	g	1.6	2.0	平瓦凹面	30
	h	1.7	1.8	平瓦凹面	2
	j	1.6	1.9	平瓦凹面	9
	k	1.7	1.8	平瓦凹面	5
	l	1.8	2.3	平瓦凹面	7
	不明	－	－	平瓦凹面	1
田	a	－	－	丸瓦広端	2
里	a	－	1.2	丸瓦広端	2
在	a	－	1.7	丸瓦広端	2
三		－	－	平瓦凹面	1
北	不明	1.6	1.1	6308B側面	2
井	B	0.8	0.9	6663A側面	2
井	C	0.8	－	6308B側面	4
夫		－	3.2	平瓦凹面	1

「キ」を記すものは平瓦２点でいずれもＩ２ａ。筆順が分かるものは狭端を下にして左から右へ横画を２本記したのち、上から下へ縦画を記す（PL.72文字瓦１）。現存長23.2㎝、厚さ1.9～2.2㎝。堅緻に焼き上がり暗灰色を呈する。

「十九日作」と平瓦凸面に記すものがある（PL.72文字瓦３）。平瓦Ｉ２ａで現存長31.3㎝、厚さ1.5～2.0㎝。堅緻に焼き上がり明灰褐色を呈する。

「里人　□　□□［里人カ］」と記すものがある（PL.72文字瓦５）。平瓦凸面広端部付近に、広端を下に向けて記す。平瓦Ｉ１ｂで粘土紐幅2.5～3.7㎝。側面に凹面側から深さ５㎜の切込を入れて焼成後に割る。現存長29.5㎝、厚さ1.8～2.2㎝。堅緻で明灰褐色を呈する。

判読不明なものが１点ある（PL.72文字瓦２）。単なる記号かもしれない。平瓦Ｉ２ａで現存長8.3㎝、厚さ1.4㎝。堅緻に焼き上がり暗灰色を呈する。

Ｆ　その他の瓦

施釉瓦塼（PL.71）　４点出土。二彩熨斗瓦１点、緑釉塼３点である。熨斗瓦は側面と凸面、塼は隣接する３面に釉薬が残る。胎土は極めて精良で、焼成はやや甘く淡橙白色を呈する。いずれも園池SG5800の北側に散在する。

特殊な瓦塼類、瓦製品（PL.70、73）　凹凸両面に縦縄タタキを施す平瓦が出土した（PL.70平瓦14）。厚さ2.8㎝と厚手で、曲率が弱く、凸面の縄目がつぶれたものが多い。焼成はやや甘く暗灰色を呈する。平瓦の曲率を下げるために凹型台に載せて凹面に縄タタキを施したのであろう。これと共通した特徴をもつ平瓦が第一次大極殿地域などで多数出土しており、完形に近いものは広・狭端の幅の違いがほとんどない。台熨斗瓦などの特殊な用途がに使用した可能性もある。

台熨斗瓦か

平瓦に多数の孔を穿った不整形の瓦製品が１点出土した（PL.73、19-1）。様々な向きから斜めに10回以上穿孔する。最大長8.8㎝、厚さ1.9㎝で、灰白色を呈し焼成はやや良好である。

凸面に指ナデによる凹線をもつ平瓦が出土した（PL.73、19-2）。縦縄タタキ後、強い横指ナデによって幅1.3～1.6cmの凹線を５本以上つくる。指ナデは縄目に直交して整然と施されており、回転台を使用して施文した可能性がある。厚さ1.8cm。焼成は良好で灰白色を呈する。

円形の圧痕が付く平瓦が１点出土した（PL.73、19-3）。圧痕の直径は2.7cmで、銭を押捺した可能性が高いが、文字等は読みとれない。平瓦凹面に２回隣接して押捺する。平瓦凸面にはナデを施す。厚さ2.6cm、焼成はやや甘く黒灰色を呈する。銭の圧痕が付く平瓦の類例が平城薬師寺から出土しており、平瓦凹面狭端側の隅付近に開元通宝を２回押捺する。[24)]

水波文塼とみられる瓦製品が１点出土した（PL.73、19-4）。残存幅5.3cmの平坦面を７～10mm間隔の微妙に波打つ平行線４本で埋める。暗灰色を呈し焼成はやや甘い。

平瓦を利用した瓦製円盤が１点出土した（PL.73、19-5）。きれいな円形をなさず、やや不整形である。径3.5～3.8cm、厚さ1.6cmで黒灰色を呈し焼成は良好である。

註

1）奈文研『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』　1996。
2）奈文研『平城宮発掘調査報告ＸⅢ』奈文研学報第50冊　1991。
3）奈良県『平城京左京八条三坊発掘調査概報　東市周辺東北地域の調査』　1976。
4）大脇　潔「飛鳥時代初期の同笵軒丸瓦－蘇我氏の寺を中心として－」『古代』97　1994年など。
5）山崎信二「平城宮・京の文字瓦からみた瓦生産」『文化財論叢Ⅲ』奈文研学報第65冊　2002。
6）註３）文献。
7）奈文研『奈良国立文化財研究所年報1965』　1965。
8）奈文研『奈良国立文化財研究所年報1981』　1981。
9）奈文研『平城宮発掘調査報告Ⅸ』奈文研学報第30冊　1978。
10）奈文研『昭和56年度平城宮跡発掘調査概報』　1982。
11）奈文研『奈良国立文化財研究所年報1968』　1968。
12）奈良県教育委員会『奈良山』平城ニュータウン予定地区遺跡調査概報　1973。
13）佐川正敏「屋瓦」『平城宮跡発掘調査報告ＸⅣ』奈文研学報第51冊　1993年　96～107頁。
14）註７）文献。
15）奈文研『奈良国立文化財研究所年報1973』　1973。
16）奈文研『奈文研年報2000－Ⅲ』　2000。
17）奈文研『奈良国立文化財研究所年報1998－Ⅲ』　1998。
18）面戸瓦や熨斗瓦の量が少ないのは、丸・平瓦に紛れ込んでいるためであろう。小片化すると区別できないことに加え、焼成以前に特に加工せず、焼成後に適宜割って作るものが多いと推定される。丸・平瓦の中に、面戸瓦、熨斗瓦の形に割れたものがあり、その候補となる（PL.70熨斗瓦４、PL.71面戸瓦３）。しかし、遺物の中からこれらを特定することは困難であり、今回の報告では除外した。
19）毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦－８世紀を中心として－」『研究論集Ⅵ』奈文研学報第38冊　1980。
20）森郁夫「平城宮の文字瓦」『研究論集Ⅵ』奈文研学報第38冊　1980。
21）註５）文献。
22）奈良県教育委員会『奈良山－Ⅱ』平城ニュータウン予定地区遺跡調査概報　1974、奈良県教育委員会『奈良山－Ⅲ』平城ニュータウン予定地区遺跡調査概報　1979。
23）財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター『奈良山瓦窯跡群』　『京都府遺跡調査報告書』第27冊　1999。
24）奈文研『薬師寺発掘調査報告』奈文研学報第45冊　1987。

3　土器・土製品

調査区内より多量の土器が出土した。中でも、園池SG5800Bには、まとまった量の土器の廃棄があり、庭園の廃絶過程を考える参考となる。また、各遺構より出土した土器は、いずれも量は少ないが、年代を考える上で必要な資料である。

ここでは、園池SG5800を初めとする各遺構、整地土出土土器、土製品を対象に報告し、ついで古墳時代の土器・埴輪についても取り上げる。

出土土器には、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、三彩、青磁、白磁があり、土製品としては硯、土製円盤、土錘、埴輪がある。

土器の器種名称、調整手法、年代に関しては、既刊の『平城宮報告』に基本的に従うこととする。また、本文中ではケズリ調整、ミガキ調整等の調整名称は「調整」を省略し、ケズリ、ミガキ等と呼称する。

土師器供膳具の調整手法

量的に多い土師器供膳具の調整手法は次のように記号化する。

a手法は土器の口縁部外面に横方向のナデをおこない、底部にケズリをおこなわない。多くは指頭圧痕や、工具の痕跡が残存する程度に不定方向のナデをおこない、個体によっては成形・調整時に用いられた木の葉の葉脈を残す。b手法は口縁部にナデ、底部にケズリをおこなうもの。c手法は口縁部以下外面全体にケズリをおこなうもの。e手法は口縁部直下に幅狭くナデをおこない口縁部を外反させ、ケズリをおこなわないものである。e手法後にケズリをおこなうが口縁部下位の屈曲部に削り残しがあり、ナデが残存するものをe－c手法と呼ぶ。

また、土器の外面にミガキを施すものがあるが、施す部位の違いを次のように記号化する。

1手法は口縁部のみを磨くもの、2手法は底部のみを磨くもの、3手法は外面全体を磨くもの、ミガキを施さないものは、0手法として扱う。この記号化により、報文中ではa～e、0～3の両手法の組み合わせによって、a1手法というように、調整手法を表現する。

須恵器の群別

出土須恵器は、器形、胎土、色調等の特徴により6つの群に分類する。これは生産地を反映するものと考えるが、不明なものが多く、報告では分類が可能なもののみ触れることとする。

Ⅰ群土器は青灰色を呈し、黒色や白色の粒子を含むものである。Ⅱ群土器は黒色粒子がナデやケズリにより墨を流したかのように延びるものである。Ⅲ群土器は粒子の細かな粘土を用い、磁器質に焼き上がるものである。Ⅳ群土器は粗大な長石類の他、細かな白色砂を含むものである。Ⅴ群土器はやや砂の目立つ胎土で、微細な黒色粒子を含み、赤みを帯びた黒褐色を呈するものである。Ⅵ群土器は砂質の胎土で、焼き締まりが悪く、表面が荒れた感じとなり、明灰色～淡暗灰色に発色するものである。

これらの群別は、産地の差を反映しているものと考えられ、Ⅰ・Ⅱ群は和泉陶邑窯跡群、Ⅳ群は生駒東麓窯跡群、Ⅴ群は尾張猿投窯跡群、Ⅵ群は美濃須衛窯跡群の製品に比定されており、Ⅲ群は播磨地域の製品と推定されている。

土器に付した番号は実測図版、写真、表ともに共通している。また、1～が土師器、301～が須恵器、601～が灰釉陶器、701～が緑釉陶器、801～が黒色土器、901～が中国大陸産陶磁器、1001～が土製品、1101～が埴輪である。

A　SG5800出土土器（PL.74～78，Fig.59）

園池SG5800は、改修により下層園池SG5800Aから上層園池SG5800Bに改変される。出土土器の多くは上層園池SG5800B廃絶後に廃棄されたものである。また、一部には中近世の遺物が集中する部分があり、後世に撹乱を受けている。

i　SG5800A西岸岬SX9417トレンチ出土土器

下層園池の構築

園池西南にある岬の断割調査時に出土し、下層園池SG5800Aの構築年代を示す。

土師器　杯A（1）淡褐色を呈する。a2手法で、内面に一段の斜放射状暗文を施す。口縁部はやや強めにナデをおこない、外反気味に立ち上がる。復元口径19.4㎝。

杯X（2）淡黄褐色を呈する。a0手法で、外面に指頭圧痕を残す。復元口径17.8㎝。

小皿（3）黄褐色を呈する。小皿で、口縁部は強くナデがおこなわれ、外反する。底部は不定方向のナデをおこない、指頭圧痕を残す。口縁部の一部と見込みの部分に煤が付着しており、燈明皿として使用されている。復元口径11.2㎝。

甕A（4・5）4は褐色を呈する。復元口径21.0㎝。5は暗茶褐色を呈する。胴部との境に段をもつ。口縁部・胴部ともにナデをおこなうが、胴部の一部に工具痕を残す。復元口径14.8㎝。

須恵器　杯A（301・302）301は灰色を呈する。復元口径16.2㎝。302は灰白色を呈し、軟質の焼成である。口縁部に重ね焼きの痕跡を持つ。復元口径14.4㎝。

杯蓋（303）灰白色を呈し、軟質の焼成である。つまみは扁平で、わずかに中央がくぼむ。

ii　SG5800A園池石敷出土土器

下層園池の時期

下層園池の石敷部分より出土した土器で、下層園池の時期を考える上で参考となる資料である。

土師器　杯A（6）灰褐色を呈する。a1手法で、内面は上段連弧状、下段斜放射状暗文、見込み部分に螺旋状暗文を施す。口縁端部の屈曲は明瞭である。復元口径19.0㎝。

皿A（7・8）7は黄褐色を呈する。a0手法で、内面は一段の斜放射状暗文、見込み部分に螺旋状暗文を施す。口縁部は上半が内湾気味に立ち上がり、端部を折り返す。復元口径16.8㎝。8は明褐色を呈する。内外面とも器面が荒れているが、b0手法と考える。口縁端部は丸くナデをおこない、内面は沈線により巻き込みを表現する。復元口径18.7㎝。

須恵器　杯蓋（304～306）いずれも灰色を呈する。304・305は偏平な形態である。304は復元口径17.5㎝。305は内面を硯として使用している。306は外面に降灰が付着し、重ね焼きの状態がわかる。復元口径13.0㎝。

杯B（307～310）307は青灰色を呈する。底部が高台よりわずかに突出する。硬質の焼成で、Ⅰ群のものと考える。復元口径15.4㎝。308は明灰色を呈する。口縁部内面には一部煤が付着し、灯明として使用されている。復元口径15.5㎝。309は青灰色を呈する。内面は硯として使用され、見込み部分の研磨が著しい。また、割口にも一部墨が付着する。Ⅰ群と考える。復元高台径13.2㎝。310は外面灰白色、内面暗灰色を呈する。高台が外方に屈曲し、内接する形のもので、極めて硬質の焼成である。Ⅲ群と考える。

皿A（311・312）311は青灰色を呈する。口縁部は回転ナデ、底部は回転ケズリをおこなう。内面に火襷がある。Ⅰ群と考える。復元口径23.0㎝。312は明灰色を呈する。口縁部は回転ナデ、底部は回転ケズリをおこなう。復元口径31.6㎝。

iii　SG5800A堆積層出土土器

下層園池の堆積土

下層園池の堆積土出土の遺物で、下層から上層園池への改修の時期を考える参考となる。

土師器　杯A（9）明褐色を呈する。b0手法である。口縁端部を巻き込む。復元口径20.5㎝。

皿A（10・11）10は明黄灰色を呈する。b0手法であるが、底部より器高の1／3までケズリをおこなう。暗文はない。口縁部はわずかに巻き込む。復元口径15.6㎝。11は明褐色を呈する。a0手法である。口縁端部を大きく巻き込む。復元口径21.8㎝。

椀A（12）明褐色を呈する。c3手法である。口縁端部はわずかに内湾し、尖る。復元口径14.8㎝。

須恵器　杯A（313～315）313は灰色を呈する。口縁部付近を強く回転ナデをおこない、端部は外方に屈曲する。底部は回転ヘラ切り後静止ナデをおこなう。復元口径11.0㎝。314は青灰色を呈する。重ね焼き痕跡と火襷をもつ。口縁部内面に工具による回転ナデをおこなう。Ⅰ群と考える。復元口径18.3㎝。315は灰色を呈し、やや軟質の焼成で、火襷がある。底部は回転ヘラキリ後ナデをおこなう。復元口径15.4㎝。316は青灰色を呈する。復元口径11.6㎝。

杯蓋（317）灰色を呈する。偏平な形態で、縁辺部に降灰がみられる。復元口径19.7㎝。

杯B（318）青灰色を呈する。高台は内接する。一部に黒色の付着物がある。Ⅰ群と考える。復元口径16.2㎝。

皿A（319）青灰色を呈する。底部は回転ケズリ後に回転ナデをおこなう。幅広の工具で口縁内面に巻き込み状の窪みをめぐらす。I群と考える。復元口径23.4㎝。

iv　SG5800B池底礫敷出土土器

上層園池の池底

上層園池の池底礫敷より出土した土器で、池の改修の時期を考える上で参考となる。

土師器　杯A（13・14）共に黄褐色を呈する。13はa0手法である。立ち上がりが緩やかである。口縁端部は巻き込む。復元口径19.8㎝。14はb0手法であるが、底部より器高の1／3までケズリをおこなう。復元口径18.0㎝。

須恵器　杯A（320）灰白色を呈する。底部は丁寧な回転ケズリをおこなう。復元口径11.2㎝。

杯蓋（321～323）321は暗灰色を呈する。縁辺部は強くナデがおこなわれ、端部を薄く引き出す。縁辺部に重ね焼きの痕跡をもつ。復元口径12.7㎝。322はやや軟質で灰白色を呈する。外面は回転ケズリをおこなう。復元口径26.4㎝。323は暗青灰色を呈する。内面を硯として利用し、中央は研磨が著しい。Ⅰ群である。復元口径20.1㎝。

杯B（324～326）324は青灰色を呈する。胎土に砂粒を多く含む。復元高台径11.4㎝。325は軟質で灰白色を呈する。復元高台径12.8㎝。326は灰色を呈する。復元高台径17.2㎝。

皿A（327・328）327は灰色を呈する。口縁部内面を工具による回転ナデをおこない、やや内面に肥厚する。端部は平らに回転ナデをおこなう。復元口径23.4㎝。328はやや軟質で灰白色を呈する。重ね焼き痕跡がわずかにある。復元口径27.0㎝。

皿B（329）青灰色を呈する。胎土に砂粒を多く含む。Ⅰ群と考える。復元口径21.2㎝。

壺（330）壺、あるいは甕の底部。灰色を呈する。外面は回転ナデの後、乾燥がかなり進んだ段階で粗いケズリを施す。Ⅱ群と考える。復元底径10.0㎝。

v　築山SX8457石組構築土中出土土器

石組構築土中出土

SG5800Bに伴うSX8457石組の石組構築土中より出土した（Fig.59）。

土師器　杯B（15）黄褐色を呈する。杯部外面は丁寧なミガキを施す。復元口径18.5㎝。

vi　SG5800B黒褐色砂質土層出土土器

上層園池の堆積土

上層園池の堆積土中からは、多量の土器が出土した。堆積土は主に上層が暗灰色粘質土、下層が黒褐色砂質土と二分できる。下層には近世の遺物が若干量存在するが、主となる遺物と年代に差がみられる。ここでは中心となる平安時代前半の遺物について報告する。

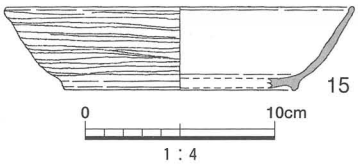


Fig. 59　SX8457石組構築土中出土土器

土師器　杯A（16～45・102）いずれも褐色を呈する。手法はc0手法（16～27）、e－c0手法（28～38）、e0手法（39～45）が存在する。口縁端部は巻き込みをおこなう。c手法のものは口縁部が内湾するが、e－c手法のものは口縁部にナデをおこない、外反気味になるものが主体となる。e手法のものは更に口縁部の外反傾向が強い。口径21.6～13.0cm、高さ4.6～2.4cm。102は橙褐色を呈する。a0手法である。口径18.3cm。

杯蓋（46～54）いずれも褐色を呈する。手法はc0手法（46～48）とe—c0手法（49～54）が存在する。多くは口縁部が外反気味になり、端部を丸くおさめるか、若干屈曲させているものがみられる。頂部には円柱状のつまみがつけられ、周囲にナデをおこなう。口径22.4～16.6cm、高さ3.8～3.7cm。

杯B（55～65）いずれも褐色を呈する。c0手法（55～57・62・64）とe－c0手法（58～61・63・64）が中心でe－c1手法（65）も存在する。口径29.8～16.7cm、高さ5.9～3.7cm。

皿A（66～95）いずれも褐色を呈する。手法はc0手法（66～76）、c1手法（77）、e－c0手法（78～87）、e0手法（88～95）が存在する。口縁端部はいずれも巻き込みをおこなう。e手法のものはやや外反するもの（88～93）と、端部の開きが水平に近くなり明瞭な巻き込みを持つもの（94・95）の二種類に細分できる。口径19.0～13.8cm、高さ2.6～1.3cm。

小皿（96～101）いずれも褐色を呈する。いずれもe0手法である。強く外反し、口縁端部を尖らせるもの（96・97）、器高が深いもの（98）、器壁が厚手で端部が水平になるもの（99）、屈曲し、端部の開きが水平に近く明瞭な巻き込みを持つもの（100・101）に細分が可能である。口径11.1～8.7cm、器高2.4～1.0cm。

高杯（103～108）いずれも褐色を呈する。口縁部は外反する。杯部は外面にケズリをおこなう。外面にミガキを施すものと施さないものがある。脚部は7～9面の面取りをする。105は他と異なり、太目の脚部をもつ。106の杯部内面には墨が付着する。口径34.8～29.8cm。

甕A（109～111）いずれも褐色を呈し、外面に煤が付着する。109は口縁部を横方向に、胴部を縦方向にナデをおこない、内面に指頭圧痕を残す。復元口径26.6cm。110は口縁部外面を横方向にナデ、内面は横方向に粗いハケメを残す。頸部外面は縦方向のハケメ。胴部は外面を横方向に粗いハケメ、内面を縦方向に粗いハケメ。復元口径19.8cm。111は口縁部外面に横方向のナデ、内面は斜方向のハケメを残す。頸部に段が付く。胴部は外面を縦方向の粗いハケメ。内面は不定方向のナデをおこない、指頭圧痕を残す。復元口径20.4cm。

羽釜（112）暗茶褐色を呈する。口縁部は外反し、端部が肥厚する。胴部は肩がわずかに張る形状で鍔がつく。鍔の端部は肥厚する。内外面ともナデで、胴部内面に指頭圧痕が残る。胎土から生駒山西南麓地域の生産品である可能性が高い。復元口径30.0cm。

須恵器　杯蓋（331）硬質で灰色を呈する。外面には緑色の自然釉が付着する。Ⅲ群と考える。内面は硯として使用され、研磨が顕著である。復元口径20.1cm。

杯B（332）青灰色を呈する。大型で深手のものである。見込み部分に朱が付着し、研磨の痕跡が顕著であり、朱硯として利用されたと考えられる。底部はヘラキリ痕跡を残す。Ⅰ群と考える。復元口径17.8㎝、器高6.8㎝。

椀A（333）灰色を呈し、やや軟質の焼成である。外面は回転ケズリを施す。底部は切り離し後丁寧にヘラケズリを施す。復元底径7.0㎝。

壺L（334・335）334は小型の壺Lで灰色を呈する。内外面ともに降灰がみられる。口径8.0㎝。335は大型の壺Lの可能性が高いもので、茶褐色を呈する。外面は回転ケズリ、内面はナデを施す。底部高台内は回転糸切痕跡を残す。内面の一部に墨が付着する。Ⅴ群と考える。

壺M（336・337）336は青灰色を呈する。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。底部は回転糸切痕を残す。口径4.0㎝、器高9.5㎝。337は明茶褐色で口縁部を欠損する。底部は縁辺部が高く、中央が窪む形状で、切り離し時についたと思われるヘラ状の工具痕が残る。

鉢D（338）軟質で青灰色を呈する。短く外反し、端部が平坦な口縁部をもつ。肩部の下位に重ね焼きの痕跡がある。内外面に火襷の痕跡がある。復元口径18.6㎝。

甕（339）硬質で青灰色を呈する。胴部は外面を平行タタキ、内面に同心円状当具痕をもつ。Ⅰ群と考える。復元口径17.6㎝。

灰釉陶器　椀B（601）胎土は灰白色を呈する。施釉は刷毛塗りで、灰釉は淡緑色に発色する。高台部・見込み部分は施釉しないが、釉が流れ、見込み部分の一部熔着痕跡が残る。高台は断面半円状で、端部が尖る。硯に使用され、高台内に墨の付着と研磨がみられる。口径14.2㎝、器高4.8㎝。

皿B（602～604）602の胎土は灰色を呈する。施釉は刷毛塗りで、灰釉は白色～明緑色に発色する。外面高台部には施釉しない。内面は見込み部分を残して施釉し、見込み部分は縦方向に薄く施釉する。見込み部分には赤色顔料が付着し、朱硯として使用されている。口径13.6㎝、高さ3.0㎝。603の胎土は灰色を呈する。施釉は刷毛塗りで、灰釉は白色に発色する。外面高台部、内面見込み部分は施釉しない。底部切り離しはヘラ切りにより、切り離し後回転ケズリをおこなう。口径14.4㎝、器高3.1㎝。604の胎土は灰色を呈する。施釉は刷毛塗りで、灰釉は白色～緑色に発色する。外面高台部、内面見込み部分は施釉しない。底部高台内中央に回転糸切痕跡を残す。口径14.2㎝、器高2.9㎝。

赤色顔料が付着

椀・皿B（605・606）椀B、あるいは皿Bと考えられる。605の胎土は灰色を呈する。施釉は刷毛塗りで、灰釉は白色に発色する。高台部、見込み部分は施釉しない。高台が内湾し、端部が尖るいわゆる「三日月高台」である。606の胎土は灰色を呈する。施釉は刷毛塗りで、灰釉は白色に発色する。外面高台部、内面見込み部分は施釉しない。器壁が薄く、高台は細く長い。復元高台径8.5㎝。

三足皿（607）小片である。胎土は灰白色を呈する。施釉は刷毛塗りで、灰釉は淡緑色に発色する。皿部内面のみ施釉する。脚は張り付け後、工具により面取りをおこなう。

瓶C（608）胎土は灰白色を呈する。施釉は刷毛塗りで、灰釉は肩部以上に淡緑色に厚くかかり、胴部は白色に発色する。内面も灰釉がかかる。肩部に注口の痕跡がある。底部は回転ナデを施すが、回転糸切痕跡をわずかに残す。底径6.6㎝。

緑釉陶器　輪花椀（701）6弁の花弁を表現する。胎土は硬質で灰色を呈する。内面には6つの

輪花椀

木葉形の貼り付けがあり、口縁部に切り込みを入れる。外面は切り込みに対応して沈線を施し、花弁を表現する。外面全体、及び内面見込み部分にミガキを施す。施釉は刷毛塗りで、明緑色に発色する釉を厚く施すが、色調にむらがある。高台内および見込みに三叉トチンの目跡を残す。東海系の産品。復元口径12.3㎝、器高4.0㎝。

皿A（702・703）702は外反する口縁部をもつ。胎土は硬質で灰色を呈する。外面にミガキを施す。施釉は刷毛塗りで、全面に施釉するが、灰黒色に退色している。復元口径13.7㎝、器高2.1㎝。703も同様である。

皿B（704・705）共に外反する口縁部をもつ。704の胎土は軟質で明褐色を呈する。皿部外面にミガキを施す。施釉は刷毛塗りで、全面に施釉し、明緑色に発色する。京都系の産品。復元口径13.0㎝、器高2.2㎝。705は外反する口縁部をもつ。胎土は硬質で灰色を呈する。外面にミガキを施す。施釉は刷毛塗りで、全面に施釉する。暗緑色に発色する釉を薄くかけるが、大部分は灰黒色に退色している。京都系の産品。復元口径14.2㎝、器高2.5㎝。

椀B（706）胎土は硬質で、灰色を呈する。施釉は刷毛塗りで、口縁端部および高台縁辺には施釉せず、淡緑色に発色する。京都系の産品。口径11.0㎝、器高2.9㎝。

椀・皿B（707～711）椀B、あるいは皿Bと考えられる。707の胎土は軟質で灰白色、釉は淡緑色に発色する。中央がへこむ円盤状高台をもつ。708・709の胎土は軟質で灰白色、釉は明緑色に発色する。蛇目高台をもつ。710の胎土は軟質で褐色、釉は緑色に発色する。円盤状高台をもつ。707～711は京都系の産品。711の胎土は硬質で明灰色、釉は淡緑白色に発色する。貼り付け高台で、高台内に回転糸切痕跡を残す。東海系の産品。

三足皿（712）三足の脚をつけたものである。胎土は硬質で、灰色を呈する。口縁端部を肥厚する。施釉は刷毛塗りで、口縁端部の一部は施釉しない。脚部は張り付け後、ヘラ状工具により面取りをおこなう。皿部内外面に三叉トチンの目跡を残す。口径13.1㎝、器高2.9㎝。

香炉（713）香炉の蓋である。胎土は硬質で、灰白色を呈する。精緻な作りで、頂部を中心に八弁の花と蝶を陰刻花文により表現する。この文様中の花弁間、蝶の触覚、羽根の部分に外側より透穴を開け、内面側は穿孔後に穴の周囲を整形する。文様の外周には二重の沈線を廻す。素地の上に明緑色の釉を厚くかけた優品である。頂部内外面に三叉トチンの目跡を残す。類品は生産地では愛知県猿投窯跡群黒笹地区、消費地では平安京西市跡、大宰府、胆沢城より出土している。東海系の産品。復元口径14.8㎝、器高4.4㎝。

陰刻花文

黒色土器　椀A（801）黒色土器A類。褐色の胎土である。内外面とも横方向のミガキを施す。復元口径18.4㎝、器高3.6㎝。

椀B（802～805）黒色土器A類。大（802～804）、小（805）の二種がある。褐色の胎土である。内外面とも横方向のミガキを施す。802の内面には螺旋状暗文を施し、逆三角形の高台をもつ。復元口径19.6㎝、器高5.3㎝。803は復元口径19.1㎝。804は復元口径19.2㎝。805は復元口径14.8㎝、器高3.3㎝。

皿B（806）黒色土器A類。褐色の胎土である。細長く尖った高台をもつものである。底径6.4㎝。

三足皿（807）黒色土器A類。口縁部が屈曲して水平に開く形状の皿に脚をつけたものである。内外面とも丁寧なミガキが施される。復元口径13.8㎝。

鉢C（808・809）黒色土器A類。半球形の形状のものである。808は外面上半と内面にミガキ

を施す。復元口径12.2㎝、器高4.7㎝。809は全面ミガキ。復元口径6.8㎝。

甕A（810～812）黒色土器A類。くの字に外反する口縁部をもつ。810は全面横方向のナデをおこない、口縁部内面のみミガキを施す。復元口径18.8㎝。811は外面上半を横方向のナデ、下半を不定方向のケズリをおこない、内面全体にミガキを施す。口径14.0㎝、器高9.4㎝。812は口縁部外面以外にミガキを施す。復元口径13.6㎝、器高9.3㎝。

甕B（813）黒色土器A類。半球形の胴部に外反する口縁部をもつもので、内外面にミガキを施す。復元口径10.8㎝。

鉢A（814）黒色土器A類。口縁部を欠損する。底部は丸い。外面は上部をミガキ、下部にケズリをおこなう。内面はミガキを施す。

皿A（815・816）黒色土器B類。共に器壁が極めて薄く、小型のもの。815は口縁端部がわずかに外反するもので、全面に丁寧なミガキを施す。復元口径10.1㎝。816は屈曲し、水平に開く口縁部をもつもので、全面に丁寧なミガキを施す。復元口径9.4㎝、器高1.1㎝。

壺（817）黒色土器B類。断面卵形の胴部に短い口縁部をつける。外面に丁寧なミガキを施す。内面はナデ。口径2.3㎝。

vii　SG5800B暗灰色粘質土層出土土器

上層出土土器は下層出土土器と一連のものと考えられるが、中世後半以降の遺物が若干量存在する。ここでは、平安時代の資料について報告する。

土師器　杯A（113）褐色を呈する。c1手法を用いる。内面には漆が厚く付着する。復元口径12.8㎝、器高2.8㎝。　漆付着

杯B（114・115）共に褐色を呈する。口縁部は外反し、端部を弱く巻き込む。114はe0手法である。復元口径22.5㎝、器高4.7㎝。115はe－c0手法である。復元口径16.7㎝、器高4.2㎝。

皿A（116・117）共に褐色を呈する。e0手法で口縁部の外反が強い。116は復元口径16.4㎝、器高1.8㎝。117は復元口径14.2㎝、器高1.9㎝。

甕A（118～120）いずれも褐色を呈し、使用による被熱と煤の付着がみられる。118は口縁端部を強く巻き込む。口縁部内外面、胴部内面は横方向のナデをおこない、胴部外面は粗いハケメを残す。復元口径24.0㎝。119は口縁部を肥厚する。胴部外面はハケメを残し、他はナデで、胴部内面に指頭圧痕がある。復元口径27.7㎝。120は口縁端部を強く巻き込み、頸部に段をもつ。内外面ともにナデをおこなう。復元口径25.2㎝。

須恵器　杯B（340）青灰色を呈する。高台内は回転ナデをおこなう。Ⅰ群と考える。

鉢C（341）明灰色を呈する。口縁部は短く外反する。胴部外面は回転ケズリの後、粗いミガキを施す。復元口径17.0㎝。

壺L（342）青灰色を呈する。口縁端部が上下に突出する。口縁部と胴部の接合は二段構成で閉塞時の痕跡が皺状に残存する。胴部はロクロメが顕著で、肩部に二条の沈線を引く。底部は回転糸切痕跡を残す。口径9.0㎝、器高20.1㎝。

壺M（343・344）343は軟質で、灰色を呈する。口縁は受口状につくる。底部は回転糸切痕跡が残る。口径4.4㎝、器高9.6㎝。344は青灰色を呈する。口縁は受口状につくる。底部は静止糸切痕跡を残す。口径3.9㎝、器高9.3㎝。

甕（345・346）345は灰色を呈する。直立する短い口縁部をもつ大型の甕。胴部内面に同心円

状当具痕を残す。復元口径11.4㎝。346は青灰色を呈する。口縁端部は下方に突出する。頸部以下の外面は平行タタキ、内面に同心円状当具痕を残す。復元口径52.8㎝。

灰釉陶器　椀・皿B（609～611）いずれも胎土は灰白色である。見込み部分を施釉し、高台部は施釉しない。609は内側に屈曲する。610は直立気味になり、611は外方に開く。

水瓶（612）胎土は灰白色である。口縁部が受口状になるもので、残存部のほぼ全面に施釉され、灰白色に発色する。復元口径6.4㎝。

壺（613）胎土は灰白色である。口縁部は直立し、端部が屈曲して面をもつ。復元口径7.4㎝。

緑釉陶器　皿B（714・715）714はわずかに外反する口縁部をもつ皿である。胎土は硬質で灰色を呈する。内外面全体にミガキを施す。施釉は刷毛塗りで、淡緑色に発色する釉を施すが、大部分が灰黒色に退色する。京都系の産品。復元口径14.2㎝、器高2.9㎝。715は直線的に広がる口縁部をもつ皿である。胎土は硬質で灰色を呈する。外面皿部と内面全体にミガキを施し、見込み部分に重ね焼きの痕跡を残す。京都系の産品。口径14.0㎝、器高2.6㎝。

B　SG5800給排水溝出土土器（PL.79）

SG5800Bの主要な給水施設であるSX16305、および排水施設であるSD5830から出土した遺物である。

i　SX16305出土土器

給水施設の土器

SG5800Bの給水施設である。出土土器の様相はSG5800B出土資料と近似する。

土師器　杯A（121～127）いずれも褐色を呈する。121～124はc0手法、125～127はe－c0手法による。121・123・124は灯明に使用され、口縁部内外に煤が付着する。口径18.0～13.6㎝、器高3.6～2.6㎝。

煤が付着

杯蓋（128）褐色を呈する。e－c0手法である。口縁端部はわずかに肥厚する。復元口径19.2㎝。

皿A（129～133）いずれも褐色を呈する。130～133はc0手法、129はe－c0手法である。口縁端部をわずかに巻き込むものと、幅広に巻き込むものの二者がある。口径18.7～15.3㎝、器高2.1～1.8㎝。

須恵器　杯A（347）灰色を呈する。深手のもの。底部は回転ケズリ。復元口径12.2㎝。

灰釉陶器　蓋（614）輪状つまみをもつ蓋である。胎土は灰白色で極めて堅緻に焼きあがる。外面には黄褐色の釉が厚くかかる。内面を硯として使用し、墨の付着と著しい研磨がみられる。

ii　SD5830出土土器

木樋暗渠の土器

木樋暗渠SD5830出土土器で、1点は掘形、他は暗渠抜取後の溝内堆積土中から出土した。

土師器　甕A（134）褐色を呈する。口縁端部は肥厚する。肩部に段が付き、球形の胴部をもつ。内外面ともにナデをおこなう。復元口径18.3㎝。

須恵器　杯蓋（348）青灰色を呈する。外面全体に降灰する。復元口径19.0㎝。

杯B（349～351）349は青灰色を呈する。外面に降灰がみられる。高台部は内接する。Ⅰ群土器と考えられる。復元高台径13.2㎝。掘形内より出土。350は青灰色を呈する。口縁部に強く回転ナデを加えて、端部を外反させ、細く尖らせる。胴部はやや丸みをもたせる。Ⅰ群土器。復元口径16.8㎝、器高5.6㎝。351は青灰色を呈する。口縁部は外反させ、細く尖らせる。胴部は直線的に立ち上がる。Ⅰ群土器。復元口径15.0㎝、器高4.8㎝。

皿X（352）暗灰色を呈する。内外面ともにナデをおこなう。復元口径16.9㎝、器高1.4㎝。
甕（353）明灰色を呈する。口縁部内外面にナデをおこない、胴部外面は平行タタキ、内面は同心円状当具痕跡を残す。外面全体、及び口縁部内面、底部内面に降灰がみられる。

C　大垣関連遺構出土土器（PL.80～83）

ここでは南面大垣及び東面大垣と、その雨落溝、暗渠出土土器を中心に報告する。また、大垣の廃絶に関連する築地崩落土内および土坑出土土器も扱う。時期は後述する。

i　SD9375出土土器

南面大垣南雨落溝SD9375出土土器である。

南雨落溝出土土器

土師器　杯A（135～139）135は明褐色を呈する。b0手法で、一段の斜放射状暗文を施す。復元口径19.8㎝。136は橙白色を呈する。b1手法で、一段の斜放射状暗文と見込み部分に螺旋暗文を施す。復元口径18.9㎝、器高3.3㎝。137は橙白色を呈する。b0手法で、一段の斜放射状暗文と見込み部分に螺旋暗文を施す。復元口径17.4㎝、器高3.0㎝。138は明褐色を呈する。a0手法で、口縁部は強くナデがおこなわれ、外反が強い。一段の不均整な斜放射状暗文を施す。復元口径14.0㎝、器高2.5㎝。139は明褐色を呈する。b1手法である。口縁部は他と異なり内面に巻き込みをせず、やや外反気味に丸くおさめ、外面に一条の沈線を廻らせた特徴的な形状をもつ。他よりも全体に器壁が厚く、調整も丁寧である。この特徴は椀A（146）と共通し、特異な一群である。復元口径18.0㎝、器高4.6㎝。
蓋（140）明褐色を呈する。内外面にナデをおこない、外面はミガキを施す。復元口径20.6㎝。
皿A（141～144）141は褐色を呈する。a0手法を用いる。復元口径11.4㎝、器高1.3㎝。142は褐色を呈する。c0手法を用いる。復元口径22.4㎝、器高2.4㎝。143は明褐色を呈する。b0手法を用いる。復元口径23.0㎝、高さ2.5㎝。144は明橙白色を呈する。a0手法を用い、口縁端部を広く肥厚する。底部に葉脈痕を残す。復元口径21.0㎝、器高3.0㎝。
杯X（145）明褐色を呈する。口縁部は強くナデをおこない、やや内側に屈曲させる。下半部は手持ケズリをおこなう。復元口径18.8㎝、器高4.5㎝。
椀A（146～150）いずれも明黄褐色を呈する。口縁端部内面を面取し、わずかに外反させて尖らせる。口縁部外面はナデをおこない、以下底部まで手持ケズリをおこない、ミガキを施す。内面はナデをおこなう。底部はわずかに平坦面をもつ。146は大型のもので、口縁部外面に一条の沈線を廻らせる。口径15.9～12.6㎝、器高5.2～4.2㎝。
椀C（151～154）いずれも黄褐色～褐色を呈する。口縁部は強くナデをおこない、直立気味にたち上げて端部内面を面取し、わずかに外反させて尖らせる。胴部はナデをおこない、指頭圧痕が残存する。151は粗いケズリをおこなう。口径12.5～11.6㎝、器高4.5～3.9㎝。
蓋（155）大型の蓋。明橙白色を呈する。外面は粗いハケメを残し、口縁端部と内面はナデをおこなう。復元口径39.0㎝。
盤A（156・157）赤褐色を呈する。内外面ともナデをおこない、外面にミガキを施す。156は復元口径39.0㎝、器高10.9㎝。157は復元口径33.0㎝、器高6.4㎝。
須恵器　杯A（354・355）354は灰色を呈する。底部は切り離し後、丁寧なケズリをおこなう。復元口径13.2㎝、器高3.3㎝。355は灰白色を呈する。底部は回転ヘラ切り後粗くナデをおこな

う。復元口径15.4㎝、器高4.4㎝。

杯蓋（356～358）356はやや軟質で明青灰色を呈する。口径14.4㎝、器高3.0㎝。357は青灰色で、縁辺に重ね焼きの痕跡がある。内面に降灰がみられる。復元口径14.8㎝、器高3.0㎝。358は青灰色を呈し、偏平な形状のものである。縁辺部に重ね焼きの痕跡がある。復元口径13.2㎝、器高1.8㎝。

杯Ｂ（359～365）359は明青灰色を呈する。高台内に丁寧なナデをおこなう。復元口径18.1㎝、器高6.3㎝。360は青灰色を呈する。高台内は丁寧な回転ナデをおこなう。外面に降灰がみられる。復元口径18.9㎝、器高5.2㎝。361は青灰色を呈する。口縁部がやや外反気味にたちあがる。高台は外接する。高台内は回転ナデをおこなう。口縁部に灯明への使用痕跡がみられる。復元口径18.6㎝、器高3.9㎝。362は青灰色を呈する。高台は両端が突出して接地する。高台内は回転ナデをおこなう。復元口径16.0㎝、器高5.1㎝。363は暗青灰色を呈する。高台内に回転ヘラ切り痕跡を残す。復元口径13.6㎝、4.1㎝。364は青灰色を呈する。高台端は平坦にナデをおこなう。高台内に回転ヘラ切りの痕跡を残す。口縁部及び見込みに灯明への使用痕跡がみられる。復元口径13.3㎝、器高4.1㎝。365は青灰色を呈する。高台は内接する。口縁部に灯明への使用痕跡がみられる。復元口径11.6㎝、器高3.8㎝。いずれもⅠ群と考える。

杯Ｃ（366）灰白色を呈する。口縁部内外面に重ね焼きの痕跡、底部に黒班がある。口縁部は端部を巻き込む。底部は回転ヘラ切り後未調整である。復元口径17.8㎝、器高4.05㎝。

壺蓋（367）壺Ａの蓋である。灰色～青灰色を呈する。外面全面に降灰する。壺本体との重ね焼きをおこなうため、端部をわずかに突出させる。内面は硯として使用し、墨の付着と研磨がみられる。Ⅰ群である。

甕Ｃ（368）灰色を呈する。口縁部内外面はナデをおこない、胴部は外面を平行タタキ、内面を無文の当具痕を残す。口縁部外面には灰が付着し、内面全体に煤が付着していることから、火鉢として利用された可能性が高い。復元口径32.8㎝。

甕Ｘ（369）鍔が付くもので、一応甕と考えておく。鍔より上は降灰がみられる。

北雨落溝出土土器

ii　SD9272出土土器

南面大垣北雨落溝SD9272出土土器である。

土師器　杯Ａ（158）橙褐色を呈する。b0手法を用い、一段の斜放射状暗文と見込み部分に螺旋暗文を施す。口縁部は巻き込む。復元口径18.2㎝。器高4.4㎝。

皿Ａ（159）橙褐色を呈する。b0手法を用い、一段の斜放射状暗文と見込み部分に螺旋暗文を施すが、放射状暗文は口縁部までは施されない。復元口径20.4㎝、器高2.6㎝。

椀Ｂ（160）明褐色を呈する。内外面とも器面の風化が激しいが、b0手法によると考えられる。暗文は確認できない。口径21.8㎝、器高5.7㎝。

須恵器　杯蓋（370・371）370は灰色を呈する。頂部内面に重ね焼き痕跡があり、降灰がみられる。内面は硯として使用され、墨の付着と研磨がみられる。371は青灰色を呈する。復元口径7.8㎝、器高1.9㎝。

杯（372）底部欠失のため、杯ＡかＢかの区別ができない。復元口径16.2㎝。

壺Ａ（373）下半部を欠失。基本的には青灰色、外面の一部は黒灰色を呈する。外面は肩部まで降灰する。蓋と組み合わせて焼成した痕跡が残る。Ⅰ群である。復元口径10.8㎝。

甕（374）明青灰色を呈する。口縁部内外面はナデをおこなう。胴部外面は格子状タタキ、内面は同心円状当具痕を残す。胴部内面を硯として使用し、墨が付着する。研磨はそれほど顕著ではない。復元口径26.4cm。

iii　SA5505基壇内出土土器

南面大垣SA5505基壇内から出土し、大垣の造営を考える上で参考となる資料である。　大垣基壇内出土土器

須恵器　杯A（375）硬質で明青灰色を呈する。外面胴中央から底部は丁寧な回転ケズリをおこなう。口縁部内外面に重ね焼きの痕跡を残し、火襷がある。復元口径18.6cm、器高5.4cm。

杯B（376・377）376は灰色を呈する。底部は回転ヘラ切り痕跡を残す。復元口径15.0cm。器高3.5cm。377は灰色を呈する。高台は内接する。底部は回転ケズリ後高台を付ける。復元口径13.8cm、器高4.1cm。

甕C（378・379）共に青灰色を呈する。口縁部内外面はナデをおこなう。外面は平行タタキ、内面はわずかに当具の痕跡を残すが、ナデがおこなわれる。378の復元口径50.0cm、379の復元口径62.2cm。

iv　SD16309出土土器

東面大垣東雨落溝SD16309から出土した土器である。　東雨落溝出土土器

土師器　杯A（161・162）161は褐色を呈する。b0手法を用い、一段の斜放射状暗文と見込み部分に螺旋暗文を施す。灯明として用いられ、口縁部内面に煤が多量に付着する。復元口径18.6cm、器高3.2cm。162は丸みを帯びた特徴的な杯で、橙白色を呈する。外面は風化が著しい。一段の斜放射状暗文を施す。復元口径16.0cm。

椀A（163・164）共に風化が著しく、内外面の調整は観察が困難である。橙白色を呈する。底部は平坦面を有する。163は復元口径15.0cm、器高4.7cm。164は復元口径12.2cm、器高3.1cm。

甕A（165・166）共に明褐色を呈する。口縁部内外面を横方向にナデをおこない、胴部外面は縦方向のハケメ、内面はナデをおこなう。165は復元口径29.6cm、166は復元口径28.6cm。

甕C（167）褐色を呈する。長い胴部から外反する口縁部をもつ。口縁部外面は横方向のナデ、内面は横方向のハケメ、胴部外面は縦方向のハケメ、内面はケズリをおこなう。復元口径19.3cm。

須恵器　杯A（380）軟質で灰色を呈する。底部に回転ヘラ切り痕跡を残す。底径7.0cm。

杯蓋（381）暗青灰色を呈する。内面に重ね焼き痕跡がある。口径10.9cm。

杯B（382・383）382は青灰色を呈する。大型の杯で、全面に丁寧な回転ナデをおこない、杯部外面にミガキを施す。II群と考える。復元口径22.0cm、器高7.7cm。383は軟質で灰色を呈する。高台内は回転ヘラ切り後未調整である。高台径9.25cm。

壺G（384）青灰色を呈する。外面は厚く自然釉が付着する。

甕A（385）青灰色を呈する。内外面に火ぶくれが顕著にみられる。口縁端部は両端が突出し、内面に降灰がみられる。復元口径26.8cm。

甕C（386）明灰色を呈する。内外面ともにナデをおこなう。復元口径39.8cm。

v　東面大垣崩落土中出土土器（PL.82）

東面大垣SA5900の崩落土と考えられる黄褐色土、黄灰褐色土中より出土した土器である。大垣の廃絶を考える上で参考となる資料である。　大垣崩落土出土土器

土師器　蓋（168）明橙褐色を呈する。外面はケズリの後にミガキを施し、内面はナデをおこ

なう。端部はわずかに内湾させる。復元口径22.8cm。器高3.3cm。

皿A（169・170）169は赤褐色を呈する。a0手法を用い、暗文はない。口縁端部をわずかに肥厚させるが、巻き込みはない。復元口径21.4cm。170は橙白色を呈する。a0手法を用いる。口縁端部はわずかに外反させて、丸くおさめる。復元口径15.0cm。

椀A（171～173）いずれも明黄灰色を呈する。風化が著しいが、いずれも外面ケズリ、内面ナデをおこなう。173は外面にミガキを施す。口径14.6～12.0cm、器高4.4～4.2cm。

甕A（174）口縁部を欠失する。外面は風化が著しい。内面はナデをおこなう。

須恵器　蓋（387～390）387は偏平な形状のもので、青灰色を呈する。復元口径19.6cm。388は灰色を呈する。復元口径18.6cm。389はやや軟質で明灰色を呈する。復元口径17.6cm。390は灰色を呈する。復元口径15.6cm。

杯B（391～393）391は青灰色を呈する。底部は回転ヘラ切り後高台をつける。Ⅰ群と考える。復元口径17.4cm。器高5.4cm。392は青灰色を呈する。底部は回転ケズリ後高台をつける。Ⅰ群と考える。復元口径12.8cm、器高4.3cm。393は青灰色を呈する。高台内は回転ヘラ切り後高台をつける。復元高台径14.0cm。

皿A（394・395）394は暗灰色を呈する。口縁部は内側に肥厚する。復元口径19.4cm、器高1.7cm。395は灰色を呈する。外面に重ね焼き痕跡がある。口縁端部を外方に屈曲させる。底部は回転ケズリをおこなう。復元口径15.2cm。

皿B（396）灰色を呈する。外面に重ね焼き痕跡がある。復元口径24.2cm、器高4.8cm。

vi　東面大垣崩壊土上土坑出土土器

崩落土上土坑出土土器

東面大垣SA5900崩壊土上に掘られた小土坑より出土した土器である。大垣の廃絶を考える上で参考となる資料である。

土師器　椀A（175・176）共に赤褐色を呈する。175は外面にケズリの後ミガキを施す。内面はナデをおこなう。口径12.6cm、器高3.9cm。176は粗製で、外面に指頭圧痕を残す。内面に黒色の物質が付着する。復元口径12.8cm、器高4.3cm。

椀C（177）赤褐色を呈する。口縁部を強めにナデをおこない、外反させる。これより下は粗いナデで、外面に指頭圧痕を残す。口径12.1cm、器高3.1cm。

須恵器　杯蓋（397）やや軟質で、灰白色を呈する。頂部は回転ケズリをおこなう。復元口径19.4cm、器高2.6cm。

vii　SD9040出土土器

西雨落溝出土土器

東面大垣西雨落溝SD9040より出土した土器である。

土師器　杯A（178）赤褐色を呈する。c0手法を用いる。復元口径19.1cm。

須恵器　杯A（398・399）398は灰色を呈する。内外面に火襷がある。底部はナデをおこなう。復元口径14.4cm、器高3.4cm。399は灰色を呈する。口縁部外面に重ね焼き痕跡がある。復元口径13.2cm、器高2.7cm。

杯蓋（400～403）400は灰色を呈する。外面は降灰し白色になる。内面を硯に使用し、墨の付着と研磨がある。復元口径16.2cm。401は暗灰色を呈する。外面に重ね焼き痕跡がある。復元口径12.2cm。402は灰色を呈する。403は暗青灰色を呈する。外面の重ね焼き痕跡が明瞭で、重ねられた土器の一部が付着する。Ⅰ群と考える。口径11.3cm、器高1.2cm。

杯B（404～406）404は灰色を呈する。見込み部分に指頭圧痕を残す。高台内は回転ケズリの後ナデをおこなう。復元高台径14.1cm。405は明灰色を呈する。高台内は回転ケズリをおこなう。復元口径15.7cm、器高3.85cm。406は灰色を呈する。復元口径13.0cm、器高3.7cm。

鉢A（407）暗褐色を呈する。外面は丁寧なミガキを施し、光沢をもつ。口縁端部は平坦にケズリをおこなう。内面は横方向にナデをおこなう。復元口径19.4cm。

壺B（408）極めて硬質で明灰色を呈する。肩部に濃緑色の自然釉が滴下し、外面全体に透明の自然釉がかかる。肩部より下は回転ヘラケズリをおこなう。Ⅵ群である。

甕A（409）青灰色を呈する。口縁部の外面は端部をナデ、頸部を平行タタキの上を粗くナデをおこなう。口縁部内面は全面ナデをおこない、降灰がみられる。胴部は外面を平行タタキ、内面に同心円状当具痕を残す。復元口径42.8cm。

viii　SD16309出土土器

東面大垣西雨落溝SD16309より出土した土器である。上述したSD9040に後続すると考えられる。

西雨落溝出土土器

土師器　杯A（179）明橙色を呈する。風化が激しく、手法は特定できない。口縁部はわずかに内に屈曲する。復元口径19.4cm、器高4.0cm。

皿A（180・181）180は赤褐色を呈する。a0手法で、底部外面に指頭圧痕を残す。復元口径18.1cm、器高3.0cm。181は明褐色を呈する。c0手法を用いる。復元口径16.0cm、器高2.6cm。

椀C（182）明橙色を呈する。口縁部に強くナデをおこなう。その下は粗いナデをおこない、指頭圧痕を残す。復元口径12.3cm、器高3.5cm。

高杯（183）赤褐色を呈する。口縁端部を面取りする。外面はミガキを施す。内面はナデをおこなう。復元口径27.2cm。

須恵器　杯蓋（410～414）410は青灰色を呈する。411は灰色を呈し、外面縁辺部に重ね焼き痕跡がある。復元口径19.2cm。412は青灰色を呈し、外面に重ね焼き痕跡がある。復元口径18.6cm、器高2.2cm。413は偏平な形状で、暗灰色を呈する。外面縁辺部に重ね焼き痕跡がある。頂部は回転ケズリをおこなう。414も偏平で、暗灰色を呈する。復元口径14.6cm。

杯B（415・416）415は灰白色を呈する。高台内は回転ヘラ切り痕跡が残る。復元高台径12.2cm。416は青灰色を呈する。口縁部内面に重ね焼き痕跡がある。復元口径15.1cm、器高4.7cm。

皿A（417）器高の低い皿である。灰色を呈する。口縁端部は面取りし、わずかに外反させる。底部は回転ケズリをおこなう。復元口径22.6cm、器高1.7cm。

盤A（418）暗灰色を呈する。口縁端部を肥厚させる。外面は上半を回転ナデ、下半を回転ケズリし、底部をケズリの後ナデ。内面は回転ナデ。復元口径37.1cm、器高7.9cm。

ix　東面大垣周辺土坑出土土器

東面大垣周辺の土坑から出土した。遺構のほとんどは足場穴等、東面大垣関連の遺構と考えられる。

東面大垣周辺出土土器

須恵器　杯A（419）は軟質で白色を呈する。外面に重ね焼きの痕跡がある。底部は中央の器壁が薄く、回転ヘラ切り痕を残す。復元口径15.4cm、器高4.7cm。

杯蓋（420）は青灰色を呈する。外面に重ね焼きの痕跡がある。内面に褐色の物質が付着する。口径14.8cm、器高1.2cm。

椀Ｘ（421）は青灰色を呈する。外面はハケメの後、上半部にナデをおこなう。内面には工具痕が一部残る。復元口径11.2㎝、器高7.3㎝。

土師器　甕Ｂ（184）は長い胴部をもつ甕で、口縁部が水平に開く。口縁端部は巻き込む。内外面ともに風化が著しい。復元口径21.0㎝。

Ｄ　建物柱穴出土土器（PL.84・85）

東院庭園地区の建物の時期を考える上で参考になる遺物である。

ⅰ　SB5880出土土器・土製品

隅楼柱穴内出土土器

隅楼SB5880柱穴内出土の土器・土製品である。164・404は柱穴掘形出土、他は全て抜取穴内である。平城Ⅴの段階と考える。

土師器　椀Ａ（185）赤褐色を呈する。ｃ0手法である。

皿Ｃ（186）橙褐色を呈する。ｃ0手法で、口縁端部を尖らせる。復元口径17.0㎝。器高2.5㎝。

甕Ａ（187～191）いずれも明褐色を呈し、煤が付着する。187、188は口縁部外面をナデ、内面は横方向のハケメを残す。胴部は縦方向のハケメ、内面はナデをおこなう。189～191は外面は口縁部がナデ、胴部が縦方向のハケメをおこなう。内面は風化が激しく不明である。復元口径27.6～24.4㎝。

製塩土器（192）褐色を呈する。暗灰色の堆積岩起源の砂粒を多量に含み、特徴的な胎土をもつ。内外面は粗いナデと指頭圧痕を残す。復元口径11.0㎝。

不明土製品（193）明褐色を呈する。性格は不明であるが、土器製作に用いられる当具の可能性がある。円盤部分はナデ、先端はケズリをおこなう。最大径6.4㎝、器高4.8㎝。

須恵器　杯Ａ（422）軟質で灰白色を呈する。底部は回転ヘラ切り未調整。復元底径8.6㎝。

杯蓋（423～425）423は灰色を呈する。頂部に回転ケズリをおこなう。復元口径15.7㎝。424は硬質で灰白色を呈する。端部の屈曲が大きい。復元口径14.4㎝。425は青灰色を呈する。

杯Ｂ（426～429）426は暗灰色を呈する。高台の内端が尖る。復元底径13.2㎝。427は青灰色を呈する。高台は外接する。復元高台径11.4㎝。428は暗灰色を呈する。外面に重ね焼き痕跡がある。復元口径15.7㎝、器高4.6㎝。429は灰色を呈する。復元高台径11.6㎝。

皿Ａ（430～432）430は灰色を呈する。底部は回転ケズリをおこなう。口縁部内面に１条の沈線を廻らせる。復元口径19.8㎝、器高3.0㎝。431は灰白色を呈する。底部は回転ヘラ切りの痕跡を残す。復元口径15.4㎝、器高2.4㎝。432は灰白色を呈する。外面に重ね焼き痕跡がある。底部に回転ヘラ切りの痕跡を残す。復元口径14.7㎝、器高2.7㎝。

皿蓋（433）大型の蓋である。灰色を呈する。頂部は回転ケズリをおこなう。復元口径32.6㎝。

甕Ａ（434）青灰色を呈する。口縁端部は強いナデをおこない直立する。口縁部内外面はナデ、胴部外面は格子状タタキの後粗いナデ、内面は同心円状当具痕を残す。復元口径20.8㎝。

ⅱ　SB8480・8490、SB8466　出土土器

中央建物柱穴内出土土器

中央建物SB8480・8490、露台SB8466の柱穴抜取より出土した。中央建物の廃絶を考える上で参考となる資料である。平安時代前半に位置づけられる。

土師器　皿Ａ（194）明橙色を呈する。ｃ0手法である。復元口径15.6㎝。器高2.4㎝。

須恵器　杯蓋（435）暗青灰色を呈する。頂部は回転ヘラ切り痕跡を残す。内面は硯に使用し、

墨の付着と研磨がみられる。復元口径14.0㎝、器高2.6㎝。

壺M（436）灰白色を呈する。直線的な口縁部をもつ。底部は回転糸切痕跡のまま未調整である。口径3.9㎝、器高9.0㎝。以上SB8480出土。

杯B（437）暗灰色を呈する。口縁部は外反させる。高台内は回転ヘラ切り痕跡を残す。復元口径14.3㎝、器高4.1㎝。SB8466出土。

iii　調査区北側建物出土土器

北側建物柱穴内出土土器

調査区北側より出土した土器である。奈良時代以前の遺物も含む。438～441はSB9073出土、442・443はSB9075出土。195・444・445はSB9078出土。446・614はSB9072出土。

土師器　杯A（195）褐色を呈する。b0手法で、暗文はない。復元口径16.9㎝。

須恵器　杯A（442）暗灰色を呈する。底部の器壁が厚い。復元口径12.8㎝、器高3.6㎝。

杯蓋（438）かえりをもつ小型の蓋で、灰白色を呈する。外面は暗緑色の自然釉が付着する。杯Gに伴うもので平城遷都以前のもの。復元口径11.0㎝、器高3.0㎝。

杯B（439・444）439は灰色を呈する。口縁部内面に漆が付着する。復元口径15.3㎝、器高4.0㎝。444は青灰色を呈する。Ⅰ群と考える。復元口径15.6㎝。器高4.0㎝。

壺蓋（440）暗灰色を呈する。外面は重ね焼き痕跡があり、頂部以外は降灰する。復元口径15.3㎝、器高2.9㎝。

壺（441）球状の胴部に長頸が付くもので、青灰色を呈する。肩部まで降灰する。肩部より下は回転ケズリをおこなう。形状、製作技法から平城遷都以前のものであろう。

壺L（443）灰色を呈する。口縁部は両端が突出する。復元口径8.2㎝。

平瓶（446）小型の平瓶である。直口に低い円盤型の胴部が付き、高台を持つ。特徴から提梁をもつものであろう。

甕（445）暗灰色を呈する。外面は縦方向にケズリ、内面はナデをおこなう。内面を硯として使用し、墨の付着と研磨がみられる。復元底径19.2㎝。

灰釉陶器　浄瓶（614）浄瓶の注口部である。胎土は明灰色で、外面に施釉された灰釉が暗緑色～灰白色に発色する。

iv　調査区西側建物出土土器

西側建物柱穴内出土土器

調査区西側の建物より出土した土器である。447はSB9315出土。448はSB9300出土。

須恵器　杯B（447）灰色を呈する。復元底径5.4㎝。

杯蓋（448）灰色を呈する。復元底径10.8㎝。

E　塀柱穴出土土器（PL.85）

塀柱穴内出土土器

塀と考えられる柱穴内より出土した土器である。449・450はSA9060出土。451はSA9289出土。452はSA9320出土。453～455はSA9288出土。456はSA9087出土。

須恵器　杯蓋（449～451・453）449は軟質で、茶灰色を呈する。縁辺部に重ね焼き痕跡がある。復元口径21.8㎝、器高2.6㎝。450は灰色を呈する。頂部は回転ケズリをおこなう。復元口径12.2㎝。451は暗灰色を呈する。復元口径18.0㎝。453は暗灰色を呈する。頂部は回転ケズリをおこなう。復元口径16.2㎝。

杯B（452・454・456）452は灰色を呈する。底部が高台以下に突出する。復元口径15.2㎝、

器高4.7㎝。454は灰色を呈する。外面に重ね焼き痕跡がある。高台は外接し、端部は外方に尖って突出する。復元口径25.5㎝、器高5.3㎝。456は明灰色を呈する。広い高台が付く。高台内は回転ヘラ切り痕跡を残す。復元高台径14.0㎝。

杯H（455）灰色を呈する。復元口径14.0㎝。

F　橋柱穴出土土器（PL.85）

橋柱穴内出土土器

園池SG5880には２本の橋が作られている。この柱穴内より出土した土器を報告する。

i　SC8465出土土器

中央建物SB8480より東側に伸びる東西橋SC8465の柱穴内より出土した土器である。

土師器　杯C（196）褐色を呈する。a3手法を用い、一段の斜放射状暗文を施す。口縁部は端部をわずかに内湾させ、先端を尖らせる。復元口径16.4㎝。

須恵器　杯C（457）明灰色を呈する。口縁部を巻き込む。底部は回転ケズリをおこなう。復元口径18.2㎝、器高3.9㎝。

ii　SC8453出土土器

園池東北にかかる南北橋SC8453の柱穴内より出土した土器である。

土師器　杯A（197）明褐色を呈する。e0手法を用いる。復元口径14.3㎝。

G　溝出土土器（PL.86）

i　SD17695出土土器

溝出土土器

土師器　杯A（198～200）いずれも明褐色を呈する。198、199はb1手法で、内面には連弧状暗文と斜放射状暗文を施す。200は器高が深く、a0手法で、一段の斜放射状暗文を施す。198の復元口径21.0㎝。199の復元口径17.8㎝、器高3.4㎝。200の復元口径16.2㎝。

杯B（201）明褐色を呈する。b1手法を用い、連弧状暗文と斜放射状暗文を施す。口縁部は巻き込む。復元口径22.4㎝、器高6.3㎝。

皿A（202～206）明褐色～黄褐色を呈する。202はa0手法を用い、一段の斜放射状暗文を施す。203はc3手法を用いる。204はケズリが口縁部近くまでおこなわれる。205はb0手法で、一段の斜放射状暗文を施す。206はb0手法である。復元口径23.2～14.2㎝、器高3.3～2.5㎝。

甕A（207）褐色を呈する。口縁部は巻き込む。口縁部の内外面はナデをおこない、胴部外面は斜方向のハケメ、内面はケズリをおこなう。復元口径25.6㎝。

須恵器　杯A（458）明灰色を呈する。口縁部内面に重ね焼きの痕跡がある。内外面に火襷がみられる。底部は回転ケズリ。復元口径17.2㎝、器高4.0㎝。

杯蓋（459～462）459は暗灰色を呈する。頂部は回転ケズリ後ナデをおこなう。内面は硯に使用され、墨の付着と研磨がみられる。復元口径22.1㎝。460は偏平な形状で、頂部に回転ケズリをおこなう。口径16.8㎝、器高1.8㎝。461は暗灰色を呈する。口径8.0㎝、器高1.7㎝。462は灰色を呈する。頂部は回転ケズリをおこなう。

杯B（463・464）共に青灰色を呈する。463の外面は部分的に降灰する。硯として使用され、内面全体に墨が付着する。Ⅰ群と考える。復元口径19.2㎝、器高6.1㎝。464は外面全体に降灰がみられる。底部は回転ナデ後高台をつける。復元口径18.6㎝、器高6.1㎝。

壺E（465）青灰色を呈する。小型の短頸壺で、高台が付く。外面の口縁部～肩部に降灰する。肩部の屈曲部に一条の沈線を廻らせる。高台は内接する。復元口径7.4㎝、器高6.8㎝。

ⅱ　SD17696出土土器

土師器　ⅢA（206）赤褐色を呈する。内外面とも風化が激しいが、a0手法と考える。

須恵器　杯蓋（466）青灰色を呈する。外面縁辺部に重ね焼き痕跡があり、別の須恵器の口縁部と熔着している。復元口径20.8㎝。

杯B（467）暗灰色を呈する。高台内は回転ナデをおこなう。復元口径21.2㎝、器高7.1㎝。

杯G（468）灰色を呈する。外面の一部に降灰している。平城遷都以前のもの。杯Hの蓋の可能性もある。復元口径10.7㎝、器高3.9㎝。

ⅲ　その他の溝出土土器

その他の溝から出土した土器を報告する。470はSD9049出土。471はSD9082出土。209・472はSD17565出土。473はSD9056出土。474はSD16306出土。475はSD9286出土。

土師器　杯A（209）橙白色を呈する。b1手法で、一段の斜放射状暗文を施す。口縁部は巻き込む。復元口径17.9㎝、器高3.6㎝。

須恵器　杯蓋（473・474）473は灰色を呈する。器壁が全体に薄く、精巧に作られる。復元口径16.2㎝。474は灰色を呈する。頂部は回転ケズリをおこなう。復元口径10.2㎝。

杯B（470・471・475）470は青灰色を呈する。高台は外接する。内面に茶褐色の付着物がある。復元口径17.2㎝、器高4.4㎝。471は明灰色を呈する。復元口径18.3㎝、器高6.1㎝。475は灰色を呈する。復元高台径10.3㎝。

椀（472）白色を呈する。底部は回転ナデをおこなう。復元底径16.8㎝。

H　井戸出土土器(PL.86)

井戸出土土器

調査区内の井戸は少なく、出土土器も少ないか、小片のみの場合が大部分であるが、SE9295よりまとまった土器が出土した。

須恵器　杯蓋（476）硬質で灰白色～青灰色を呈する。外面は明灰白色の自然釉がかかる。頂部は回転ケズリをする。内面は硯に利用されており、墨が付着し、研磨が著しい。

杯B（477・478）477は暗灰色で外表面は黒灰色を呈する。復元高台径13.8㎝。478は暗灰色を呈する。高台は外接し、高台内は回転ケズリを施す。復元口径13.0㎝、器高3.5㎝。

盤B（479）灰色を呈する。底部近くに把手が付く。外面はケズリをおこない、把手を粗いナデにより取り付ける。内面は同心円状当具痕跡が残る。復元底径24.0㎝。

壺A（480）青灰色を呈する。重ね焼きの痕跡から蓋をかぶせて焼成したと考える。口縁部はやや外反する。内外面ともに丁寧にナデをおこなう。Ⅰ群である。復元口径14.4㎝。

I　土坑出土土器（PL.87）

土坑出土土器

土坑より出土した資料を報告する。210・481・482はSK17564出土、211・212・483はSK17698出土、484はSK9283出土、213はSK16311出土。

土師器　杯A（211）明橙色を呈する。外面は口縁部を横方向のナデ、それより下はケズリをおこなう。内面は横方向のナデ。復元口径16.8㎝、器高4.1㎝。

椀A（213）灰褐色を呈し、c3手法を用いる。復元口径13.1㎝、器高4.0㎝。

椀C（212）明褐色を呈する。口縁部は横方向のナデをおこない、直立する。復元口径13.6㎝、器高3.5㎝。

盤B（210）明褐色を呈する。大型の盤に三角形の把手と高台を付ける。外面はケズリで、二段の斜放射状暗文を施す。高台は内接する。復元口径50.2㎝、器高12.6㎝。

須恵器　杯蓋（481）灰色を呈する。端部は屈曲し垂下する。外面は降灰がみられる。頂部つまみ横に径１㎝程の円孔を外面から開けている。復元口径12.5㎝、器高2.4㎝。

壺（482）明灰色を呈する。底部内面には濃緑色の釉及び降灰がみられ、広口壺と考える。高台は両端が突出し、内接する。胴部外面は高台との接合部の上部に回転ケズリをおこなう。高台内は回転ナデをおこなう。復元高台径10.6㎝。

杯B（483）青灰色を呈する。高台内は回転ヘラ切り痕跡を残す。口径9.2㎝、器高4.3㎝。

椀蓋（484）球状の大型のつまみを付けた蓋で、硬質で、胎土は明青白色を呈する。外面に明緑色釉が付着する。端部は屈曲し、垂下する。復元口径14.8㎝、器高3.1㎝。

J　包含層出土土器（PL.87）

包含層出土土器

調査区北側は、複数回の整地がおこなわれている。また、集中して土器が出土する個所もあり、何らかの遺構が存在していたが発見できなかったか、整地時に廃棄された可能性がある。また他に黄褐色土層からは平城Ⅲを中心に平城Ⅴまでの土器が、灰褐色土層からは平城Ⅲ～Ⅶの土器が含まれている。

i　IC70灰褐色土出土土器

IC70灰褐色土からは平安時代前半の土師器が集中して出土した。多くは小片であるが、接合が可能なものもあり、これについて報告する。

土師器　杯蓋（219）褐色を呈する。外面はケズリで、縁辺部に強くナデをおこない、わずかに外反させる。復元口径17.2㎝。

杯A（214～218）いずれも褐色を呈する。主にc0手法を用いており、暗文はない。口縁端部はわずかに巻き込む。口径16.4～12.6㎝、器高4.0～3.0㎝。

ii　IK63暗灰色土出土土器

IK63暗灰色土から集中して出土した土器である。平城Ⅲの段階と考える。

土師器　杯A（220～222）いずれも褐色を呈する。220はb1手法を用い、一段の斜放射状暗文と見込み部分に螺旋暗文を施す。復元口径20.1㎝。221はb0手法で、一段の斜放射状暗文と見込み部分に螺旋暗文を施す。復元口径19.4㎝、器高3.1㎝。222はa0手法を用いる。復元口径18.3㎝、器高3.5㎝。

杯蓋（223・224）223は褐色を呈する。外面はミガキを施し、内面に螺旋暗文を施す。端部は内湾させる。復元口径20.4㎝。224は明橙色を呈する。外面はミガキを施す。復元口径14.5㎝、器高2.8㎝。

皿A（225～229）いずれも褐色を呈する。228はa0手法で、他はb0手法を用いる。226は風化が著しく、内面の暗文の有無は不明であるが、他は一段の斜放射状暗文を施す。口径19.1～17.0㎝、器高3.3～2.4㎝。

椀A（230）褐色を呈する。a0手法で、底部に木葉痕を残す。口縁部外面および内面全体に横方向のナデがおこなわれ、胴部外面は粗いナデをおこない、指頭圧痕を残す。復元口径20.3cm、器高6.4cm。

須恵器　杯蓋(485)青灰色を呈する。外面は降灰がみられる。

iii　灰色土出土土器

110次調査灰色土出土土器である。

須恵器　杯A（486）灰色を呈する。口縁部は緩やかに内湾する。底部は回転ケズリをおこなう。復元口径14.2cm、器高3.3cm。

杯B（487）暗灰色を呈する。底部は回転ケズリの後高台を付ける。復元口径16.4cm、器高3.6cm。

杯C（488）軟質で灰白色を呈する。外面は重ね焼き痕跡がある。復元口径18.4cm、器高3.3cm。

K　墨書土器・刻書土器（PL.88～91）

調査区内出土土器のうち、墨書が確認できるものは64点にのぼる。これらの詳細は別表としてまとめる。図化したのは内35点である。ここでは土器の特徴に付いて述べる。

墨書の内容

土師器（231～242）231は褐色を呈し、杯部外面はケズリをおこなう。脚部は7角に下から上へケズリをおこない面取りする。復元口径30.6cm、器高19.9cm。232は「□／蔵人所」と墨書する。褐色を呈し、外面はケズリ、内面はナデをおこなう。233は「道」と墨書する。褐色を呈し、c0手法を用いる。内面は横方向にナデをおこなう。復元口径17.3cm。234は褐色を呈する。復元高台径8.2cm。235は褐色を呈する。c0手法を用いる。復元高台径7.6cm。236は褐色を呈する。237は褐色を呈する。復元高台径8.0cm。238は「甚上」と墨書する。褐色を呈する。脚部は9角に下から上へケズリをおこない面取りする。239は褐色を呈する。外面はミガキ、内面は横方向のナデをおこなう。復元口径31.8cm。以上はSG5800B出土。

240は明褐色を呈する。外面はミガキで、一段の斜放射状暗文を施す。241は「大」と墨書する。褐色を呈する。外面はケズリ、内面はナデ。242は明褐色を呈する。口縁部はナデにより外反し、その下の外面は指頭圧痕を残す。復元口径13.5cm、器高3.8cm。

須恵器（489～511）489は「出義」と墨書する。灰色を呈する。回転ヘラ切り後ナデをおこなう。490は灰色を呈する。外面は降灰。復元高台径10.8cm。491は灰色を呈する。復元口径14.4cm、器高4.2cm。492は灰色を呈し、外面に重ね焼き痕跡がある。復元口径20.4cm。493は「宮」と墨書する。灰色を呈する。復元高台径12.0cm。494は灰色を呈する。内面は硯に使用され、墨の付着と研磨がみられる。以上はSG5800B出土。

495は習書であろう。灰色を呈する。内面には墨が付着するが研磨の痕跡はない。復元口径10.0cm。496は「中井」と墨書する。青灰色を呈する。外面に重ね焼きの痕跡があり、内外面に降灰が一部みられる。底部は回転ヘラ切り痕跡を残す。口径13.6cm、器高4.0cm。497は「中井」と墨書する。明灰色を呈する。498は灰色を呈する。底部は回転ケズリの後、高台をつける。復元高台径13.5cm。499は「山」と墨書する。灰色を呈する。復元口径15.0cm。500は「寺」と墨書する。灰色を呈する。頂部外面は回転ケズリの後回転ナデをおこなう。501は灰色を呈する。内外面ともにナデをおこなう。復元口径24.4cm。502は「大」「内」と墨書する。灰色を呈する。外面は一部ケズリをおこない、内面は同心円状当具痕跡を残す。503は灰色を呈

する。底部は回転ヘラ切りの後回転ナデをおこなう。復元口径11.2cm、器高3.9cm。504は暗灰色を呈する。外面に重ね焼き痕跡をもつ。底部の器壁は非常に薄く、回転ヘラ切り後未調整である。復元口径11.0cm、器高3.4cm。505は「足」と墨書する。灰色を呈する。底部は回転ケズリ後に高台を付ける。復元口径14.7cm。506は灰白色を呈する。底部は回転ヘラ切り痕跡を残す。復元底径12.0cm。507は習書と考える。灰色を呈する。外面に重ね焼き痕跡をもつ。内面を硯に使用し、墨の付着と研磨がみられる。復元口径16.0cm、器高2.3cm。508は「大輔」と墨書する。青灰色を呈する。復元口径23.6cm。509の墨書内容は不明であるが、呪符の可能性がある。灰色を呈する。復元口径20.4cm。510は内面～口縁部外面に漆が付着している。明灰色を呈し、外面に重ね焼き痕跡をもつ。底部が高台より突出する。復元口径28.2cm、器高12.5cm。511は灰白色を呈する。

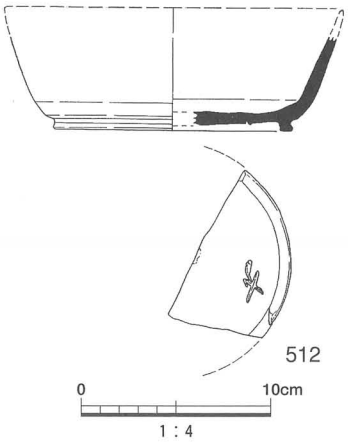


Fig. 60　刻書土器

「大」と刻書　**刻書土器**（512）　512は「大」と刻書する。刻書は焼成前にヘラ状の工具でおこなっている。青灰色を呈する。復元高台径12.5cm。

L　特殊土器・土製品（PL.92）

i　硯

須恵器と黒色土器がある。818・819はSB5800B出土。

円面硯　**須恵器**（513～517）　513～516は圏足円面硯。513は陸部と海部の境が明瞭でない。脚部は長方形透かしの間に沈線を入れる。515・516は陸部と海部の間に段差を付け、境が明瞭なものである。陸部の研磨が著しい。517は蹄脚円面硯。

風字硯　**黒色土器**（818・819）　黒色土器B類の風字硯で、共に内外面とも丁寧にミガキを施す。硯面は摩耗している。818の脚部はケズリにより面取りされる。他に破片が1片ある。

ii　金付着土器

金泥をつくるための硯か　**須恵器**（518）　杯Bに金が付着したものがある。青灰色を呈する。底部は回転ヘラ切り後に高台を付ける。金は内面に擦り付けられたように付着していることから、金泥をつくるための硯として使用されたと考えられる。口径9.8cm、器高3.8cm。包含層出土。

iii　中国産陶磁器

三彩陶枕　**三彩陶枕**（901）　唐三彩の絞胎の陶枕である。発色の異なる二種の粘土を縞状に折り重ねて作った粘土塊より切り出した粘土板（たたら）を組み合わせて製作する。外面には薄い明緑色釉が施釉される。残存している2面には弱い反りがあり、底部は平坦で絞胎を使用しないことが多いことから上面の角の部分であると考える。類例の検討では、たたらの接合方法にはたたらの端部の片面を斜めに削ぎ落として合わせるものとたたらの側面に直接別のたたらを組むものがあるが、本例は後者で、天板に側板をとりつける。包含層出土。

越州系青磁　**青磁双耳壺**（902）　越州系の青磁の双耳壺である。胎土は灰色を呈する。この上に灰白色の

化粧土を刷毛塗りし、施釉をおこなう。釉は黄灰褐色に発色する。把手は板状にした粘土を貼り付ける。貼り付け部分に指頭圧痕が残る。９世紀後半から10世紀初頭。包含層出土。

白磁蓋（903）　白磁の蓋である。胎土は灰白色で、化粧土はせずに外面のみ施釉する。復元口径9.0㎝。SB5800B上層出土。　白磁の蓋

iv　土製円盤・土錘

土製円盤（1001・1002）　瓦や土器の破片を円形に整形し、中央部に穿孔した円盤である。1001は瓦の再使用で、周辺を打ち欠いた後、縁辺と表面を擦って整形する。48.0g。1002は土師器杯あるいは皿の底部を利用し、周辺を打ち欠いている。14.9g。

土錘（1003～1006）　土錘はいずれも素焼きで、棒に粘土を巻き付けて整形したものである。1003・1004はケズリをおこなうが、1005・1006はおこなわず、指頭圧痕を残す。1003はJB70石敷より出土。残存部75.9g。1004は南面大垣南雨落溝SD5825より出土。26.0g。1005はSB5800B下層より出土。51.3g。1006はIL63土器溜より出土。12.4g。

M　古墳時代の土器（PL.93）

調査地区内には奈良・平安時代の遺物の他、古墳時代の遺物も出土している。平城宮周辺は佐紀古墳群に隣接し、本報告対象地域の隣接地の調査で埴輪窯の存在が確認されるなど(奈文研1993)、古墳時代においても活発な人間活動が存在したことを示すものが多い。ここでは調査区内出土の古墳時代の資料を報告する。

i　SK9394出土土器

120次調査で調査したSK9394は多量の土師器、初期須恵器、埴輪が共伴して出土している。良好な一括資料と考える。大型高杯と半球形杯部をもつ高杯、器壁が厚い甕等からSD6030上層土器（奈文研学報Ⅹ(1980)・年報1997―Ⅲ(1997)）と同時期のものであろう。　初期須恵器

土師器　高杯（243～247）243は大型の高杯で、橙色を呈する。杯部内外面は横方向のナデの後、上下にミガキを施す。復元口径20.8㎝。244～247は半球形杯部をもつ高杯である。茶褐色～橙色を呈する。口径13.4㎝～11.0㎝。

椀（248）橙色を呈する。風化が激しく、外面の調整は不明。

壺（249～251）249は小型で、橙色を呈する。内外面とも丁寧にナデがおこなわれる。250・251は球形の胴部に直線的な口縁部をもつもので、明茶灰色を呈する。外面は煤が付着する。252は口縁部内外面ともにナデをおこない、外面にミガキを加える。内面は下半をケズリ、上半は粘土紐の輪積み痕跡を残す。250は口径9.4㎝、器高16.5㎝。251は口径8.2㎝。

甕（252～256）252は直立する口縁部を付けるもの。茶褐色を呈する。復元口径10.0㎝。253～256はやや長めの球胴に内湾する口縁部をもつもので、明茶灰色を呈する。253・254は胴部外面をハケメ、内面にケズリをおこなう。255は胴部外面をハケメ、内面にハケメおよびナデをおこなう。256は胴部外面に粗いナデをおこなうが、タタキの痕跡が残る。内面はケズリ。口径15.2～13.3㎝。

須恵器　壺（519）ほぼ完形品で暗青灰色を呈する。口縁部中位に二条の突帯を廻らせ、この下に細かなクシ状工具による波状文をつける。胴部は中位に沈線を二条廻らせ、この間にクシ状工具による波状文をつける。底部付近は回転ケズリをおこなう。口径9.6㎝、器高13.5㎝。

ii　調査区包含層出土土器

調査区内包含層からは、多量の古墳時代の土器が出土しているが、小片が多い。ここではその一部を紹介する。

杯H蓋（520～523）沈線で稜を表現し、頂部のケズリを稜までおこなうもの（520）から半球形に近く、明確な稜をもたないもの（523）までである。口径17.6～14.2㎝、器高5.4～4.7㎝。

杯H（524～527）蓋受けからの立ち上がりが大きく、口縁端部に段を有するもの（524・525）から立ち上がりが小さく、端部を丸くおさめるもの（527）までである。

高杯蓋（528）硬質で灰色を呈する。器壁は厚く、丸みがある突帯が付く。頂部付近に沈線を二条廻らせ、間にクシ状工具で放射状に一単位６点の方形の刺突による文様を加える。陶質土器の可能性もある。復元口径12.8㎝。

高杯（529）赤褐色を呈する。復元口径9.3㎝。

壺（530）灰色を呈する。下膨れの胴部をもつ。

Tab. 11　出土墨書土器一覧

番号	種　類	地　区	遺　構	器　種	記載部位	記載内容	備　考	図面／写真番号
1	土師器	LK73·JE61 AQ29ほか	SG5800B	高杯	杯内	□□□ ○取□□□ □□浄カ	44·99·276次 接合	PL.88-231
2	土師器		SG5800B	杯又は皿	底外	□／蔵人所院カ	集成I-1055	PL.88-232
3	土師器	JA71	SG5800B	杯A	口縁外	道	集成I-1065	PL.88-233
4	土師器	JB72	SG5800B	皿A	口縁外	□		
5	須恵器	JB72	SG5800B	杯B蓋	頂外	□		
6	土師器	JC70	SG5800B	杯又は皿	底外	□		
7	土師器	JC71	SG5800B	杯A	底外	□		
8	須恵器	JC71	SG5800B	杯B	底外	□		
9	土師器	JD62	SG5800B	杯B	底外	□□ 王部カ		PL.88-234
10	土師器	JD66	SG5800B	杯A	口縁外	□	口縁端部 漆付着	
11	土師器	JD66	SG5800B	高杯	杯内	□取カ	2片	
12	土師器	JD66	SG5800B	杯B	底外	□	内面漆付着	
13	須恵器	JD66	SG5800B	杯A	底外	□		
14	土師器	JD68·JD72	SG5800B	杯B	底外	[　　]鬼カ		PL. 88-235
15	須恵器	JD72	SG5800B	杯A	底外	出義	集成I-1056	PL.88-489
16	土師器	JE63	SG5800B	杯A	口縁内	□	2片	
17	須恵器	JE68	SG5800B	杯B	口縁内	□		PL.88-490
18	土師器	JE72	SG5800B	杯B	口縁外	□		
19	土師器	JE72	SG5800B	杯又は皿	底外	□ 凾カ		PL.89-236
20	土師器	JE72	SG5800B	杯B	底外	□□ 京カ	集成I-1059	PL.89-237
21	須恵器	JG64	SG5800B	杯B	底外	中□／□縦	習書	PL.89-491
22	土師器	JG67	SG5800B	杯又は皿	底外	□		
23	土師器	KM70	SG5800B	高杯	脚外	甚上		PL.89-238
24	土師器	KM74	SG5800B	杯又は皿	底内外		習書	
25	須恵器	KN77	SG5800B	杯B	頂内外	□嶋在□外 □應□／□内	集成I-1062	PL.89-492
26	須恵器	KO75	SG5800B	杯B	底外	宮	集成I-1063	PL.89-493
27	土師器	KR65	SG5800B	蓋	頂外	「絵」	集成I-1064	
28	土師器	KR65	SG5800B	高杯	杯外	□		PL.89-239
29	土師器	KR65	SG5800B	杯又は皿	底外	[　　]		
30	土師器	KR65	SG5800B	杯	口縁外	□		
31	土師器	KR65	SG5800B	杯又は皿	底外	[　　]	習書	

番号	種　類	地　区	遺　構	器　種	記載部位	記載内容	備　考	図面／写真番号
32	土師器	KR65	SG5800B	杯又は皿	底外	□□□		
33	須恵器	KR68	SG5800B	杯	底外	□□□		
34	須恵器	KR70	SG5800B	杯B蓋	頂外	□ 中カ	硯利用	PL.89-494
35	土師器	KS65	SG5800B	杯A	口縁内	[　]		
36	須恵器	KS66	SG5800A	杯B蓋	頂外	□／道	習書･墨パレット 集成I-1061	PL.89-495
37	土師器	CD18	木樋埋土	杯A	口縁外	□□侍		PL.90-240
38	須恵器	CC18	南北溝1	杯A	底外	中井		PL.90-496
39	須恵器	CD18	下層溝	杯A	底外	中井		PL.90-497
40	須恵器	CD18	断割 石組溝下	杯B	底外	□		
41	須恵器	BT17	築地崩落土	杯B蓋	頂内	□／		
42	須恵器	BT17	築地崩落土	杯B	底外	□		PL.90-498
43	須恵器	MB67	SA5505	杯B	口縁外	山	集成I-970	PL.90-499
44	須恵器	MB70	SA5505	皿B蓋	頂外	寺	集成I-971	PL.90-500
45	土師器	MB71	SA5505	杯又は皿	底外	大	集成I-972	PL.90-241
46	須恵器	MB72	SA5505	鉢D	底外	□		PL.90-501
47	土師器	MB68 MB72	SD9375	椀C	底外	□ 覧カ	集成I-990	PL.90-242
48	須恵器	MB68	SD9375	甕	体内	「大」「内」	習書 集成I-991	PL.90-502
49	須恵器	FB61.62.63	SD9375	杯A	底外	□□ 人カ	集成I-992	PL.90-503
50	須恵器	LD69	溝	杯A	底外	□	(築地内)	
51	須恵器	AG21	SD9375	杯A	底外	□□		PL.91-504
52	土師器	AG21	SD9375	杯又は皿	底外			
53	須恵器	AJ16	包含層	杯B蓋	頂内			
54	須恵器	AG35	土坑	杯B	口縁外	□ 足カ		PL.91-505
55	土師器	AI35	断割	椀A	底外	□□		
56	須恵器	AI35	断割	杯	底外	□□		
57	須恵器	AI35	断割	杯A	底外	□呂器		PL.91-506
58	須恵器	AI37	埋戻土	杯B蓋	頂外	□	硯使用	
59	須恵器	IK63	灰褐土	杯B蓋	頂外	「□□川波毛」 「師／師／師」	習書 硯使用 集成II-235	PL.91-507
60	須恵器	IL62	灰砂	皿B蓋	頂内	大輔	集成II-236	PL.91-508
61	須恵器	PF80	Z	杯B蓋	頂外		呪符カ	PL.91-509
62	須恵器	BF39		鉢×	底内	墨書	漆付着	PL.91-510
63	土師器	Z	包含層	皿A	口縁外	口／口 七カ	集成I-1069	
64	須恵器	Z	包含層	杯B	底外	□□／諸		PL.91-511

備考欄の集成○－○は既報告の『平城宮墨書土器集成』I･IIの図版番号である。

Tab. 12　出土硯一覧

番号	分　類	地　区	遺　構	備　考	図面／写真番号
1	風字硯	JE72	SG5800B	黒色土器B類	PL.19-818
2	風字硯	KS69	SG5800B	黒色土器B類	PL.19-819
3	圏足円面硯B-b	IH63	包含層	外堤径　15.6cm	PL.19-513
4	圏足円面硯脚	IK62	包含層	脚径　16.2cm	PL.19-514
5	圏足円面硯A-b	IN65	包含層	硯面径　19.6cm	PL.19-516
6	圏足円面硯脚	IK66	包含層		
7	蹄脚円面硯B脚	IM67	包含層	脚外径　25.0cm	PL.19-517
8	円面硯	BN15	南北溝	硯面径　16.8cm	PL.19-515
9	蹄脚円面硯脚	BN16	包含層		
10	圏足円面硯脚	CO18	包含層		

N　埴輪（PL. 94～96）

本報告で扱う地区のいずれの場所からも埴輪が出土している。しかし、SK9394から出土した1113を除くと、ほとんどが小さな破片で、また、地点ごとの個体や時期のまとまりも看取できない。平城宮の造営の際に客土に含まれるかたちで各所からもたらされたものと考えられる。ただし、東院地区には第243次調査でみつかった埴輪窯が存在しており、一部それに由来する可能性があるが、以下に示すように５世紀のほぼ全般にわたる資料が各種みつかっていることから、埴輪窯にすべてを結びつけることは難しい。

Fig. 61　宮内出土鰭付円筒埴輪（SX17455）

円筒埴輪　平城宮内で出土する埴輪が宮の北側に営まれた佐紀盾列古墳群との強い関係をもっていることには多言を要しまい。そして、経験的に述べるならば宮内西部ほど黒斑をもつ５世紀前半以前の埴輪が多く、逆に東部に窖窯焼成以後のものが多く出土する。これはそのまま、古墳群が西側ほど古く東側へと順次築かれていったことの反映といえる。ただし、埴輪棺資料となるとFig. 61にあげた鰭付円筒埴輪が第270次で東院西部地区から出土している。これは特殊な契機によると考えなくてはならない。これまでのところ、宮内で出土した円筒埴輪の中で最古のものがこの鰭付円筒埴輪で、４世紀後半に遡る。

５世紀各期の円筒埴輪

さて、調査地区内で出土した円筒埴輪をまとめたのが、PL. 94である。図では上の方に時期的に古いものをおき、下の方ほど新しいものを配置してある。1101がおそらく５世紀前葉に位置付けられるこの中ではもっとも古いもの。それ以外は、すべて窖窯焼成になるもので、多くの個体の胴部にはＢ種横刷毛目調整が施されている。また、1103、1106のような大型品、1107のような中型品、そして1108のような小型品という大まかな作り分けがあったことが読み取れるが、Ｂ種横刷毛目調整をしない５世紀でも末に近い1110～1112の一群には大型品がみとめられない。これらは川西編年に従えばＶ期の資料にあてはまる。しかし、底部をさかさまにして抑えたり叩いたりする底部調整や最下段突帯に断続ナデ技法が見られるものは存在しない。

こうしたヴァラエティの中、もっとも特徴的なものが、1106、1107のような幅広で帯状の突帯を施した乳褐色で厚手の円筒埴輪で、図示はしていないがそれらの多くに大きな鰭が取り付くものと推測できる。調整などからウワナベ古墳の円筒埴輪に対比されるが、それらには幅広の突帯は目立たない。ヒシャゲ古墳に平行する大型古墳に伴うものと思われる。なお、赤色顔料が飛び散った痕のある1104をはじめ、赤色塗布の見られるものも多い。1105、1109のような朝顔形円筒埴輪も一定量存在する。

形象埴輪　1113は甲冑形埴輪で、草摺以下台部にかけてと冑の部分はまったく残っていない。肩幅44cmの中型品で残存高は35cm。黒斑付着。短甲は三角板革綴式鉄製短甲を模倣したことが

はっきりわかるが、引合板の表現はあっても地板と異なる帯金表現がなされていない。肩甲は下縁がほぼ水平に伸びる型式で、頸甲は線刻で表現しただけである。顔面相当部には小さな方形の孔を刳りぬき、その上端の位置で冑部分に連続する。5世紀前葉に位置付けられ、共伴した土器とも齟齬しない。

その他については、以下、種類ごとに説明を加える。1114～1116が甲冑形埴輪。そのうち1114は剥離の形状などから襟付短甲の破片と思われる。1115、1116は別個体であるが、出土している草摺の文様はすべて鋸葉文で、綾杉文のものは見当たらない。1117は大刀形埴輪で護拳用の革帯の端部である。外面中心に玉の飾りが付いていたことがわかる。1118は器種不明。平らな頂部をもつ棍棒頭様のもので、側面に竹管文を連ねる須恵質の製品。1119は蓋形埴輪の立飾付根とそれを受ける芯棒部分。立飾には線刻はまったく残っておらず、形態からも5世紀末以後に位置付けうる。1120と1123は靫の破片、1121もやはり靫にみえるが、断定できない。1120は両面に文様が施されているのが珍しい。表面の鉄鏃は、平根式で大きな逆刺が表現されていて、この点でも例が少ない。1123は靫の背板下部にある半円状の突出部の破片で、輪郭にそって回っていた帯が剥離したもの。1121は鍵手文の特徴から5世紀中ごろを下らないと見られる大型の破片であるが、具体的な部位を特定できない。1122は表面の劣化が著しいが、船形埴輪の船底から左舷側にかけての部分と判断される。前方に向かって緩やかに船底があがり、舷側外面には帯状の突帯が貼り付けられている。また、船底底面には円形の台部が接合していたとみられる剥離痕が残る。1124は内向きの鋸歯文をもつ盾形埴輪盾面。

種類豊富な形象埴輪

人物埴輪としては1125がある。小型の男性人物の胴部で、胸部には弧線の連続による魚鱗状の文様が刻まれていて、左の胸で衣装を結び留めている表現がある。両脇は円形に穿孔がなされており、腕の欠損部分などからも、本個体が胴部まで円筒形を基調に作ったのち、腕を取り付けながら肩から上を塞ぐように作っていることがわかる。1126、1127が馬形埴輪。ともに鞍付近の破片で、前者は後輪右半分とそれから伸びる尻繋などが表現されている。革部分には竹管による連続スタンプが施され、鞍橋には綾杉文が刻まれている。後者は鞍がすでに剥落しており、それにとりつく尻繋と鞍褥の輪郭表現が残っている。前者より大型である。

1128～1132が家形埴輪。そのうち、1129と1132が妻側壁体上部の破片。前者には立体的な束柱の両側に円径の小孔が穿たれている。この個体は壁体完成後、大棟を前後に延ばしていく作り方をしている。これに対して、後者は、妻壁に屋根の板を載せる形のものである。妻壁には綾杉帯が刻まれる。1131は非常に小型の家。1130の基部と比べてその差は歴然である。

1133～1136は玉杖(石見形盾)の破片と見られる。1136を除きいずれも、盾面に2本一組の青海波状の表現で直弧文を施し、小円孔を手前から下向きに刺している。両側の板状部が円筒部に対して前面よりに取り付く点や、区画の綾杉文がはっきり意識されていることから比較的古いもので、先の5世紀末頃の円筒埴輪と時期的にそう隔たらない。1136はその台部に相当。2対以上の円孔が穿たれている。1137は壺形埴輪の鍔部分と見られる。1138は鍵手文を刻んだ家形埴輪の柱とも見えるが、厚みが左右で異なるので家形埴輪の側廻突帯かあるいは別の器種かもしれない。1139は大型の板状の破片であるが、全形を推定できない。ついたて形埴輪かもしれない。1140は突帯が斜めに交差する埴輪棺の破片と見られる。第316次調査で、第一次大極殿地区西側から専用の埴輪棺の蓋が出土しているが、ともに窖窯以前のものである。

4　木製品

東院庭園地区では、園池SG5800の堆積土をはじめとして多量の木質遺物が出土した。これらの多くは破損あるいは腐蝕、分解してしまっており、原形をとどめるものは少ない。形態も多様で、種類および用途を知ることも難しい。また、調査当初の44次調査から本報告にいたるまで長期間が経過したため、すでに保存処理を終えた遺物も少なからずあり、加工痕等の観察を十分になし得なかったものも存在する。

記載は基本的に遺構単位でおこない、園池、大垣関連遺構、建物、塀、溝、井戸、土坑および遺物包含層の順とした。木製品の名称と形式分類については、『木器集成図録近畿古代篇』(1985、以下『集成』) およびこれまでの『平城報告』にしたがい、『木器集成図録近畿原始篇』(1993、以下『原始篇』) も合わせて参考にした。樹種については、特に記していない場合はすべてヒノキである。年輪年代測定による値の得られたものについても付記した (樹種の鑑定と年輪年代測定は、埋蔵文化財センター光谷拓実による)。なお、すでに『集成』に収録された資料については、対応関係を (集2703) のように示した。

A　SG5800出土木製品 (PL. 97～108)

園池SG5800からは多量の木製品が出土している。ここでは85点を図示したが、これらのうちSG5800Aに対応すると考えられるものはわずかであり、他はすべて黒褐色砂質土を中心にSG5800Bの堆積土中より出土している。そこで、園池に関わる製品については一括して種類別に報告することとした。

a．容　器・食事具 (PL. 97～100)

容器としたものには、曲物容器、挽物容器、栓、柄杓の柄、食事具には箸、匙形木器がある。

曲物容器

1　曲物底板。ほぼ完形。全体に腐蝕が著しい。側面に釘孔をとどめ、一部に木釘を残す。直径21cm、厚さ5㎜。99次KQ66黒褐色砂質土。

2　曲物底板。ほぼ完形。全体に腐蝕が著しい。側面に木釘の孔をとどめる。直径24.5cm。厚さ6㎜。ヒノキか。99次KO71黒褐色砂質土とKP67黒褐色砂質土が接合する。

3　曲物底板片。推定径約14cmの円盤の断片。側面の1箇所に木釘の孔をとどめる。現存長11cm、同幅3.8cm、厚さ4㎜。99次JE72黒褐色砂質土。

4　曲物底板片。推定径約20cmの円盤の断片。現存長15.0cm、同幅3.7cm、厚さ5㎜。99次JE71黒褐色砂質土。

5　曲物底板片。推定径14.4cmの円盤の断片。側面はわずかに傾斜をつける。側面に1箇所木釘をとどめる。現存長13.7cm、同幅4.4cm、厚さ6㎜。99次JB72黒褐色砂質土。

6　曲物底板片。側面の1箇所に木釘の孔をとどめる。現存長14.0cm、幅2cm、厚さ7㎜。99次JB71黒褐色粘質土。

7　曲物底板。直径19.2cmの円盤の断片。側面に木釘の孔をとどめる。現存幅11.3cm、厚さ5㎜。99次JD71黒褐色砂質土。年輪年代測定の結果、842年 (Bタイプ)。

8　曲物蓋板片。推定径16.6cmの円盤の断片。側縁に樺皮で綴じるための一対の孔をもつ。現

存長11.4cm、同幅3.1cm、厚さ5mm。99次KS71黒褐色砂質土。

9　曲物蓋板片。全体に腐蝕が著しい。2孔一対の綴孔が2箇所にあり1箇所は樺皮を残す。綴孔を結ぶように側板の痕跡が認められ、頂辺のやや内側に側板を回していたことがわかる。現存長10cm、同幅5.5cm、厚さ3mm。99次JE72黒褐色砂質土。

10　曲物蓋板片。推定径27cmの円盤の断片。2箇所に綴孔の痕跡を残し、1箇所には樺皮をとどめる。現存長21.7cm、同幅3.7cm、厚さ5mm。99次KN75石敷。

11　楕円形曲物底板片。一面は削り調整を加え、一面は割面となる。現存長8.5cm、同幅2.0cm、厚さ4mm。99次JB72黒褐色砂質土。

12　円盤形の板材の中央に1.3cm四方の方孔をうがつ。側面5箇所に釘孔をとどめ、このうち2箇所に木釘が残る。曲物底板を転用したものであろう。『集成』ではこうした製品を「蓋板」の項で取り上げ、樺皮紐などを孔にとおしてつまみにしたのであろうとしたうえで、蒸器のサナにあてる説もあるとする。直径16.2cm、厚さ6mm。スギ。99次JB71黒褐色砂質土。年輪年代測定の結果、751年（Bタイプ）。

挽物皿

13　挽物皿。側面に轆轤の痕跡を残しわずかな段をつける。表裏面に多数の刃物傷が認められる。挽物による食器類の形態はおおむね土器や陶器と一致することから、奈良・平安時代の土器の呼称に準じた分類がおこなわれており、『集成』では13を高台のつかない皿D類（径18cm内外）にあてる。口径19.0cm、底径17.3cm、高さ1.2cm。99次JA71黒褐色砂質土。（集2703）。

漆器蓋

14　漆器蓋。全体に黒漆をかけた挽物の印籠蓋である。2片に割れているがほぼ完形になる。笠形の頂部中程に径6.2cmの段をつける。頂部には径2cmの算盤玉形のつまみがつく。類例は、平城京左京一条三坊SD650に9世紀前半のものがある[1)]。頂部径9.0cm、高さ8.0cm、身深さ5.6cm。広葉樹。99次JA71東西畦床土。

高杯の台脚

15　円盤状挽物。円盤形の中央に径2cmの上部の欠損した突出部をもつ。上面に轆轤目がよく残り、下面中央には長さ1cmの轆轤の爪跡を残す。『集成』では15を轆轤挽きの蓋でつまみを欠損したものにあてたうえで、小型高杯の台脚とすることも可能とした。台脚の例としては正倉院中倉紺瑠璃坏に付属する銀製台脚が形状・底径ともに15にちかく参考となろう[2)]。直径5.3cm、高さ1.4cm。99次JE63暗灰色粘質土。（集4018）。

16　挽物底部片。挽物の器の底部が剥離したもの。側面に轆轤目をのこす。全体に腐蝕が著しい。底径7.6cm、残存厚1.4cm。広葉樹。99次KS66暗灰色粘質土。

17　厚板材の先端を尖らせ、両側縁の中程に切り欠きをもうけたもので、片方の側面に1条の沈線をもつ。先端の2箇所には斜めに打ち込んだ木釘をとどめる。曲物柄杓の柄と考えこの項に含めておくが、他の器物の柄となる可能性もある。長さ36.6cm、基部幅2.1cm、厚さ1cm。99次JB71黒褐色砂質土。

18　栓。栓は壺や瓶の栓にあてうるもので、轆轤で挽くものもある。18は上下の面を鋸で切断し側面はきれいな曲面を呈する。長さ9.2cm、上面径3.9cm、下面径2.4cm。99次KP73石敷下・赤灰色粘質土。

19　栓。丸棒の一端を一回り細く削出したもの。全体に腐蝕が著しい。長さ10.5cm、広端径3cm、狭端径2cm。スギ。99次JD71黒褐色砂質土。（集4020）。

20　箸。細棒を断面が扁平になるように整形したもの。基部は切断、先端はわずかに突出させ

る。長さ22.1㎝、基部幅５㎜、厚さ3.5㎜。120次池Ａトレンチ第１次池汀基礎石掘形青灰色含砂暗黒色粘土。

21　箸。断面が扁平になるように調整し、やや先細りにつくる。先端は削りを加えわずかに圭頭状につくる。一端折れ。現存長13.2㎝、幅７㎜、厚さ５㎜。99次KM73暗灰色粘質土。

匙形木器　22　匙形木器。『集成』では、刳物の匙およびそれに類するものに対して、小さな細板を削ってつくる匙形の木器を「匙形木器」とする。身の形態から３形式に区分し、Ａ形式は、身の先縁を一直線にするもの、Ｂ形式は先縁を半円形にするもの、Ｃ形式は身の先縁が半円形を呈するが身の幅がせまく細長いものとする。Ｂ形式を除くＡ・Ｃ形式は漆箆や鏝等との形態上の識別が難しい。22はＢ形式。板材の側面を削り、肩とまっすぐな柄をつくる。身の先端は丸くし、柄に対して身の厚さが薄くなるように両面を調整する。柄先端を欠損。現存長19.2㎝、身幅3.4㎝、柄幅1.3㎝、厚さ６㎜。99次KS70黒灰色砂土。(集4214)。

23　匙形木器。Ｃ形式のうち、身と柄の境界が明瞭なもの。全体に腐蝕が著しい。板材の側面を調整し、ゆるやかな肩をつくる。身の先端は両面から削りを加え、剣先状に尖らせる。柄部欠損。現存長18.5㎝、身幅3.4㎝、厚さ４㎜。スギ。99次JE65黒褐色砂質土。

24　匙形木器。現状で笹葉形を呈する板状品であるがＣ形式の匙形木器と考えた。上半の両側縁は削り面をとどめるが、柄部を欠き全体に腐蝕が著しい。長さ24㎝。幅4.9㎝。厚さ７㎜。スギ。44次LI76池黒色土。

b. 農　具・紡織具（PL. 101）

農具・紡織具としたものには、もじり編みに用いた編台の目盛板、織機部材がある。

編台の目盛板　25　もじり編みに用いた編台の目盛板[3]。細長い板材の側面に三角形の刻目をいれたもので、厚い方を上辺とすると、上辺に14箇所以上、下辺は破損が著しいが１箇所刻目を確認できる。刻目はおおむね9.5～11㎝、狭いところで3.5㎝間隔になる。また刻目の頂点から、あるいは刻目間に垂線状の細い切れ目を入れた箇所がある。現存長169.5㎝、幅6.9㎝、厚さ８㎜。スギ。99次KS66暗灰色粘質土。

26　編台の目盛板。25とよく似た板材であるが、幅が異なるため、別個体とした。両端は隅丸方形に整形されていた可能性がある。上辺に２箇所の刻みが認められる。現存長51㎝、幅8.2㎝、厚さ９㎜。スギ。99次KS66暗灰色粘質土。

織機部材　27　織機部材。角棒に削りを加え、両端に節をもうける。図の上端では突起の基部に円孔をもうけ、その対面の身部側面にも方孔が１つある。下端の節には２条の刻線がめぐる。『集成』では織機の部品となるものには小型のものと大型のものがあり、両者は無機台と有機台の違いを示しているかもしれないとし、27は小型で、経巻具ないしは布巻具にあたる可能性を示した。長さ34.5㎝、1.4㎝角。99次JB72黒褐色砂質土。スギ。(集1108)。

28　織機部材。角棒の両端に両側面から抉りを入れて、ひもかけをつまみ状につくったもの。経巻具ないしは布巻具になろう。なお、『原始編』では、経巻・布巻具のなかにこの形態の部材を含めたうえで、織機部材に用途を限定する根拠は必ずしもないとする。長さ40.7㎝、現存幅1.9㎝、厚さ９㎜。スギ。99次K079黄褐色砂と276次第６トレンチ北灰色粘質土が接合。

c. 祭祀具（PL. 102・103）

祭祀具としたものには、舟形木製品、斎串および刀形がある。

29　舟形木製品。舟形木製品には、角材や半裁の丸木に船槽を刳り抜いてつくる丸木船形と、丸木船に甲板を設けた準構造船形とがある。丸木船形には船首と船尾を尖らせるA形式と、船首と船尾を四角や隅丸方形につくるB形式とがある。29はB形式で、舟形としては大型に属する。部材の一面に隅丸長方形の舟槽を彫り込み、舷側の3箇所に相対する切り欠きをもうける。横桟をわたしたのであろう。舟底のほぼ中央および一端には枘孔をあけており、帆柱を立てた可能性がある。また、一方の側面の船首と船尾に各1箇所未貫通の穿孔がある。長さ55.8㎝。幅11.3㎝、厚さ5.5㎝。44次LJ。(集5816)。　舟形木製品

30　斎串。斎串には多様な形態のものがみられるが、本報告の斎串は、基本的に黒崎直による分類のA・B形式に限られるため、この分類を用いることとする。[4] A形式は切り掛けを全く施さず、山形に尖る上端と両側から鋭く尖らす下端をもつもの。このうちA_2は、上端を圭頭状に作らず一方向のみから斜めに削り落とした形状をもつもので、表面には割面をとどめるものが多いとされる。B形式は細長い板材の上端を圭頭状にして下端を剣先状につくり、側辺上部または肩部に一対の切り掛けを施すものである。本報告の対象地で出土した斎串は、30・217の2点を除き、いずれもA_2形式であることが大きな特徴である。特に、園池中央建物SB8490、南岸建物SB17582・17700に関わる抜取穴等からの出土が顕著である。これらは全体の形状に加え、上辺の形状、頂部先端の加工の有無などにより細分が可能である。　斎　　串

30は、B形式の斎串。割板の上下を圭頭状に尖らせたもので、左右の切り掛けの部分が欠落したもの。長さ19.6㎝、幅3.1㎝、厚さ4㎜。99次KS71灰黒色砂。

31　斎串。A_2形式。両面に割面を残し、上辺は斜めに削り落とす。頂部先端を小さく落とす。下半は両側から削りを加え尖らせる。長さ25.4㎝、幅3.4㎝、厚さ5㎜。276次AM30池。　斎　串　A_2形　式

32　斎串片。割板材の上辺を斜めに削り、頂部を断ち落としたもの。裏面の下辺に加工痕が認められることから、完成品の断片ではなく、A_2形式の斎串製作に関わる残材の可能性がある。長さ9.2㎝、幅3.2㎝、厚さ3㎜。99次JA71黒褐色砂質土。

33　斎串片。割板の両側面を斜めに落とし先端を尖らせる。A_2形式斎串の下半か。現存長13.7㎝、同幅2.2㎝、厚さ4㎜。99次KR71石敷。

34　斎串片。割板の両側面を削り先端を尖らせたもの。A_2形式斎串の下半。現存長10.7㎝、幅2.7㎝、厚さ4㎜。99次KS71黒褐色砂質土。

35　斎串片。割板の両側面を削り尖らせたもの。A_2形式斎串の下半。現存長11.3㎝、幅3.2㎝、厚さ4㎜。スギ。99次KS70黒灰色砂土。

36　刀形。断面三角形状の割り材を両面から削り調整し、細い刀子状にしたもの。長さ22.8㎝、基部幅9㎜、厚さ5㎜。スギ。99次JA70黒褐色砂質土。　刀　　形

d. 服飾具・雑　具（PL. 103～105）

服飾具には下駄、留針がある。また箆、琴柱、建築部材雛形、部材片などを雑具としてこの項に含めた。

37　下駄。全体に腐蝕が著しい。台と歯を一木からつくる連歯下駄で、楕円形の台部は前方をやや広めにつくる。歯は身の側面よりもわずかに外に出る。前壺を台の中央に開け、後壺を歯の内側にあける。以上の特徴から、『集成』における下駄の分類ではCⅢd類にあたり、平城京左京一条三坊SD650（9世紀前半）などで数多く認められる形式である。[5] 長さ18.5㎝、幅7.8㎝、　下　　駄

厚さ1.8cm。99次JE62黒褐色砂質土Ⅱ。

38　留針。留針は一端もしくは両端を尖らした細長い棒状の具とされ、形状から３形式に分類される。Ａ形式：頭部を鋲頭状につくるもの。Ｂ形式：頭部を細板状につくるもの、Ｃ形式：頭部に加工を加えないもので、身を扁平につくるＣⅠ形式と丸棒状につくるＣⅡ形式に分かれる。Ｄ形式：両端ともに尖らすもの。38は丸棒の頂部から３cmまでに黒漆をかけたもので、側面全体を調整し先端が細くなるようにつくる。『集成』ではＣⅡ形式の留針にあてたうえで、やや大きいので留針でないかもしれないとする。端部の径や漆塗りのありかたが、平城京二条大路SD5300出土巻物軸[6]、山田寺宝蔵SB660出土巻物軸[7]などと類似することから、本来は巻物軸であった可能性が高く、これに二次的な加工を加えたものと考えられる。長さ14.3cm、頂部径９mm。99次JE71黒褐色砂質土。(集1912)。

巻物軸の転用

39　「東」を縦に連ねた習書木簡を素材としたもので、その側面にゆるやかな肩を作り、文字のある面の先端を斜めに落とす。文字のない面は先端に方形の刳り込みをつくる。形状は組み合わせ式の刷毛の身のつくりに類似するが、控えが浅く柄の加工も不十分である。未製品であろうか。現存長6.2cm、同幅1.3cm、厚さ５mm。99次KO74灰色砂。

40　箆。Ａ形式の匙形木器とすべきかも知れないが、身の両面ともに平坦で、全体に著しく薄いことからここでは箆とした。割板の側面を削り、緩やかな肩をつくる。身の先端は直線的に落とす。柄の先端欠損。現存長11cm、同身幅2.5cm、厚さ３mm。99次JD66灰黒色砂質土。

琴柱

41　琴柱。『集成』では、琴柱は「遊戯具」に分類される。琴柱には平面形が等脚台形の両斜面を途中から垂直に断ち落とした六角形を基本形とするＡ形式と、等脚台形を基本形とするＢ形式がある。両者はともに上底に絃受けの溝をつけ、下底中央を三角形あるいは半円形等に切り欠いて双脚につくる。また、下底に細工をしないものもある。41はＢ形式の琴柱で平面形は台形というよりは山形にちかい。頂点に向かって全体が薄くなるように加工し、頂点には絃受けの溝を刻む。下底には浅い三角形の削りを入れ双脚につくる。立てたときにわずかに傾くように、一方の脚底面は斜めに削り落とされている。幅4.7cm、高さ3.1cm、厚さ８mm。広葉樹(散孔材)。99次KR70黒褐色砂質土。

42　墨画円盤。推定径12.2cmの円盤。未接合の２片（Ａ・Ｂ）があり、表面に唐草状の墨画、裏面には墨の滲みと刃物傷が残る。Ａ：現存長10cm、同幅2.9cm、厚さ３mm、Ｂ：現存長7.5cm、同幅1.8cm、厚さ２mm。99次JG72暗褐色砂質土。

五角斗雛形

43　建築部材雛形（建築模型部材)。平面形が五角形を呈する大斗の雛形で、五角形の底辺を燕尾形に切り込む。一方の耳を欠く。底面には径１cmの太枘孔をもつ。特殊な平面形態をもつこと、底面先端の角度が約138度をなし、正八角形頂点の角度である135度と近似することから、八角形平面の厨子、八角小円堂あるいは八角小塔などに用いられた斗栱の部品であると考えられている[8]。こうした建築模型（様）には、伝世品として海龍王寺五重小塔、元興寺極楽坊五重小塔、正倉院紫檀塔残欠があり、これらは実際の建物の10分の１の模型であることが知られている[9]。出土例には、平城宮第一次大極殿院東楼SB7802の掘立柱抜取穴出土の肘木、斗、束など15点（77次[10]）、若犬養門前の二条大路北側溝SD1250出土の斗１点（133次[11]）、佐紀池南辺の整地層中出土の斗１点（177次[12]）、平城京二条大路上の溝SD5100出土の斗１点（200次[13]）がある。また、藤原京からも右京七条一坊SE2270で斗が１点出土している[14]。長さ4.8cm、幅3.5cm、高さ

3.7㎝。スギ。99次KR67黒褐色砂質土。(集6304)。

44　断面が台形状になる角材の一面に、幅1.2㎝、深さ５㎜の溝を連続してもうけた後、両端を斜めに切断する。『集成』では「用途不明品」のうち、「刀剣の形をした材の側面に鋸歯を刻んだ木器。柄と身からなり、身の両側もしくは片側に歯を刻む」ものに分類されたが、①鋸歯部分が広く、全面にわたって刻みがあり、完結した製品であること、すなわち柄に相当する部分がないこと、②平置きすると、溝の部分が斜めに立ち上がることなどから、いわゆる鋸歯状木製品とは異なり、一つの可能性として筆置きのような用途を推定したい。ただし、本来は両端にさらに刻みが続いていたことが明らかであるため、その一次的な形態と用途が問題となろう。長さ16㎝、幅1.4㎝、厚さ1.2㎝。99次KM74黒褐色砂質土。(集7238)。

45　道具の柄。厚板材をもちい、先端の片側に掛金状の刳り込みをつくる。反対側の形状は欠損のため不明。末端はわずかに「く」字になるように側面を削り、１孔をもうける。長さ18.7㎝、幅２㎝、厚さ1.1㎝。アカガシ亜属。99次KR71黒褐色砂質土。

46　把状木製品。断面が扁平な八角形を呈するように面取りをおこない、端部が広がるようにつくる。把頭は削りを加えゆるやかな膨らみをつくる。軸部欠損。現存長9.3㎝、幅3.5㎝、厚さ2.2㎝。広葉樹（環孔材)。99次KS70黒褐色土。

47　部材片。薄板材の両側を弧状に削り込んで細くつくり、その基部に幅1.1㎝、深さ1.5㎜の合い欠き状の溝をつける。現存長12.3㎝、幅2.9㎝、厚さ４㎜。99次KR71黒褐色砂質土。

48　部材。細身の厚板を断面の斜面がゆるやかな弧をえがく直角三角形状に調整し、両端に大小３孔をもうける。48～50の３点は形態は異なるものの、１面が平坦で１面が曲面をなし端部に釘孔をもつという共通のありかたがみられる。平坦面を下にして板材に打ち付けたものであろう。長さ17.3㎝、幅2.7㎝、厚さ７㎜。スギ。99次KQ68黒褐色砂質土。(集6812)。

49　部材。割板材の表裏を調整し、両端を片面から削り剣先状につくる。両端に２孔一対の釘孔をもうけ、１箇所には木釘をとどめる。長さ20.5㎝、幅2.1㎝、厚さ５㎜。スギ。99次JG72暗褐色砂質土。(集6809)。

50　部材片。厚板の端部を片面から斜めに落とし、両端に１孔ずつ釘穴をもうける。１端を欠く。現存長15.7㎝、幅2.9㎝、厚さ８㎜。99次KS71黒褐色砂質土。

51　加工棒。割材の周囲に削りを加え、下半は丸棒状に細く仕上げる。『集成』では、「用途不明品」のうち、「串の一種か。加工は粗く一時的な使用に供したものであろう」とされた一群に分類する。長さ18.2㎝、幅2.8㎝、厚さ2.1㎝。99次JD71黒褐色砂質土。(集7226)。

52　加工棒。カマボコ形に整形した棒材の両端上面に断面Ｖ字形の溝をつけたもの。一部に焼痕あり。長さ11.4㎝、幅2.0㎝、厚さ1.2㎝。スギ。99次JG72暗褐色砂質土。(集7009)。

53　加工板。厚板を木葉形に整形し、中央上寄りに２孔を横並びにもうけたもの。長さ7.6㎝、幅5.3㎝、厚さ4.5㎜。99次JB72黒褐色砂質土。(集7016)。　木葉形加工板

54　側面を弧状につくる部材片。側面に墨痕、両面に墨線が認められる。現存長8.0㎝、幅1.4㎝、厚さ４㎜。スギ。99次KS71黒褐色砂質土。

55　部材片。角材の一端に長さ1.5㎝、幅１㎝、厚さ４㎜の枘をつくり出す。身部には３面に小さな釘孔がみとめられる。現存長7.3㎝、幅1.5㎝、厚さ１㎝。99次JB71黒褐色砂質土。

56　黒漆塗八角棒。断面八角形を呈する棒の側面に黒漆を塗り仕上げたもの。先端を欠く。　黒漆塗八角棒

一端の小口から溝を切り、厚さ２㎜の板を挟み４カ所を木釘でとめる。現存長12㎝、径1.15㎝。99次KS71黒褐色砂質土。(集6802)。

黒漆塗細板　57　黒漆塗細板。細長い薄板の表面と側面に黒漆をかけたもの。裏は割面。一端の中央に釘孔が３孔、1.8㎝間隔でもうけられている。一端欠損。現存長17.2㎝、幅1.2㎝、厚さ2.5㎜。99次JB72黒褐色砂質土。(集6807)。

58　黒漆塗薄板。細長い薄板材の表面と側面全体に先端から3.5㎝の範囲でに黒漆をかけたもの。107・108と類似。現存長7.2㎝、幅1.4㎝、厚さ２㎜。99次KR71黒褐色砂質土。(集6801)。

ｅ．楔（PL.106）

楔　59　楔。角棒の２面を斜めに削り落とし、先端を薄くする。長さ10.4㎝、幅1.1㎝、厚さ1.3㎝。99次JE71黒褐色砂質土。

60　楔。割板材の２面を削り、先端を薄くする。両側面には割面を残す。長さ11.2㎝、幅4.2㎝、厚さ2.5㎝。コウヤマキ。120次PG79下層池ピット。

61　楔。割板材の２面に削りを加え、先端を薄くしたもの。長さ15.7㎝、幅3.8㎝、厚さ2.9㎝。コウヤマキ。99次KS70黒灰色粘土。

62　楔。方柱状の部材を加工し先端を切先状につくる。上端に方形の切り欠きと１面の中程に幅３㎜の溝をもつ。長さ24.5㎝。幅3.5㎝。44次LI76池黒色土。

63　楔。丸棒先端の４面に加工を加え、先端を薄くする。上端は打ち込み時のものであろうか、細かな割れにより、中央のみが直線状に残り、山形を呈する。長さ18.5㎝、幅3.7㎝、厚さ3.4㎝。シキミ。99次KQ70黒褐色砂質土。

64　楔。１側面欠損。割材の１面について４分の３程を削り、先端を薄くしたもの。長さ16.7㎝、現存幅3.3㎝、厚さ1.5㎝。99次JC67青灰色粘土。

ｆ．加工板・加工棒・尖端棒（PL.107）

65　加工板。細板端部の角を落とし、側面に内湾気味の削りを加える。一端欠損。現存長7.0㎝、幅1.4㎝、厚さ２㎜。99次JD66灰黒色砂質土。

66　加工板。薄板の一端を両側から斜めに落として尖らせたもの。他端欠損。長さ8.5㎝、幅1.7㎝、厚さ1.5㎝。スギ。99次KP71黒褐色砂質土。

67　加工板。断面が三角形状の割板の一端を斜めに切り落としたもの。長さ9.7㎝、幅1.2㎝、厚さ4.5㎜。スギ。120次PD86バラス下。

68　加工棒。細棒に調整を加え定形の角棒にしたもの。両端は切断。長さ7.7㎝、幅4.5㎜角。120次池Ａトレンチ旧池裏込。

69　加工棒。細い角棒の先端を削り尖らせたもの。一端を欠く。現存長7.0㎝、幅5.5㎜、厚さ4.5㎜。99次KR67石敷。

70　加工棒。扁平な角棒の側面に削りを加えわずかに先細りにつくる。先端は細かく削りをいれる。一端折れ。現存長11.5㎝、幅1.3㎝、厚さ７㎜。スギ。99次JA70黒褐色砂質土。

71　加工棒。角棒の側面に面取りを加え整えたもの。長さ13.9㎝、幅1.9㎝、厚さ1.4㎝。スギ。99次JF72暗褐色砂質土。

72　加工棒。角棒の側面に加工を加え、両端を細くしたもの。腐蝕が著しい。一端折れ。現存長15.6㎝、先端幅1.4㎝、中央幅2.0㎝、厚さ1.45㎝。99次JA68黒褐色砂質土。

73　加工棒。角棒の側面を面取りし、丸棒状につくる。一端折れ。現存長20.0cm、径９mm。99次JB71黒褐色粘質土。

74　加工棒。角棒の各面に調整を加えたもの。両端折れ。現存長26.8cm、幅1.75cm、厚さ１cm。スギ。99次JA70黒褐色砂質土。

75　尖端棒。角棒状の割材の先端４面を削り尖らせたもの。長さ31.7cm、幅1.6cm、厚さ1.2cm。99次JA67石敷下。

76　尖端棒。割り棒の上端を斜めに削り落とし、側面全体を調整して先端が薄く尖るようにつくる。長さ28.6cm、幅1.2cm、厚さ１cm。スギ。99次JA71黒褐色砂質土。

77　尖端棒。角棒の先端を削り尖らせたもの。長さ21.0cm、幅1.1cm、厚さ６mm。276次第３トレンチ。

78　尖端棒。角棒の側面を削り、先端を尖らせたもの。基部欠損。現存長15.7cm、幅1.1cm、厚さ９mm。スギ。99次JC72黒褐色砂質土。

79　尖端棒。角棒の４面を調整し、全体が先細りになるようにつくる。現存長14.2cm、幅9.5mm、厚さ９mm。120次PD86バラス下。

80　加工棒。細い角棒の２面を調整するが、部分的に強く削りを加えヘラ状にしたもの。両端折れ。現存長15.8cm、幅6.5mm、厚さ５mm。120次PD86バラス下。

81　加工棒。断面杏仁形に面取りした丸棒の一端を、片面のみ削り込んでヘラ状に薄くしたもの。両端折れ。現存長13.7cm、幅1.4cm、厚さ１cm。99次JA67石敷下・砂。

g．その他（PL.108）

82　饅頭形木製品。半球形を呈する部材の断片。頂部は裁頭状に割れる。全体に腐蝕が著しい。半球形の木製品としては、たとえば唐招提寺金堂の板扉に用いられた雨壺などが知られているが[15]、82には固定のための釘穴などは認められない。径7.0cm、幅4.6cm、厚さ2.5cm。99次JD63黒褐色砂質土。　**饅頭形木製品**

83　轆轤残材。有段の半球形を呈する材の断片。中心から心をずらした木取りをする。側面の平坦面に接するところには、小口切り状の加工があり、それより上位には轆轤目を残す。頂部中央には突起がある。平坦面には削りのあたりがみられる。204と類似。類例は平城宮内裏北外郭SK870より出土しており、中心につまみのつく蓋の未成品の可能性も指摘されている[16]。径9.8cm、高さ3.6cm。99次JF68黒褐色砂質土。　**轆轤残材**

84　加工板。２枚に分かれているが、本来１枚の板材を加工したもの。上下端は薄くなるようにつくり、一端には対称位置に一対となる小孔を穿つ。一面には刃物傷がみられる。長さ36.1cm、幅10.4cm、厚さ６mm。99次KP67黒褐色砂質土。

85　加工棒。丸棒の一端を削り落としたもの。先端の半分を欠くため、加工が１方向からか２方向で山形にしたのかは不明。長さ25cm、径3.4cm。アカガシ亜属。99次KQ69黒褐色砂質土。

B　大垣関連遺構出土木製品（PL.108・109）

東院庭園は、東面大垣SA5900および南面大垣SA5505により宮外と区画される。この項では、大垣とこれにともなう雨落溝、大垣内部から外部への排水をおこなうために大垣に設けられた暗渠内から出土した資料を提示する。

i　SA5900出土木製品（PL. 108）

東面大垣SA5900にともなうもの。

86　杭。丸棒の先端に４面の削りを加え尖らせたもの。上部は欠失。現存長12.2㎝、径2.7㎝。二葉松類。245-2次CB16築地地業土。

ii　SD9040出土木製品（PL. 109）

東面大垣SA5900の西雨落溝SD9040の側石・底石抜取穴より出土したもの。

87　加工棒。上下を切断した割材の周囲に不整な面取りを複数回おこない、断面が七～八角形状を呈する先細りの棒状に加工したもの。長さ15.5㎝、頂部径2.5㎝。245-2次CD18雨落溝側石抜取穴。

88　箸。細棒に面取りを加え、やや扁平につくったもの。両端はわずかに細くする。長さ18.8㎝、幅5.5㎜、厚さ4.5㎜。245-2次CD18雨落溝側石抜取穴。

89　加工棒。細棒に面取りを加え、整形したもの。上下で幅と厚さがねじれの関係にある。現存長12.0㎝、幅４㎜、厚さ３㎜。245-2次CD18雨落溝側石抜取穴。

90　加工棒。細棒に面取りを加え、角棒に整形したもの。現存長9.5㎝、４㎜角。245-2次CC18石溝底石抜取穴。

iii　SD8436出土木製品（PL. 109）

東面大垣SA5900下をとおる木樋暗渠SD8436にともなうもの。

91　加工板。薄板材の片面を長軸方向に沿って面取りしたもの。一方がわずかに細い。現存長18.6㎝、幅1.8㎝、厚さ３㎜。99次HB57東西溝青灰色粗砂。

92　加工板。薄板材の片面を長軸方向に沿って面取りしたもの。一方がわずかに細い。現存長14.5㎝、幅2.0㎝、厚さ4.5㎜。99次HB58東西溝暗灰色粘土。

93　加工棒。断面菱形を呈する棒状品。長さ12.3㎝、幅1.0㎝、厚さ６㎜。99次HB59東西溝青灰色粗砂。

94　加工棒。細角棒の一端を圭頭状に削り、他端は斜めに削り落とす。長さ21.7㎝、幅４㎜、厚さ３㎜。99次HB59東西溝青灰色粗砂。

95　加工棒。細角棒に面取りを加えたもの。現存長24.6㎝。５㎜角。99次HB59暗渠埋土暗灰色細砂。

iv　SD5830出土木製品（PL. 109）

園池SG5800Bの排水溝で、南面大垣SA5505下をとおる石組暗渠SD5830Bにともなうもの。いずれも第276次調査のAH22区暗渠木屑層出土である。

96　箸。細棒の側面全体に縦方向の面取りをおこない、両端は半球形に丸みをもたせる。長さ22.8㎝、径５㎜。

97　尖端棒。角棒の側面に削りを加え、全体を尖状につくる。現存長17.3㎝、基部幅７㎜、厚さ５㎜。

98　加工棒。角棒に面取りをおこない扁平につくったもの。二片に折れ、下端を欠く。現存長16.5㎝、幅７㎜、厚さ４㎜。

99　加工板。薄板の片面に削りを加え一端を刀子状につくったもの。下端を欠く。現存長14㎝、幅８㎜、厚さ２㎜。

100　加工棒。角棒の側面に面取りをおこない、一端を斜めに削り落としたもの。長さ12.1cm、幅８mm、厚さ４mm。

101　円盤状板材の断片。曲物底板の可能性が高いが、側面の残存範囲に釘孔はみられない。片面に刃物傷が認められるため、まな板に転用あるいはまな板の可能性もある。全体に腐蝕が著しい。推定径15.4cm、現存長14.5cm、同幅8.5cm、厚さ６mm。

C　建物・塀関連遺構出土木製品（PL. 110～119）

この項では、建物および塀に関わる柱穴（掘形）、抜取穴、および地業土中より出土した資料を提示する。

i　SB8480・SB8490・SB8466出土木製品（PL. 110～112）

Ⅱ期に園池中央に建てられた東西棟SB8480（102・103）、Ⅲ－２期に建替えられたSB8490（104～120）およびその露台SB8466（121～126）にともなうもの。

102　楔。丸棒の側面に断面が不整形な六角形になるように面取りをおこない、先端を尖らせたもの。長さ16.5cm、径2.4cm。99次KS71柱穴No. 80掘形内東端。

103　楔。割板材の２面を加工し、厚さ１cm程と先端を厚めにつくる。一面のみ腐蝕が著しい。長さ14.2cm、幅4.5cm、厚さ２cm。99次KR75土坑。

104　加工棒。角棒の側面に削りを加え、断面が隅丸長方形で、一方が細くなるように仕上げたもの。長さ20.8cm、幅2.4cm、厚さ1.8cm。99次KS71土坑黒褐色砂質土。

105　加工棒。角棒の側面に削りを加え、断面隅丸長方形で、一方が細くなるように仕上げたもの。先端欠損。104と全体のつくりが酷似することから、２本で１組になる可能性がある。現存長15.5cm、幅2.4cm、厚さ1.3cm。99次KS71土坑黒褐色砂質土。

106　加工板。薄板を舟形に加工したもの。３片に割れ。長さ34.9cm、幅4.8cm、厚さ１mm。スギ。99次KS71土坑。

107　黒漆塗薄板。薄板の先端から6.5cm程の範囲で、表面と側面に黒漆を塗ったもの。一端欠損。108とともに58に類似。現存長11.2cm、幅1.6cm、厚さ1.5mm。99次KQ71土坑黒褐色砂質土。　黒漆塗薄板

108　黒漆塗薄板。薄板の先端から7.6cm程の範囲で、表面と側面に黒漆を塗ったもの。現存長11.3cm、幅1.6cm、厚さ２mm。99次KR71土坑黒褐色砂土。

109　箸。細棒の側面に削りを加え、わずかに扁平になるようにする。一端欠損。現存長20.7cm、幅６mm、厚さ５mm。スギ。99次KR71土坑黒褐色砂土。

110　箸。角棒の側面に面取りをおこない、頂部を削り山形につくる。現存長23cm、径４mm。スギ。99次KS71土坑。灰黒色砂土。

111　楔。割板材の三面を加工し、先端を薄くしたもの。全体に腐蝕が著しい。一側縁割れ。長さ10cm、現存幅6.6cm、厚さ2.4cm。99次KQ72石敷柱掘形暗褐色粘土。

112　斎串。A_2形式。断面三角形状の割板の上辺を斜めに削り、下半は両側面を直線的に落とし尖らせる。長さ23.7cm、幅3.9cm、厚さ８mm。99次KS71土坑黒褐色砂質土。　斎串A_2形式

113　斎串。A_2形式。割板材の上辺をわずかに弧状になるように削る。下半の加工は遺存状態がわるく不明。現存長24.2cm、幅1.7cm、厚さ7.5mm。スギ。99次KR71土坑黒褐色砂土。

114　斎串。A_2形式。細めの割材の上辺を斜めに落とし、下端は両側縁および片面から削りを

いれて薄く尖らせる。長さ27.1㎝、幅1.75㎝、厚さ7.5㎜。99次KR71土坑黒褐色砂土。

115　斎串。A2形式。細めの割板の上辺を斜めに落とし、下半は両側から斜めに削りを加え、末尾を尖らせる。長さ26.7㎝、幅２㎝、厚さ７㎜。99次KR71土坑黒褐色砂土。

116　斎串。A2形式。割板材の上辺を斜めに削り落としたもの。下半の形状は欠損のため不明。現存長20.1㎝、幅2.1㎝、厚さ６㎜。99次KR71土坑黒褐色砂土。

117　斎串。A2形式。割板の上辺を斜めに削り、頂部先端を片面から小さく削り落とす。下半は両側縁を削り尖らせる。長さ26.7㎝、幅3.2㎝、厚さ６㎜。99次KR71土坑黒褐色砂土。

118　斎串。A2形式。割板の上辺を斜めに落とし、下半は両側面に削りを加え尖らせる。現存長26.1㎝、同幅2.4㎝、厚さ5.5㎝。99次KR71土坑黒褐色砂土。

119　斎串。A2形式。板材の上辺を斜めに削り、頂部先端を片側から小さく落とす。下半は両側面に削りを加え尖らせる。末尾欠損。現存長29㎝、幅3.3㎝、厚さ８㎜。99次KR71土坑黒褐色砂土。

120　斎串。A2形式。全体に遺存状態がわるい。上辺は斜めに削り、頂部先端を落としていた可能性が高い。下半は両側面から削りを加え、末端を尖らせる。長さ33㎝、現存幅３㎝、厚さ８㎜。99次KR71土坑黒褐色砂土。

121　加工板。板材の両側に対角となるように大小一組の三角形の切欠きをいれる。切欠きの内側には部分的に墨が残る。長さ21.7㎝、幅2.1㎝、厚さ５㎜。99次JA70土坑。

122　箸。細い角棒の側面を断面がやや扁平になるように加工し、端部は削りにより山形につくる。一端欠損。現存長18.6㎝、幅７㎜、厚さ５㎜。99次KR70西柱掘形。

123　稜を丸く落とした部材の側縁中央に1.2㎝四方の貫通孔をうがつ。左右の小口面は鋸による切断。裏は割面を残すが、刃物による平行線状の切込みがみられる。もじり編みに用いた錘であろうか[17]。長さ12.5㎝、幅7.7㎝、厚さ2.5㎝。99次KR70西柱掘形。

接合する楔　124　楔。124と125は同一の丸材を縦に分割し、それぞれ楔に加工したものである。124は割材の片面のみを斜めに削りおとし、先端を薄くする。長さ10.1㎝、幅5.2㎝、厚さ２㎝。99次KS70柱穴。

125　楔。丸材を分割したのち、曲面の側に削りを加え先端を薄くする。割面の側は124と接合。長さ9.6㎝、幅4.8㎝、厚さ1.7㎝。99次KS70柱穴。

126　楔。上下を鋸で切断し、両面に削り調整を加えた板材を分割したのちに、片面のみに削りを加え先端を薄くしたもの。同一遺構から出土した長さ9.1㎝、幅11.6㎝、厚さ1.4㎝の板材が素材の残材と考えられる。長さ9.1㎝、幅4.9㎝、厚さ1.4㎝。99次KS70柱穴。

ii　SB8470・SB8471出土木製品（PL. 112・113）

Ⅲ－１期に園池中央に建てられた東西棟SB8470（127～129）およびその露台SB8471（130）にともなうもの。

127　加工棒。割板の側面に面取りをおこない、一端をわずかに薄く尖らせたもの。縦に半裁されているが、本来は棒状を呈していたものと思われる。長さ15.0㎝、幅2.4㎝、現存厚9.5㎜。99次JB72柱穴。

128　薄板の側縁を加工し刀子の形につくる。柄頭を圭頭状にする。箆あるいは刀子形であろう。長さ12.8㎝、身幅２㎝、厚さ２㎜。99次JD71礎石掘形。

129　楔。割板の２面に削りを加え、先端を薄くしたもの。長さ10.2㎝、幅3.2㎝、厚さ1.1㎝。99次JB71東柱掘形。

130　一方の尖った断面三角形状の材を用い、頂角に近い側面に１㎝四方の貫通孔をもうける。123同様にもじり編みに用いた錘か。長さ17㎝、幅5.7㎝、厚さ3.3㎝。99次JB70土坑黒灰色砂礫土。

iii　SB5880出土木製品（PL. 113）

園池東南隅の楼閣建物SB5880にともなうもの。

131　楔。割板材の２面に削りを加え、先端を薄くつくる。長さ11.6㎝、幅4.3㎝、厚さ2.3㎝。280次南AL18柱穴１掘形。

132　楔。断面が不整な多角形になる部材を断ち割ったものを素材とする。２面を削り先端を薄くつくる。長さ15.5㎝、幅6.4㎝、厚さ3.0㎝。280次南AL18柱穴１掘形。

133　加工棒。角棒の４面を調整し、わずかに先細りとする。基部は1.7㎝角で切断、先端は1.2㎝角で削りを加えわずかに凸面をなす。長さ19.2㎝。280次南AJ18柱穴１断割掘形。

iv　SB17582・SB17700・SX17701・SX5935出土木製品（PL. 114～116）

Ⅱ期に園池南岸西寄りに建てられた東西棟SB17582（134～139）、Ⅲ－１期に建て替えられたSB17700（140～152）、掘込地業SX17701（153～154）・SX17581（155）および地覆抜取SD17704（156）にともなうもの。

134　斎串。A_2形式。両面に割面を残し、上辺は削りを重ねゆるやかな弧状につくる。下半は両側縁を直線状に落とし尖らせる。２片に割れ。長さ約31㎝、幅4.6㎝、厚さ４㎜。276次AL31断割柱穴。　斎串A_2形式

135　斎串。A_2形式。両面ともに割面を残すが一部に調整を加えた可能性がある。上辺は斜めに削り落とす。下半は両側縁から直線的に削り尖らせる。長さ29㎝、幅2.5㎝、厚さ７㎜。276次AL31断割柱穴。

136　斎串。A_2形式。両面ともに割面を残すが、片面には部分的に調整が加えられた可能性がある。上辺は削りを重ね斜めに落とす。下半は両側縁から直線的に削り尖らせる。長さ27㎝、幅3.2㎝、厚さ4.5㎜。276次AL31断割柱穴。

137　斎串。A_2形式。頂部を欠く。両面に割面を残し、下半は両側面を削り尖らせる。現存長27.5㎝、幅４㎝、厚さ５㎜。276次AL31断割柱穴。

138　斎串下半の断片。A_2形式。両面に割面を残す。側面にはやや内湾気味の削り面がある。現存長12.7㎝、幅2.0㎝以上、厚さ３㎜。276次AL31断割柱穴。

139　八角棒　二片に折れ接合しない。不揃いな面取りにより断面が略八角形を呈し、中央に向かって太さを増す。現存長10.0＋5.4㎝、現存最大径2.3㎝、両端の径1.7～1.9㎝。276次AL31断割柱穴。

140　加工板。薄板を棒状に加工したもの。端部を丸くつくる。一端欠損。現存長9.1㎝、幅１㎝、厚さ2.5㎜。44次LG75柱穴。

141　部材片。厚板材を加工したもので、一端が緩やかに厚みを増す。現存長10㎝、広端幅2.0㎝、片面が割れているため、厚さは1.8㎝以上。276次５トレンチ断割。

142　加工棒。細板材の両端を両面から斜めにおとし、断面山形状につくる。長さ15.7㎝、幅

2.3cm以上、厚さ1.1cm。276次５トレンチ断割。

斎串 A2形式

143　斎串。A2形式。断面三角形状の割板の上辺をゆるやかな弧状に削り落とす。下半は腐蝕。現存長23.4cm、幅3.2cm、厚さ８㎜。44次LG75柱穴。

144　斎串。A2形式。断面三角形状となる割板の上辺を斜めに落とし、末端を尖らせる。下端は片面から厚さ１㎜ほど斜めに切り落とし、二股状につくる。長さ27.3cm、幅2.7cm、厚さ８㎜。276次５トンチ断割。

145　斎串。A2形式。両面に割面を残した板材の上辺を斜めに落とし、下半は両側面を直線的に削って尖らせる。頂部の加工はない。末端を欠く。現存長27.6cm、幅2.2cm、厚さ５㎜。276次AM33　７トレンチ柱穴南。

146　斎串。A2形式。１面に割面を残し、１面は調整されている。上辺は斜めに削りを重ね、頂部先端は丸く落とす。下半は側面を直線的に削り尖らせる。長さ31.7cm、幅2.8cm、厚さ1.0cm。276次AM30　７トレンチ断割。

147　斎串。A2形式。両面に割面を残す断面三角形状の割板材の上辺に、４回に分けて削りを重ねゆるやかな弧状につくる。頂部先端は平らに落とす。下端は両側面および片面から削りを加え尖らせる。長さ29cm、幅4.7cm、厚さ５㎜。276次５トレンチ断割。

148　斎串。A2形式。両面に割面を残し、上辺は削りを加えゆるやかな弧状につくる。下端は両側面を削り尖らせる。長さ28.5cm、幅5.1cm、厚さ1.0cm。284次AM32断割崩落土。

149　斎串。A2形式。両面に割面を残す幅広の板材をもちい、上辺は削りを重ねて弧状につくる。頂部を片側から斜めに落とす。下半は両側面を直線的に削り尖らせる。長さ24.1cm、幅5.3cm、厚さ５㎜。276次AM33　７トレンチ柱穴南。

150　楔。板目の割材の２面を４分の３程削り、先端を薄くする。両側面には割面を残す。長さ10.5cm、幅3.7cm、厚さ1.6cm。コウヤマキ。284次AM36礎石建物北側柱穴。

151　楔。板目の割材の２面を削り、先端を薄くつくる。長さ11.8cm、幅3.9cm、厚さ1.7cm。コウヤマキ。284次AM34柱穴②抜取。

152　楔。板目の割材の２面を中程から斜めに削り、先端を薄くつくる。側面に割面を残す。長さ12.9cm、幅3.3cm、厚さ1.4cm。コウヤマキ。284次AM34柱穴②抜取。

斎串 A2形式

153　斎串。A2形式。両面に割面を残し上辺を斜めに削る。頂部は片面から斜めに落とし丸くつくる。下半は両側面に削りを加え尖らせる。長さ23.8cm、幅3.7cm、厚さ2.5㎜。284次AM32布掘地業。

154　斎串。A2形式。両面に割面を残し上辺を斜めに削る。頂部を小さく落とす。下半は両側に削りを加え尖らせる。長さ32.5cm、幅4.3cm、厚さ９㎜。284次AM32布掘地業。(『年報1998-Ⅲ』図36-2)。

155　斎串上半の断片。A2形式。両面に割面を残し、上辺は削りを加えゆるやかな弧状につくる。現存長18.5cm、同幅2.1cm、厚さ４㎜。276次AL30断割。

156　斎串下半の断片。A2形式。側面を削り、末端を尖らせる。現存長24.0cm、同2.8cm、厚さ６㎜。284次AM32地覆抜取。

v　SB9068出土木製品（PL. 117）

157　工具柄。全体に削りをおこない一端の太い丸棒状につくる。小口には茎を差し込むため

の６×３㎜の方孔をもうける。端部欠損。現存長13.2㎝、径1.0㎝。110次IK62柱掘形(新)。

158　加工棒。角棒の各面に調整の削りを加えた後、一端は両側縁を斜めに落とすことにより、他端は両面から削りを加えることにより尖らせる。長さ17.5㎝、幅1.5㎝、厚さ７㎜。110次IK61東端柱掘形埋土。

159　薄板の側面を曲線的に加工し、一端を尖らせたもの。長さ8.6㎝、幅1.6㎝、厚さ３㎜。110次IK62柱掘形。

160　箆。片刃の刃物形を呈し、刃先を薄く、背をやや厚くつくる。柄の基部は斜めにおとしわずかに曲面をなす。表面に暗褐色の付着物が認められる。長さ16.2㎝、幅3.7㎝、厚さ３㎜。110次IK62柱掘形。

vi　SB9075出土木製品（PL. 117）

161　尖端棒。舟底形の割材の両端に削りを加え、尖らせたもの。長さ28.0㎝、幅2.6㎝、厚さ２㎝。コウヤマキ。110次IE69東西布掘掘形。

162　割板材の側面を削り、全体をゆるやかなＳ字状につくる。鳥形あるいは馬形になろうか。頭部には片面から小さな削りを加える。長さ24.6㎝、幅3.4㎝、厚さ１㎝。110次IH68南北トレンチ柱掘形黒灰色砂質土。

vii　SA9060出土木製品（PL. 117）

163　円盤の断片。腐蝕が著しく加工痕は不明。側面に釘孔をもたないことから、縁部中央の欠損を綴孔とみると曲物蓋板になる可能性がある。現存長17.5㎝、幅7.5㎝、厚さ４㎜。推定径約20㎝。110次IJ67北隅柱掘形(東南掘形)。

viii　SA9061出土木製品（PL. 117）

164　匙形木器。Ａ形式だが身の先縁をわずかに弧状にする。薄板材の側面を削りゆるやかな肩をつくる。柄部欠損。現存長9.2㎝、身幅2.9㎝、厚さ3.5㎜。110次ID75斜行塀柱掘形。

ix　SA9063出土木製品（PL. 118）

165　楕円形曲物底板片。厚板の側縁を下面が広くなるように斜めに削る。側板を留めるための樺皮が１箇所残る。現存長18㎝、同幅6.5㎝、厚さ7.5㎜。110次IJ65畦スグ北柱掘形。

166　匙形木器。身の先縁を一直線にするＡ形式。板材の側縁に削りを加え、ゆるやかな肩とまっすぐな柄をつくる。身の先端は折り取り。現存長19.5㎝、身幅2.5㎝、柄幅1.4㎝、厚さ4.5㎜。スギ。110次IJ65畦スグ北柱掘形。(集4226)。　匙形木器

167　箸。細棒の側面に削りを加える。現存長20.5㎝、径５㎜。110次IJ65畦スグ北柱掘形。

168　加工棒。断面菱形の割材の一端をまるく、他端を尖らせたもの。長さ16.4㎝、幅1.4㎝、厚さ８㎜。110次IJ65畦スグ北柱掘形。

x　SA9064出土木製品（PL. 118）

169　円盤形の厚板の断片。腐蝕が著しく加工の痕跡は不明。曲物底板であろう。現存長14.6㎝、幅4.2㎝、厚さ６㎜、推定径18.6㎝。ヒノキか。110次IG63東西塀東2。

170　加工棒。角棒の側面に丁寧な面取りをおこない、両端に削りを加えたもの。１面に幅５㎜ほどの圧痕が３条ある。長さ11.5㎝、幅1.3㎝、厚さ１㎝。110次IG65柱掘形。

171　墨刺。板材の一端を折り取り、その片面にのみ墨がつく。他端は切断。表面に複数の帯状圧痕がみられる。長さ14.5㎝、幅２㎝、厚さ４㎜。110次IG65柱掘形。　墨刺

172　加工棒。角棒を加工し、一端は３面から削りを加えて短く尖らせ、他端は一面を斜めに削りおとす。長さ21.5㎝、幅1.3㎝、厚さ９㎜。ヒノキ科。110次IG74東西塀柱掘形。

173　加工棒。細棒に面取りを加え、一端は先を丸くつくり切り込みをいれ、他端は細く尖らせる。縦割れにより一側面欠損。長さ24.5㎝、現存幅６㎜、厚さ６㎜。110次IG74東西塀北側柱掘形。

xi　SA9289出土木製品（PL. 119）

174　円盤形の底板の断片。直線をなす側縁には釘孔が１箇所ある。合釘状に板材どうしを繋ぎ留めたものであろう。１面には刃物傷が多数残ることから、まな板として利用された可能性がある。現存長21.2㎝、同幅5.2㎝、厚さ1.1㎝。推定径約36㎝。スギ。120次28P区SA07柱掘形。

D　溝出土木製品（PL. 119～121）

i　SD9092出土木製品（PL. 119）

織機部材　175　織機部材。縦に半裁されて２点に分かれているが、同一固体である。身の一端に長さ3.5㎝、幅９㎜、厚さ1.7㎝の軸をもうけ、軸の取り付く身の端部は矢羽根状に切り込む。軸の側面には方孔をもつ。身は現存長28.8㎝、幅３㎝、厚さ1.8㎝の扁平な丸棒状。他端は丸く削りおとされているが、これが二次加工によるものか、当初の状態かは不明。二次加工によるものとすると、本来は長さ32㎝以上、軸を両端にもち身の片面中央を匙面状に削り込んだものであったと考えられる。そのような類例は平城京下ツ道西側溝SD1900より出土しており、榎（はたあし）・あるいは綜棒に似た形をとるとされた。また『集成』では、経巻具ないしは布巻具であろうとする[18]。110次IN62南北溝。

176　加工棒。細棒の周囲に細かな面取りを加えたもの。両端に黒色の付着物が認められる。墨刺様のものか。長さ7.7㎝、径５㎜。110次IN62南北溝。

177　加工棒。角棒の両端に削りを加え、先を尖らせる。両端ともに黒色の付着物が認められる。墨刺様のものか。長さ15.0㎝、５㎜角。110次IN62南北溝。

顔　　形　178　表裏に墨書のある板材を楕円形に整形したもので、上面にむかって全体に反りをもつ。側面は下面がやや広くなるよう傾斜をつける。上面には２箇所の貫通孔と中央に１箇所の未貫通孔があり、これらを目・鼻と考えると、口に当たる位置にも欠けが認められ、全体に人面を意識したものである可能性が考えられる。また、上下面ともに多数の刃物傷が認められる。長さ9.6㎝、幅6.9㎝、厚さ1.0㎝。スギ。110次IN62南北溝。

ii　SD9041出土木製品（PL. 120）

179　箸。丸棒の側面全体に削りを加え調整したもの。基部端面はわずかに突出させる。長さ26.8㎝、径4.5㎜。110次IL61斜行古溝。

180　加工棒。割材を一方がやや太くなるように調整し、先端を丸くつくる。断面は菱形になる。下端は折れ。現存長20㎝、幅８㎜、厚さ４㎜。110次IL61斜行古溝。

181　尖端棒。角棒の側面に丁寧な面取りを加え、先端をポンチ状に尖らせたもの。基部欠損。現存長15.3㎝、1.3㎝角。110次IL61斜行古溝。

182　一端に曲面をもつ板材の断片。楕円形曲物の底板片であろう。現存長12.3㎝、同幅３㎝、厚さ７㎜。110次IL61斜行古溝。

iii　SD9088出土木製品（PL. 120）

183　加工棒。角棒に面取りを加え、全体を扁平につくる。先端は片面から削りヘラ状にする。一端を欠く。現存長14.6cm、幅1.2cm、厚さ6㎜。110次IP63斜行古溝。

iv　SD16300・SK16308出土木製品（PL. 120）

SD16300は、東面大垣SA5900に先行し、東院地区の東辺に沿って流れる素掘りの南北溝である。ここでは、SD16300（184～191）と、この溝内に掘りこまれた土坑SK16308（192～198）にともなうものを合わせて提示する。

184　留針。板材に丁寧な削りを加え、上端は山形につくり、下端を薄く篦状にする。完存。長さ16.1cm、幅1.1cm、厚さ2㎜。110次IP61素掘南北溝。

185　加工板。表面に割り面を残した薄板の両端を丸く削る。一端がやや幅広になる。長さ16.5cm、幅1.8cm、厚さ1.5㎜。245-2次CD18木屑層。

186　加工板。細板の両端に削りを加え、やや丸みのある圭頭状につくる。一方の幅がわずかに広くなっている。長さ17.2cm、幅7㎜、厚さ3㎜。245-2次CD18下層溝。

187　尖端棒。角棒の先端を内湾気味に削り落とし、尖らせたもの。現存長17.2cm、幅7㎜、厚さ3㎜。245-2次CD18下層溝。

188　加工棒。細棒の全体に面取りを加えて調整し、両端を斜めに落としたもの。長さ15.4cm、径5㎜。245-2次CD18木屑層。

189　墨刺。角棒の側面全体に面取りを加え、上半を一段削り込んで先端を尖らせる。先端の各面に墨がのこる。長さ12.8cm、幅6.5cm、厚さ4.5㎜。245-2次CD18木屑層。

190　加工棒。薄板の側面をわずかに角度をつけて削り、端部は角を落として隅丸につくる。広端は切れ目を入れて折りとっている。現存長10.3㎜、幅1.7cm、厚さ2.5㎜。245-2次CD18下層溝。

191　加工棒。両側面に面取りを加え、先端もわずかに丸みをつける。一端を欠く。現存長8.4cm、幅7㎜、厚さ3㎜。245-2次CD18木屑層。

192　加工棒。断面三角形の割材の両端に削りを加え、一端が丸みを帯びて幅広くなるようにつくる。長さ15.8cm、幅9㎜、厚さ4㎜。245-2次CD18土坑。

193　加工棒。角棒状の割材の一端を圭頭形に加工したもの。現存長13.9cm、幅8.5㎜、厚さ6㎜。245-2次CD18土坑。

194　留針。角材の下半二分の一を面取りし薄く尖らせ、頂部はゆるやかな山形につくる。精巧なつくりである。完存。長さ11.5cm、幅7㎜、厚さ3㎜。245-2次CD18土坑。　留　針

195　加工板。薄板の両側面を斜めに面取りしたもの。両端は切断。長さ9.3cm、幅1.5cm、厚さ4㎜。245-2次CD18土坑。

196　加工板。頂部を圭頭につくり、側面に切り込みを入れて付札状に加工した板材の縦割れ片。現存長9.1cm、頂部現存幅1.2cm、厚さ4.5㎜。245-2次CD18土坑。

197　加工棒。角棒の頂部を圭頭状に尖らせ、以下の両側に内湾気味の調整を加えたもの。一端を欠く。現存長6.6cm、幅6㎜、厚さ3.5㎜。245-2次CD18土坑。

198　尖端棒。角棒の端部側縁を斜めに削り落とし尖らせたもの。一端を欠く。現存長7.3cm、幅7㎜、厚さ4㎜。245-2次CD18土坑。

v　SD16302出土木製品（PL. 121）

鳥　　形　199　鳥形。断面三角形の割板の一端に削りを加え、両側を斜めに断ち落として尖らせたのち、三角形の切り込みをいれ頭部をつくる。長さ14.6㎝、幅1.6㎝、厚さ３㎜。245-2次BO18下層南北溝。

200　栓。丸棒の４面を削り、先端を断面長方形につくる。上面下面の小口はともに削りを複数回加えることにより整形しており平坦ではない。長さ９㎝、長径3.6㎝。スダジイ。245-2次BO18下層南北溝。

201　加工棒。両端を切断し、定形の角棒にしたもの。長さ8.9㎝、幅６㎜、厚さ４㎜。245-2次BO18下層南北溝。

202　尖端棒。角棒の一端を斜めに削り落とし尖らせたもの。他端は欠損。現存長12.4㎝、幅８㎜、厚さ６㎜。245-2次BO18下層南北溝。

203　加工板。細板材の一端に片面から削りを加えヘラ状に薄くする。他端は、両側を斜めに削り尖らせる。現存長17㎝、幅1.8㎝、厚さ4.5㎜。245-2次BO18下層南北溝。

vi　SX16305出土木製品（PL. 121）

上層園池SG5800Bの導水路SD8455につながる溜まり状遺構SX16305にともなうもの。

轆轤残材　204　轆轤残材。全体に腐蝕が著しい。半球形を呈し頂部がつまみ状に突出する。側面には平坦面との境に幅１㎝ほどの垂直な立ち上がりをもつ。平坦面には、轆轤の爪の痕跡が２個一対で４箇所確認できる。83に類似。『概報』において「独楽状木製品」としたもの。径10㎝、高さ５㎝。245-2次BN18大南北溝。

205　加工棒。角棒の２面を面取りし、先端を薄くつくる。現存長10.2㎝、幅５㎜、厚さ４㎜。245-2次BN19大南北溝。

vii　SD17764出土木製品（PL. 121）

206　尖端棒。細棒の側面を面取りし、弓状につくる。一端を尖らせ基部にも削りを加える。長さ22.3㎝、基部幅７㎜。280次南AH18南北溝。

E　井戸・土坑・包含層出土木製品（PL. 122・123）

i　SE9295出土木製品（PL. 122）

庭園南西部で検出した東西5.7m、南北2.6mの矩形の井戸にともなうもの。

207　加工材。丸木の側面に荒い面取りをおこない、先端を斜めに落とす。基部は径４㎝程にひとまわり細く握り柄状になっており、横槌とみることも可能であるが、全体に腐蝕が著しく加工の程度は不明である。長さ17.5㎝、幅5.6㎝、厚さ5.2㎝。120次PG86方形大土坑灰色粘土。

208　部材片。側面はゆるやかな弧状をなし、幅広の端部は断面が山形になるように、両面から斜めに削り落とす。片面には刃物傷がみられる。現存長21.0㎝、幅４㎝、厚さ1.4㎝。120次PF85井戸最下層青灰色含砂粘質土。

ii　SK8489出土木製品（PL. 122）

209　楔。割材の２面を加工し、先端を薄くしたもの。長さ13.3㎝、幅3.2㎝、厚さ2.7㎝。99次KR62土坑。

210　楔。割板材の２面を削り、先端の厚さが１㎝と厚めにつくる。長さ13.6㎝、幅3.9㎝、厚

さ2.1cm。99次KR62土坑。

iii　SK9087出土木製品（PL.123）

211　板材の両側を弧状に削り、鑿頭状の身をつくり出したもの。身の先端は、両面から削りを加え両刃につくり、柄の先端は片側のみ斜めに落とす。現存長8.7cm、幅1.5cm、厚さ3mm。110次IJ62柱掘形東寄。

iv　SK9089出土木製品（PL.123）

212　割板の1側面を斜めに落としたもの。A_2形式の斎串下端か。現存長13.0cm、幅3.1cm、厚さ2mm。110次IJ61西土坑。

213　割板の1側面を斜めに落としたもの。A_2形式の斎串下端か。現存長12.5cm、幅2.3cm、厚さ4.5mm。110次IJ61西土坑。

214　加工棒。割材の先端を薄く尖らせたもの。一端を欠く。現存長29.4cm、幅1.4cm、厚さ5mm。110次IJ61西土坑。

215　加工棒。角材の先端を削り落とし薄くつくる。現存長40.5cm、幅1.8cm、厚さ1.1cm。110次IJ61西土坑。

v　SK9090出土木製品（PL.123）

216　鳥形。表裏に墨書のある木簡の側面に削りを加え、鳥形としたもの。尾部の一部欠損。長さ10.6cm、幅2.9cm、厚さ2.5mm。110次IJ63土坑。　鳥　形

vi　包含層出土木製品（PL.123）

217　斎串。B形式。薄板の上端を圭頭状につくり、側縁に1対の切り掛けをいれる。下端は両側縁を斜めに落とし尖らせる。現存長12.2cm、幅6mm、厚さ2mm。110次IJ62暗灰色砂。

218　楔。角材の上端を丁寧に削って丸みをつけたもの。下端は切断。下端から5cm程は表面の状態が悪い。長さ15.8cm、幅2.7cm、厚さ1.5cm。110次II61暗灰色粘質土。

219　刀形。薄板の両側縁に角度をつけた面取りを加え、先端を斜めに落とし切先をつくりだす。柄頭にあたる基部は削りを加えわずかに山形につくる。長さ17.1cm、幅2.9cm、厚さ4mm。271次AR18断割トレンチ灰黒色粘土。　刀　形

220　箆。板材の側面に加工を加え、柄をつくり出す。全体に腐蝕が著しい。両端欠損。現存長14.5cm、幅1.5cm、厚さ5mm。110次II61暗灰色粘質土。

註

1）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』1974　PL.82-22、(集2447)。
2）正倉院事務所『正倉院のガラス』日本経済新聞社　1965　15～17頁。
3）渡辺誠「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』第66巻第4号　1981。久保寿一郎「編み具の研究—福岡県における考古・民具資料を中心として—」『九州考古学』第62号　1988。「編台・木錘」『原始篇』108・109頁。
4）黒崎直「斎串考」『古代研究』10　1977。
5）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』1974。
6）奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995　PL.213-101。
7）奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告』2002　Ph.229-27～30。

8）飛鳥資料館『小建築の世界』1984。箱崎和久・浅川滋男・西山和宏「平城宮東院庭園出土の八角柱と五角斗」『奈良国立文化財研究所年報1999-1』1999。
9）「C　建築雛形部材」『平城宮発掘調査報告XI』奈良国立文化財研究所　1982。藤村泉「建築模型の歴史－その製作意図－」『月刊文化財』№226　1982、など。
10）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告XI』1982　PL.129、(集6301．6302．6305～6311)。
11）奈良国立文化財研究所「南面西門（若犬養門）の調査（第133次)」『昭和56年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1982。
12）奈良国立文化財研究所「佐紀池南辺の調査　第177次」『昭和61年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1987。
13）奈良国立文化財研究所『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』1995　PL.201・Ph.265-348。
14）藤原京右京七条一坊跡調査会『藤原京右京七条一坊調査概報』1978、(集6303)。
15）藤澤一夫「覆鉢形の小土製品に就いて－古建築關係装飾具資料－」『考古学雑誌』第34巻第３号　1944。
16）奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査報告Ⅶ』1976　PL.74-199。
17）渡辺誠「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』第66巻第４号　1981。
18）奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅸ』1978　PL.57-43、(集1110)。

5　桧皮・木炭・漆膜

木製品以外の植物質の遺物として、桧皮、木炭、および漆膜がある。

桧皮は、総計2089.5g出土した。園池SG5800の埋土からは、各層全体で429.1g出土した。このほかに100g以上出土した遺構をあげると、SD5830　180.0g、SB17700　150.5g、SA9060　222.4g、SD9092　422.5g、SE9295　156.3g、SK9089　191.0gがある。

木炭は、総計600.3g出土した。園池SG5800の埋土からは各層合わせて295.3g出土したが、他の遺構も含めて全体として出土分布に傾向性は認められない。

漆膜は、上層園池SG5800Bの埋土（黒褐色砂質土）より、小片が６点出土している（PL.123)。最大のものは９×６㎝程で、厚く何層にも折りたたまれている。表面に布状の痕跡は認められない。また、赤外線による観察では、文字などは確認していない。

6 銭 貨

本報告の対象地区からは、奈良時代の銅銭２種４点、寛永通寶15点、中国の銅銭７種８点、雁首銭１点、不明銭１点の計29点の銭貨が出土した（Tab.14、PL.124･125）。皇朝銭の分類は『平城宮発掘調査報告Ⅵ』（1974、pp.97～103）に、寛永通寶の分類は『薬師寺発掘調査報告』（1987、pp.175～177）に従う（Tab.13）。

a. 和同開珎（1～3）　３点出土。和同開珎Ａ。「開」字の門構えの上端が隷書風に開いた「新和同」に属する。１がSG5800の礫層中（KS70）、２が同じく池底礫敷中（JE70）より出土。３はSB9071の柱穴掘形より出土。

b. 神功開寶（4）　１点出土。神功開寶Ｅ。銭文は「功」の旁を「刀」にし、第２画が長く延びるところから「長刀」とよばれる。「開」は門構えの上端を隷書風に開く。背面に笵傷がみられる。園池SG5800Bの築山SX8457南面の池底礫敷中より出土。神功開寶は天平神護元年（765）に鋳造を開始しており、上層池の上限を知る手がかりとなる。

上層園池にともなう神功開寶

c. 寛永通寶（5～19）　15点出土。５～11は、「寛」字の12画と13画が頂部で接し、「寶」字の最終画を「ス」字状につくる（ス寶）。BIb。12・13は「寛」字の12画と13画の頂部が離れ、「寶」字の最終画を「ハ」字状につくる（ハ寶）。背面に「文」字をもつ文銭とよばれるもの。AⅡc。14は、不鮮明であるが背面に「元」字をもつ。15は14に似るが背面に文字のないもの。19は四文銭で背面に11波の波文をもつ。明和６年（1769）以降のものである。CⅢc。

寛永通寶は多くが表土、床土、遺物包含層からの出土である。14・15は園池SG5800の中央部（JA71・JB66）灰褐色土中から出土しており、この地区が近世にいたるまで窪地状を呈していたか、開削された可能性を示唆するものである。また16は、築山SX8457の覆土から出土。

d. 中国銭（20～27）　８点出土。唐銭である乾元重寶をのぞくといずれも北宋銭である。20は乾元重寶。唐粛宗乾元１年（758）初鋳。21は真書の至道元寶。北宋太祖至道１年（995）初鋳。22は真書の景祐元寶。北宋仁宗景祐１年（1034）初鋳。23は真書の皇宋通寶。北宋仁宗寶元１年（1038）初鋳。24は真書の熙寧元寶。北宋神宗熙寧１年（1068）初鋳。25・26は篆書の元豊通寶。北宋神宗元豊１年（1078）初鋳。27は行書の元祐通寶。北宋哲宗元祐１年（1086）初鋳。

中国銭の多くは、表土、遺物包含層および上層池SG5800Bの堆積土である暗灰色粘質土層、灰褐色砂層より出土している。皇宋通寶は、東面大垣SA5900上の土坑出土。

e. 雁首銭（28）　28はキセルの雁首部分を扁平に潰したいわゆる雁首銭である。

Tab. 13　寛永通寶の分類（奈文研1987）

背文の有無	「通宝」の字	「永」の字
Ａ：背に文字あり	Ⅰ：通宝 「コ頭通」と「ス宝」	ａ：永 「二水永」
Ｂ：背文なし	Ⅱ：通宝 「コ頭通」と「ハ宝」	ｂ：永 「通常永」
Ｃ：青海波あり	Ⅲ：通宝 「マ頭通」と「ハ宝」	ｃ：永 「四画目の筆頭にかぎをもつ永」
Ｚ：不明	Ｏ：不明	ｏ：不明

Tab. 14　出土銭貨一覧

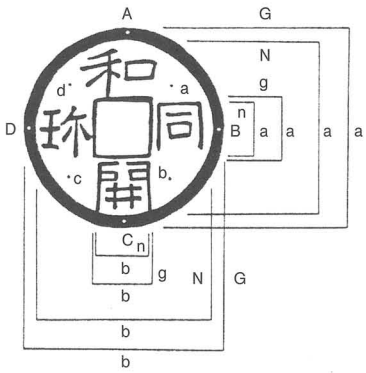
番号	銭種	次数	小地区	遺　構	層位	外縁外径 平均G	外縁内径 平均N	内郭外径 平均g	内郭内径 平均n	外縁厚 平均T	文字面厚 平均t	重量 (g)
1	和同開珎	99	KS70	SG5800	礫層	24.60	21.15	7.60	6.68	1.30	0.40	2.70
2	和同開珎	99	KP69	SG5800	池底礫敷	24.23	20.55	8.60	6.35	1.29	0.35	1.13
3	和同開珎	110	IF71	SB9071	西柱掘形	24.28	21.08	7.93	6.90	1.34	0.72	3.17
4	神功開寶	99	JE70	SG5800	池底礫敷	24.93	21.30	8.45	7.28	1.48	0.77	3.29
5	寛永通寶	99			表土	24.58	19.25	6.98	5.95	1.08	0.59	3.04
6	寛永通寶	99			表土	25.65	20.35	7.58	6.28	1.20	0.63	3.32
7	寛永通寶	99			表土	24.35	19.28	7.13	5.60	1.18	0.62	3.43
8	寛永通寶	99			表土	24.85	20.00	7.35	6.70	1.12	0.45	2.93
9	寛永通寶	99			表土	25.25	20.13	7.53	6.03	1.10	0.56	2.48
10	寛永通寶	99			表土	24.55	20.23	7.28	5.83	1.30	0.75	3.04
11	寛永通寶	99			表土	23.35	19.28	7.43	6.35	1.32	0.92	3.54
12	寛永通寶	99			表土	25.35	20.70	7.30	6.13	1.28	0.59	3.18
13	寛永通寶	99			表土	25.55	20.38	7.18	6.18	1.23	0.48	3.15
14	寛永通寶	99	JA71	SG5800	灰褐色土	22.45	17.85	7.68	6.48	1.03	0.71	1.80
15	寛永通寶	99	JB66	SG5800	灰褐色土	22.78	18.95	8.40	6.58	1.24	0.80	2.29
16	寛永通寶	99	JH68	SG5800	石組覆土	24.48	19.78	7.80	6.48	1.29	0.79	1.42
17	寛永通寶	110	IP61		暗褐色土	23.78	20.35	7.68	5.45	1.39	0.99	2.84
18	寛永通寶	120	PF92		床土	—	—	—	—	1.03	0.60	(0.94)
19	寛永通寶	120	P-V		床土	28.18	20.88	8.25	6.60	1.28	0.98	4.78
20	乾元重寶	99	KN67		暗灰色粘質土	23.68	20.25	7.70	6.95	1.18	0.47	2.16
21	至道元寶	99	JH65		灰褐色砂質土	24.18	19.08	7.08	6.33	0.99	0.71	2.21
22	景祐元寶	99	KO69	SG5800	暗灰色粘質土上面	25.03	19.73	7.05	6.03	1.00	0.66	2.52
23	皇宋通寶	245-2	CB17		灰褐色土坑	24.70	19.78	8.85	7.55	1.06	0.78	(1.11)
24	熙寧元寶	99	表土			23.98	19.55	7.88	6.28	1.38	0.89	3.76
25	元豊通寶	99	KQ61		暗灰色粘質土	23.83	19.35	7.83	6.83	1.23	0.70	2.83
26	元豊通寶	120	PG80		暗褐色粘土	23.85	18.78	7.88	6.33	1.23	0.79	1.84
27	元祐通寶	120	PG80		暗褐色粘土	24.63	20.50	8.78	6.90	1.32	1.03	2.72
28	雁首銭	302	BI35		橙灰褐色粘質土	22.60			4.05			2.48
29	不明銭	302	BI35		橙灰褐色粘質土	(22.65)			8.00			(1.24)

銭貨の各部測点については右のとおりである。

外縁外径 $G = \frac{Ga + Gb}{2}$，　外縁内径 $N = \frac{Na + Nb}{2}$，

内郭外径 $g = \frac{ga + gb}{2}$，　内郭内径 $n = \frac{na + nb}{2}$，

外縁厚 $T = \frac{A + B + C + D}{4}$，　文字面厚 $t = \frac{a + b + c + d}{4}$



7　金属製品

本報告の対象地区から出土した金属製品には、銅製品および鉄製品がある。破損品や銹化の著しいものが多く図示し得たものはわずかである（PL. 126）。

a. 銅製品（1～3）　銅製品には、隅金具、飾金具、笄がある。

隅　金　具

1は隅金具・帖角金具などと呼ばれ、箱や机、厨子、屏風といった調度品の角や面を補強するための金具である。『延喜式』では「肘金」の名で呼ばれている[1)]。本来はL字形に曲がる角金具であるが、中央にあたる部分で折損している。先端は花弁形につくる。中軸線上に等間隔に3箇所片面から釘穴を穿つ。基部は2孔ある。鍍金の痕跡をとどめるが、隅金具にしばしばみられる線刻・魚子等による文様はない。現存長11.4cm。幅1.6cm。厚さ1mm。SG5800。99次JE61灰色粘質土。2は花形飾り金具。厚さ0.5mmの銅板を梅花形につくったもの。中央に1孔をうがつ。長さ2.3cm、幅1.9cm。SG5800。99次JD62灰褐色土。3は笄。完形の平形笄である。頭部に耳掻をもちゆるやかな肩から断面が低い凸状を呈する胴部へいたる。竿はわずかに内湾ぎみに細め穂先を尖らせる。胴部地板は頂部に蕨手、上辺を眉形、下辺を木瓜形にし、紋に縁取りをもつ溝をつくる。紋の周囲は魚子で埋める。裏面は無文。長さ17.5cm、幅1.3cm。SG5800。99次KL78暗灰色粘質土。

b. 鉄製品（4～11）　鉄製品には刀子、鏨、釘、鎌などがある。

4は刀子の刃先断片。銹化が著しい。現存長5.5cm、幅1.4cm。SA9325。120次PP88西南隅柱抜取穴。5は鏨。断面1.2cm角の方柱状の鉄棒の先端を二面を斜めにし先端を薄くしたもの。上面にまくれが認められる。長さ11.8cm。SG5800。99次JG67灰褐色土。6～9は釘。いずれも基部の断面が方形となる角釘である。6は2.8cm程の頭がつきT字形を呈するもの。長さ12.1cm。SG5800。44次LG74池黒色土。7は頭をもたない切釘状のもの。長さ10.1cm。302次BK33上層バラス。8は断面が正方形の基部をもち頭を短く折るもの。長さ9.2cm。9は幅1.2cmの扁平な基部をもち頭を短く折り曲げたもの。長さ8.9cm。8・9はともに280次南AJ17斜行溝2出土。10は鎌。背がわずかに湾曲するもので、茎の先端を目釘を受けるために曲げている。刃部現存長9.2cm、刃幅1.8cm。SG5800。99次JA76東西畦暗灰色砂土。11は板状不明品。縁部を断面三角形状につくる。現存長4.5cm、縁部厚9mm。SG5800。120次PJ75池暗灰色砂。

註

1)　西川明彦「8世紀の透彫金具の製作について－正倉院宝物『幢幡鉸具第1号金銅華鬘形裁文』の製作工程を中心に－」『古代文化』第51巻第8号　1999。

8　鍛冶・鋳造関係遺物

本報告の対象地区から出土した鍛冶・鋳造関係遺物としては、鞴の羽口、銅塊、鉱滓がある(PL. 127)。

a. 鞴羽口（1・2）　鞴の羽口は4点出土した。いずれも破片であり、このうち遺存状態の良好な2点を図示した。ともに先端部分の破片である。1は円筒状に復元されるもので、先端にガラス化した部分が厚く融着する。推定内径2.4cm、同外径7.1cm。SA17769。280次南AN18柱穴1。2は1に比べて器壁が薄く先端のすぼまるもので、推定内径2.4cm、同外径5.5cm。SD9281。120次QB83南北溝。1・2ともに外面に長軸方向に沿って板状のものによる圧痕が認められ、断面が多角形状となる。これは成形時に簾状の道具を用いたためであると推定され、平城京に通有の特徴であり、8世紀を中心とする羽口の基本的な製作技法であることが指摘されている[1)]。外面は灰褐色、内面は口唇部から2cmほどが灰赤褐色、以下が明橙褐色を呈する。

b. 銅　塊（3）　1点出土。一端に曲線状の外縁をのこすが、他の外周は割れ口状になる。一面はほぼ平坦であるが、他面はゆるやかな膨らみをもち断面は皿状を呈する。後者の面は白みがかり、一部に黒色化した部分がある。120次PC90灰褐色砂土。

c. 鉱　滓（4～13）　10点合計922.46g出土した。図示した2点を除くといずれも小塊である。量的に乏しく分布の傾向を述べるにいたらないが、110次IK63地区灰色バラス層付近に比較的集中している。

註

1）松村恵司「鞴羽口」『法隆寺防災施設工事・発掘調査報告書』法隆寺　1985　159・160頁。

Tab. 15　出土銅塊・鉱滓一覧表

番号	種別	次数	地区	遺構・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
3	銅塊	120	PC90	灰褐色砂土	5.7	3.7	0.9	82.72
4	鉱滓	302	BG34	橙褐色粘質土	8.6	7.3	2.6	162.71
5	鉱滓	276	AI26	SA5505・築地ヤラレ	9.7	8.4	3.5	478.37
6	鉱滓	99	JB73	SG5800・灰褐色土	4.2	3.4	2.5	42.62
7	鉱滓	110	ID71	灰褐色土	4.1	2.9	2.7	23.46
8	鉱滓	110	II72	茶褐色土	6.6	4.1	2.8	64.49
9	鉱滓	110	II71	褐色バラス（上部）	5.5	4.2	2.6	44.06
10	鉱滓	110	IK63	灰色バラス	3.0	2.6	2.4	16.53
11	鉱滓	110	IK63	灰色バラス	3.3	2.6	2.2	20.39
12	鉱滓	110	IK63	灰色バラス	4.8	3.5	2.4	24.07
13	鉱滓	110	IK63	灰色バラス	5.1	4.3	2.7	45.76

9　石製品

本報告の対象地区から出土した石製品には、剥片類および砥石がある（PL. 128）。

a. 剥片類（1～3）　1・2は水晶片である。1は台形状の小片で、一面には結晶の柱面をのこし、一面は剥離の腹面をなす。長さ1.2㎝、幅8㎜、厚さ3㎜、重さ0.26g。110次IJ64灰色バラス。2は両面ともに多数の剥離面をもつ。長さ2.0㎝、幅1.1㎝、厚さ6㎜、重さ1.14g。SB9072。245-2次BP18柱穴1掘形。3はサヌキトイドの剥片。表裏ともに腹面をなす。側縁にも剥離がみられ、一部にわずかではあるが自然面をのこす。長さ3.2㎝、幅2.8㎝、厚さ8㎜、重さ7.72g。SB9072。110次IH63南南北塀掘形。

b. 砥　石（4～7）　4点が出土。4は方柱状をなし、表裏に擦痕がみられる。長さ8.1㎝、幅3.9㎝、厚さ2.1㎝、重さ89.69g。流紋岩。SG5800。99次KQ76石敷。5は扁平な石材をもちい柳葉形の身に円形のつまみがつくもので、身の下半は折損している。つまみの中央には一面に厚みの中程まで回転穿孔による円錐形の窪みがおよぶが、反対側の面にはアタリのみをとどめる。有孔の下砥を意図したものと思われるが、孔は貫通しておらず、実際はつまみの基部に紐を巻いて使用したのであろう。長さ9.1㎝、幅3.5㎝、厚さ8㎜、重さ37.86g。頁岩。SG5800。99次JD64黒褐色バラス。6は方柱状を呈し、一面は使用により曲面となる。上下の小口面には石材の切り出しあるいは分割に関わると考えられる条線がみられる。6のような黄褐色を呈する流紋岩を素材とし、方柱状あるいは梯形状となる砥石は、平城京内で多用されていたことが知られている[1)]。長さ7.3㎝、幅3.8㎝、厚さ3.1㎝、重さ120.02g。流紋岩。284次AG35東西小溝。7は舟形を呈する扁平なもの。一面は平坦面をなし、一面は船底状の曲面となる。長さ11.6㎝、幅3㎝、厚さ1.1㎝、重さ68.39g。頁岩。302次BF35床土。

註

1)　奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』1989。奈良国立文化財研究所編『西隆寺跡発掘調査報告書』奈良市教育委員会　2001、など。

イラスト　早川 和子　氏